
九の末裔 ～寒椿～

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九の末裔 ～寒椿～

【Nコード】

N3683I

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

かつて、人は力を得るために、妖怪と契り、子をもうけた。その一族の末裔として生まれた双子、直久と和久。彼らが十六歳になった今、ゆっくりとソレは目を覚ます。

《式鬼を操り、魑魅魍魎と戦う高校生陰陽師のどたばたコメディー。ラブファンタジック・ホラー！九の末裔シリーズ序章》

ブログ

こちらは『九の末裔』シリーズ序章となります。

本編は『九の末裔 春眠』
<http://ncode.syosetu.com/n1840n/>から始まります。

どうして、私じゃないの？

どうして、あの子なの？

同じ顔、同じ声なのに。

私のどこがダメなの？

なぜ？

私は何のために生まれてきたのだろう。

私はあの子の鏡ではない。

私はあの子の影ではない。

私は私。

私はここ。

ここにいますから。

だから、私を見てよ！

どうして私は二人いるの？

第一話 ボタンくらい押せないのか

「やつべ〜!! すごい、雪っ!!」

直久なおひさは、バスの車内中に響き渡る素っ頓狂な声を上げた。まるで初めて雪を見た子供のように、バスの窓に両手を張り付かせて、はしゃいでいる。

彼の声に驚いた他の乗客が、じろじろと視線を送るも、彼はまったく気に留める様子もない。かわりに頬を赤らめたのは、直久の隣の席に座る双子の弟、和久かずひさのほうだった。

「ちよ、ちよつと直ちゃん……こ、声がでかいよ」

周囲の刺す様な視線をかくぐりながら、和久が小声で言う。

「だってさ! 見るよこの雪!! ハンパねえーっ!!」

再び大音量でそう言つて、弟を振り返つた直久の顔は、キラキラと輝いていた。瞳の中に、お星様まで見えそうなほど。

「……う、うん。確かにすごいね。すごいけど……」

「だろ〜!? やつべ〜! あの雪の中に倒れ込んだらオレの体の輪郭で、ずぼつと穴あくんじゃねっ!? やつてみて〜!!」

窓の外の銀世界に、完全にとりこになった兄に、返す言葉が見つからない和久だった。

(東京生まれだから……しょうがないのかな……)

確かに、和久だつてバスが走る道路の両側に、壁のようにうず高く積もられた雪には、驚きを禁じえない。その高さは車高を軽く超えている。しかも日光が反射して、ガラス細工のように輝いて見えた。

そんな美しい光景に目を奪われるのはわかる。わかるが、高校生なんだからもう少し空気読もうよ、と思わないでもない。

「ついてえっ!!」

突然、隣の直久が声を上げたので、窓の外を見ていた和久はぎょつとなつた。兄は頭を右手で押さえ、勢いよく背後の座席を睨みつ

けている。

「つてめ、おいこら、ゆずるっ！！ 何しやがんでっ！」

「……黙れ」

「ああん！？ オレ様の大事な頭を殴つといて、なんだその言い草はっ」

直久が、いよいよ身を乗り出すようにして、後ろの席の従兄弟に眼をつけている。それでようやく、後ろの席から手を伸ばした従兄弟のゆずるが、直久の頭部を殴ったらしいと和久は推測した。凶器は、現在も涼しげな顔で読み続けている本、『燃えよ剣』（司馬遼太郎著）のようだ。

「すこしは利口になったか？」

まったく本から目を離さずに、ゆずるは足を組みなおした。

「はあ！？」

「……んなわけないか」

「んがあああああ」

頭に血が上りきった直久は、ついに猛獣のような唸り声を上げ、ゆずるの手の中から本を奪い取った。

その瞬間。

「あ……」

小さな驚きの声を上げたのは、ゆずるではない。もちろん直久でもない。

和久は思わず窓の外を指差し、すくつと立ち上がった。

「……どした、カズ？」

直久がきよとなつて、固まったまま言う。すると和久は、けらけらと笑った。

「すぎちゃった」

「え？」

「降りなきゃいけないバス停」

「……え！？」

「あははは」

「……………」

「どうしょつか」

そして、再び大音量の直久の、「ええええーっ!？」という絶叫が駆け抜けていった。

ぶおおーっと、表現したくなるような音をたててバスが三人から離れていった。明らかに体に悪そうな排気ガスの黒煙を吸い込んで、思わず三人ともにむせ返る。

「降車ボタンも押せないのか、お前は」

ゆずるははき捨てるように言い、バス通りから山の小道へと入っていく。その足取りには迷いが無い。

「はあ!? 何でオレのせいなんだよ!？」

そのゆずるの後を、怒鳴りながら直久は続いた。最後に、和久がキョロキョロと辺りをうかがいながら、続く。

「ていうか、オレは今回の依頼の場所知らないんだから、バス停の名前なんて知るわけないだろうが」

「たく、これだから……。直久を連れてくるとロクなことがない。

何だって連れて来たんだよ、カズ」

「って、おい! 人の話を聞けって!!」

眉間のしわを深くしたゆずるが、直久を完全に無視して、和久を睨んでいる。その身もふたもない言い方に、和久も思わず肩をすくめた。

「あはははは。直ちゃんだって、色々役に立つんだよ」

和久がフォローを入れると、ゆずるは、ちっと舌打ちをして、再び歩き出した。

この従兄弟は、決して直久を嫌っているわけではない。ただ、心配しているだけなのだ。

(言葉が足りないんだよな、ゆずるは)

つまり、『何だつて連れてきたんだよ　今回の依頼は、自身の命も危ういつていうのに』と、言いたいだけなのだ。

だが、言葉を言葉どおりにしか受け取らない、双子の兄。彼の性格上、直球しか受け取れない、投げられない。さらに、血の気も多い。

そのため、二人は顔をあわせれば、喧嘩になつてしまふ。いや、喧嘩しているつもりなのは直久だけで、ゆずるには、キャンキャンと周りで犬が吠えているくらいにしか思っていない節がある。そのゆずるの態度が、さらに直久のカンに触っているのだが、それも分かつていてワザとやっているように見える。

（まったく、危ないから来るなつて言えればいいのに。『邪魔だから来るな』とか言うから、直ちゃんも意地になつて、ついて来ちゃつたんじゃないか）

和久は苦笑いを浮かべた。

だが、と和久は小さくため息をついた。今日の依頼は、確かに簡単ではなさそうだ。それはすでに肌で感じている。

ビリビリと電気が走るような鋭い靈氣と息苦しさ。まるで3人の行く手を阻むかのように、前方から吐き気をもよおしそうな生暖かい風が吹いてくる。どれも普通の人間なら感じとれないものだ。

そう。彼は生まれつき不思議な力を持っている。いわゆる靈能力というものだ。これは和久だけではなく、両親、姉にいたるまで皆、性質や特技は異なるが、多少なりとも靈感をもつ。

和久の家族だけではない。従兄弟のゆずるもそうだ。というより、ゆずるの生まれた九堂家こそが本家だ。その本家である九堂家は、分家を含む、一族のなかでもずば抜けて強力な能力をもっており、ゆずるは一族の頂点に立つ九堂家の次期当主であつた。

今回の依頼主は、この雪国の山奥のペンションのオーナー。死んだ少女の幽霊が出る、という相談を受け、ゆずるが担当することとなつていた。

（僕なんかより、よっぽどゆずるの方が能力は上なんだけどね）

本当なら、ゆずる一人で十分だろう。だが、今はダメだ。

今は一人で行かせるわけにはいかない。

和久が、わずかに口端に力を込めた時だった。前方を歩く直久が、もつともな疑問を投げかけてきた。

「んで、こつちで、道はあつてゐるのかよ」

一行は、ゆずるを先頭に、ずんずんと山深くに入り込んでゐる。

そもそも、本来のルートは外れているはずだった。バス停を降りそびれ、そのバス停に戻らずに林道へと足を踏み入れたのだから、依頼書と一緒に同封されていた地図に示されたルートを今歩いているはずがない。それはいくら『残念な頭』とゆずるから称される直久の脳でも、わかることだ。生い茂る木々が密になり、足元を照らす日光が心もとなくなつて来たため、不安になつてきたのだろう。

「……黙つて歩け」

振り返ることなく、ゆずるが返事をした。

「地図も見ないで、道が分かるのかつて聞いてんだよ」

苛立ちのこもった声で直久が畳み掛ける。

「こんな雪山で、迷子になつたらどうすんだよ。おまえ、適当に歩いてるんじゃないだろうなあー」

「……」

「おーい、まさかホントに適当かよ!」

「僕も、こつちだと思つよ」

このままでは、また言い争いになると判断した和久は、二人の会話に口を挟んだ。彼の向ける包み込むような笑顔で、直久の怒りと不安は鎮火したようだ。

「なんか感じるのか?」

「うん、すごいのを」

「……そんなに、今回やばそうなのか?」

「ゆずるに聞かなかつたの?」

「あいつが俺に何を教えてくれるつて言うんだよ」

「えっ。じゃあ、何も知らないでついて来たの?」

コクコクと頷く直久に、和久は明らかな呆れ顔をして見せた。

「あのね」

和久のゆっくりと話し出した。

遡ること数百年前、ここの土地の村人は山の神に対して、生け贄を捧げていた。そのおかげで、1年の大半を雪に覆われるこの村でも栄えることができたのだと言う。

「その生け贄は代々、今から行く家の娘になると決められていたらしいんだ」

「今から行く家って、ペンションか？」

「そうだよ。何でも、生け贄に娘を差し出す代わりに、他の村人から多額の金を受け取っていたらしいんだ。それで現在においても、余るほどの土地を持っているらしいよ。で、タダあるだけではもったいないからって、ペンションを始めることにしたんだって」

「へー」

あんまり興味がなさそうな返事だな、と内心思いながらも、和久は続けた。

「元々あった古い屋敷を改築して、数年前にオープンしたらしいんだけど。……出るんだって」

「出る？」

そこで初めて直久は真剣な表情になって、和久を振り返った。

「出るって何が？」

「生け贄にされた少女たちの幽霊が！」

「げっ」

「そのオーナーの話だね。そのせいで、お客が全然来なくなっちゃったんだってさ」

「ま、普通そうなるな。で、困っちゃって依頼して来たってわけだ」
「そんなとこ」

すると、急に直久は小声で弟に耳打ちした。

「大丈夫なんだよな……ほら、だって、ゆずるは今……」

「今のゆずるは確かに力が不安定だけど。でも大丈夫だよ」

（きつと、ね）

続く言葉を和久は飲み込んで、微笑んだ。しかし、いくら和久が軽やかに華のような笑顔で言っても、直久は顔を引きつらせるしかなかったようだ。

（あれ？ あんまり不安にならないように言っただつたんだだけだな、おかしいな）

和久は、ははは、っと笑った。

でも笑ってられるのも、今のうちかもしれない。そう思いながら、和久は前方を見つめた。

彼の目には、確かに見えていたのだ。前方の林の中に“この世のものではない”黒くおぞましいモノが立ち込めているのを。

直久の前に、その洋館がその姿を現すまで、バスを降りてから二十分もかからなかった。

「ホントについたよ……」

ごくりと直久の喉が鳴った。

（地図も見ないで、山道を……なんで着くかなあ……）
理解できない。

正直、双子の和久と、従兄弟のゆずるのすることには、時々、いや、いつもついていけない。

今回だって、なぜ目的地がわかったのかと問いかけたところで、『感じたから』とか『見えたから』とか言うに決まっている。

そこで、何が？ と聞いてはいけない。

怨霊だとか、悪霊だとか、霊気だとか、浮遊霊だとか、呪縛霊だとか、動物霊だとか……。とにかく、現代科学では証明できないようなことを、さらりと言つてのけるに違いないのだ。

（下手したら遭難だつつの……無事に、到着したからいいものの）
直久は肩をすくめた。

それにしても、なんて仰々しいペンションなのだろう。中世のヨーロッパを思わせる洋館は、古びて四方八方から伸びるツタが巻きついている。しかも、直久の想像をはるかに上回る、広大な敷地だ。庭も建物も恐ろしく広い。今、三人が立っている門から見えているエントランスの扉が、なんと遠くに見えることが。

（こりゃ、ペンションというより城だな……）

圧巻の一言だった。

他の二人も、ペンションの広さに圧倒されていることだろうと、右隣にいる和久に視線を送れば、和久は両肩を抱くようにして、手でさすっている。それを見て、直久は眉をひそめた。

（なぬ……？）

和久は悪寒を感じているらしい。物心ついたときから、直久には見慣れた光景だが、和久が“何か”を感じた時にとる行動なのだ。

まさかと思い、左隣のゆずるを振り返る。

くつきりとした二重の大きな瞳で洋館を睨みつけているゆずるは、眉をよせ、険しい表情で視線を右に左に走らせていた。まるで舞うように飛ぶ昆虫でも追っているかのような、眼球の動きだ。確実に“何か”を見ている。

（また、オレだけのけ者かよ）

彼らの一族は、ほぼ全員が強い霊能力を持っている。一族は、その血筋を絶やさぬように、薄くならぬように、一族間の婚姻が原則になっている。だから、一族は九堂家を筆頭に、多くの分家にいたるまで、ほぼ全員、なんらかの能力を持っている。

そう ほぼ全員。

（何でオレだけが、何の力も持ってないんだろ。双子の和久は強い能力を持ってるって言うのに、オレだけ何で……）

彼が、十六年の人生の中で、幾度となく繰り返した自問。答えは見つからない。一族の長老たちですら、皆目検討がつかないのだ。ある日突然、能力が開花する者もいるというから、気にすること無いよ、と和久は慰めてくれたが。

でも……。

何も感じない。

何も見えない。

自分だけが、役に立たない。必要の無い人間だと言われているような気がする。

生まれてくる必要があつたのは和久だけで、自分はいらなかったのではないだろうか……？

「さあ、いこう」

和久が促した。その顔からは、完全に笑みが消えている。ゆずるの顔にも緊張が見える。

三人はもう一度だけ、顔を見合わせる。そして、一呼吸おいた後、ゆずるがペンションの門を押した。

ギギギ……。

鉄製のさびた門が、まるで来訪者をあざ笑うように鳴いた。

第二話 節操無いな

「どうぞ」

差し出されたカップを受け取って、さっそく暖かいコーヒーを飲もうとした直久は、自分を執拗に伺う視線に気づき、顔を上げた。ふわふわとした綿菓子のような印象の可愛らしい少女と目が合う。少女は、直久と視線が交わると、ぱっと目を逸らしてしまった。自分たちよりも幼いからだろうか、初々しいそんな姿も、直久を虜にする。

「双子は珍しいですか？」

柔らかな笑みを湛えながら、直久の隣から和久が問う。

「こら、八重やえ。そんなにジロジロと見つめたら失礼でしょう」

お茶菓子を持った、別の少女が部屋へ入ってきた。こちらの少女も、息を呑むほどの美人だ。八重と呼ばれた少女と、どこことなく似ている。彼女の姉だろう。

だが、妹とは、その纏う雰囲気が違う。妹の方は柔らかな暖かな雰囲気で、春の陽だまりのようなイメージだが、姉の方はどこか物悲しく、切れ長な瞳がクールな印象を持たせている。

「いいんですよ。慣れてますから。一卵性双生児なので、よく似ているでしょう？」

「ホントに見分けがつかないです」

八重は、兄弟へ交互に視線を送る。

「僕が弟のおおともがすひさ大伴和久です。こちらが、兄の直久なおひさ。そして、従兄弟の九堂くちうゆずるです。……えっと」

「あ、ごめんなさい。私は、このペンションのオーナーの娘の、山吹ぶきよしのです。こちらは妹の八重」

すると、それまで口を閉ざし、興味なさそうにあさっての方を向いていたゆずるが、ぼそりとつぶやいた。

「桜か……」

「え？」

よしのが聞き返すが、ゆずるはそっぽを向いたまま、返事をしやうとしない。姉妹たちは、困ったように顔を見合わせた。

（たく、愛想がなさ過ぎだろう！ 今に始まったことじゃないけどさ）

直久は、ゆずるの冷たい態度に眉をひそめる。が、先にフロアに回ったのは和久のほうだった。

「気にしないでくださいね。仕事の前のゆずるは、いつもピリピリしているんです」

「そうですか……」

少し表情を和らげた少女たちだったが、どこかすっきりしない気がするのは直久だけだろうか。

何か一言、ゆずるに言ってやろうと口を開いた時だった。応接間のドアが開いて、男性が姿を見せた。

「すみません、お待たせしました」

このペンションのオーナーであり、依頼人の登場であった。

オーナーが娘たちに視線を送ると、姉妹は静かに応接間を後にした。これから、詳しい依頼の説明があるのだろう。

ならば……。

（オレも退散するか）

すくつとソファァーから立ち上がって、直久も部屋を出て行こうとするので、和久がその背中に声をかけた。

「直ちゃん……？」

「オレが聞いたところで、意味ねえし。雑用係は外で待機してます」

「雑用だなんて……」

「終わったら呼んでくれ」

ひらひらと手を振って、直久は部屋を後にした。

実のところ、退屈なオッサンの話を聞くより、女の子とお近づきになるほうが、建設的だと判断したのだ。

野生のカンというか、男のカンを働かせて、難なくテラスにいる

八重を発見した。植木の水をあげている姿は、見とれるほど可愛い。
しい。

「八重ちゃん」

「あ、えっと……」

双子のどちらか見分けがつかないのだろう。八重は困ったように
うつむいてしまった。

「直久。兄の方だよ」

「ごめんなさい。見分けがつかなくて」

「気にしないで、それが普通だから」

彼女のそばにある白い椅子に腰掛けると、直久はにっこりと微笑
みかけた。直久が、これが一番の自分のキメ顔だと思い込んでいる
顔だ。

「ありがとう。直久さんは、お父さんとお話しなくていいの？」

「ああ。いいんだよ。あつちはあの二人にまかせておけば」

「そう……」

突然、彼女の顔が曇り、今にも大粒の涙の雨が降りそうになる。

キメ顔で、彼女の心を落とそうと思っていたのに、まさか彼女の
テンションが落ちるとは思っても見なかったので、直久は慌てて彼
女の顔を覗き込んだ。

「ど、どうしたの？」

「……………」

「八重ちゃん？」

直久は、どさくさにまぎれて、八重の細い肩に手を伸ばそうとし
た時だった。逆に八重の方が、直久の胸に飛び込み、泣きじゃくり
始めたではないか。

「ええええ！？　ちょ、え？　えええ！？　八重ちゃん！？　あの、

その、落ち着いて！　オレまだ何もしてない！！」

おたおたとしながら、どうすることも出来ずに、直久はしばらく
立ち尽くした。時折、彼女の背中を、ぽん、ぽん、と叩きながら。

「ごめんなさい。洋服汚しちゃったね」

「いいのいいの」

すっかり目を腫らした八重は、照れ隠しのような、泣き笑いを見せた。

「それより、どうしたの？ オレでよければ話を聞くよ」

八重は、少し考えてから、再び口を開いた。

「お姉ちゃんが……」

「えっと……よしのちゃん？」

八重はコクンと頷く。

「お姉ちゃんが、このところずっと変なの」

「変？」

直久は、応接間で会ったよしののことを思い返してみた。自分と年は変わらないように見えたが、実にしつかりとしていて、大人びた印象だった。どこも、おかしいところなど思い当たらない。

どういう意味だろう、と、八重の返事を目で促す。

「初めて、変だと思ったのは、お姉ちゃんの十六歳の誕生日だったの。三人で夕ご飯を食べていて、台所に飲み物を取りに行ったお姉ちゃんが、戻ってこないから様子を見に行ったのね。そしたら」

「恐ろしいものでも見たような表情で、八重ちゃんは言葉を切った。その時のことを思い出して、声を詰まらせたのかもしれない。」

「そしたら？」

大丈夫だよ、と直久は八重の肩に手を置いた。

「そしたら、お姉ちゃんは……固まって動かなくなっていたの」

彼女の話によると、よしのは飲み物を取ろうと、冷蔵庫に手をかけ、ちよつとかがんだ姿勢のまま動かなくなっていたそうだ。いくら呼んでも、揺すっても反応がなく、それはまるで

「人形になっちゃったみたいだった……」

魂の抜けた、イレモノ。

（なんてこった……）

直久の背筋を、ぞくりと冷たいものが走っていった。

（いや、でもまで。さっきは普通に動いていたじゃないか）

「しばらくして、もとにもどったんだね？」

直久の問いかけに、八重は首を縦に振る。

「私がお父さん呼びに行っている間に、もとにもどったの。でも、その日から、度々お姉ちゃんはおかしくなって……動かなくなる時間回数も、増えていつてる気がするの」

「そうか……それで、オレたちが呼ばれたんだね」

（きつと二人も、オッサンから詳しい話を聞いているんだろうな……これは結構厄介かもしれないぞ）

すっかり直久の口からため息がこぼれる。

八重はそれを過敏に聞き取り、不安げに直久を見上げた。

「お姉ちゃんは……治るよね？ 治してくれるよね？」

こんなとき、直久は自分の無力さを痛感する。

役に立たない。

いらない。

何で生まれてきたんだ。

自分自身にそう言われている気がする。

「大丈夫。オレの従兄弟と弟がきつとよしのちゃんを治すから」

苦笑いにならずに、自然に笑えたかな、と少し思ったその時。人の気配がして、和久とゆずるがテラスに姿を現した。

「どうやら仕事の話が終わったらしい。笑顔でこちらに近づいてくる。」

「山吹さんが今日泊まる部屋に案内してくれるって……って、なにその手……」

和久の刺すような視線が、八重の肩に寄せられた直久の手に注がれている。

「うわっ、いやっ、これは……！ ねっ……！」

「……………」

タイミングよく、八重ちゃんが頬を染めたので、ますます和久の目が細くなった。

「節操ないな。行くぞ、カズ」

ゆずるのはき捨てた容赦ない一言よりも、軽蔑するような視線を向けたままゆずるの後を追った和久の姿に、直久は戦意すら削がれ、がつくりと肩を落とした。

「……あの」

「大丈夫、こういう扱いには慣れてるから。」

「はあ………」

「さて、オレも一緒にいつてくるね」

「はい……お姉ちゃんを、よろしくお願いします」

力なく笑い、直久はテラスを後にした。

第三話 その壁にたくさんの目が！

直久たちが案内されたのは、屋敷の二階のふた部屋だった。ひと部屋はゆずるに、その右隣のひと部屋は双子にと、用意されていた。右側の部屋に入り荷物を置くと、直久はベッドの上に飛び込む。ほど良いスプリングが効いて、寝心地がすこぶる良い。セミダブルだろうが、両手両足をめいっぱい広げても、まだ余裕がある。

（極楽極楽）。コレに温泉と、ウマイ飯とくりゃ言っことないね！）

まるで縁側の猫のように伸びている直久を優しく見守っていた和久が、おもむろに今回の依頼の詳細を説明し始めた。

直久は特に手伝えることが無いので、知っていなくてはいけない事情というものは無い。それでも、面倒がらずに話してくれる。和久らしいといえば和久らしい。

「なんでも、この家は代々、長女が十六歳になると生け贄としてさげていたらしいよ」

だが、科学の栄える現代において、神様の崇りをおそれて、人身御供をしようと考える者はない。

いつしか、生け贄など必要とされなくなり、忘れられていった。

人身御供のあったという事実も、生け贄にされた少女たちの存在も。

ところが、それらは、この家の者たちにとっては、遠い記憶のものにはならなかった。

人身御供をやめてからというもの、この家に生まれた長女は、かつて生け贄に出されていた年齢になると、生気が抜けたようになってしまうのだという。何に対しても反応がなく、自ら動こうとしない。まるで。

「人形のようになってしまいうらしい」

直久はごくりと唾を飲み込んだ。八重から聞いていた話と同じだ。

「なんでも、山吹さんの実の妹さんも、十六歳になったその日から様子がおかしくなったんだって」

つまり、このオーナーは自分の娘が、今のように抜け殻になるの予感がしていたのだ。自分の妹と同じようになるかもしれない。そう恐れて16年間を過ごしてきたに違いない。

「……それで……妹さんはどうなったんだ？」

直久は、恐る恐るたずねた。

その結末を聞いてはいけない気がする。そんな予感で頭が痛くなりそうだ。

わずかな望みを抱きながら、和久の言葉をじっと待つ。一呼吸置いて、和久が口を開くまで、えらく長い時間を感じられた。

「妹さんは　亡くなったって」

（なっ！？）

がばりと、直久は体を起こした。和久を食い入るように見る。和久は、その刺すような視線を避けるように、目を伏せ、言葉を紡いだ。その顔はいつになく、曇っている。

「17の誕生日の数日後、死んでしまったそうだよ」

「……」

「その時の妹さんと今のよしのちゃんが似ているみたいだ。まさかとおもって、医者にも見せたみたいだけど原因は分からないって言われたんだって。」

「じゃあ……よしのちゃんはどうなるんだ」

和久は寂しげに口元を歪めた。

「……最善を尽くすよ」

弟だって万能ではない。

一族最強とうたわれる従兄弟だって、できないことはある。わかってる。無理なものは無理だって。

でも……。

自分と同じ年数しか生きていない少女が、死ななきゃいけない理由がどこにあるっていうんだ……。

（よしのちゃんは何も悪いことしてないのに……）

こんな理不尽なことがあっていいのか。

何か自分にも力があれば　ほんの少しでも能力があれば　。

自分はどうすることもできない。何もしてやれない。

直久が、悔しさに、ぎりつと奥歯をかみ締めた、その時だった。

小さい悲鳴のようなものが耳に飛び込んできた。

（　！？　）

隣の部屋、ゆずるの使っている部屋からだ。

一瞬二人は顔を見合わせたが、次の瞬間には二人同時に駆けだしていた。

「ゆずる！？」

部屋の中に入った途端、普通ではないものを直久は感じ取った。

未だかつて感じたことのない大きな不安に襲われる。鼓動が早くなる。息苦しい。

（何だ？　この感じ……？）

初めて感じる空気の重さと違和感に、直久は呆然となった。

その間に、和久はなにやら短い呪文を唱え、終わるや否や、しゃがみこんでいるゆずるの脇へと駆け寄った。

「ゆずる、大丈夫？　今、結界を張ったよ。何があったの？」

「カズ……今、その壁にたくさん目の目！」

「目……？　僕にはそんなにはつきりした形には見えなかったな……」

……

「いくつもの目が、俺を見ていたんだ！！　俺をじつとっ！」

「大丈夫……大丈夫だよ。もういない。いなくなったから」

和久は、それ以上何も言わずに、ゆずるが落ち着くまでそっと肩を抱いていた。

直久はそれを、どうすることもできずに、二人を見つめていた。

ゆずるが落ち着くと、和久は厳しい顔で自分の部屋へ戻り、狩衣に着替え、再びゆずるの部屋に現れた。

「アレをやるのか？」

和久の問いかけに、和久は神妙な面持ちで首を縦に動かした。

アレとは、いわゆる除霊の儀式。この屋敷に集まった浮遊霊を追いかつたのだらう。この儀式を行う時は、九堂一族では狩衣かりぎぬに着替えるのが慣例である。

狩衣というのは、平安時代の民間服で、動きやすいことから狩り時の服となり、後、公家の普段着になったもの。現在の神官の姿を想像するとちょうどいい。

しかし、この狩衣を着ると除霊効果が上がるわけでもなければ、着てなくては出来ないというわけでもない。

そこを敢えて着るのは、狩衣を着ることで依頼人が安心するからだ。普段着でヒョイヒョイと御被いされても、何ら有難味がないというか。本当に被ってくれたの？ と、不安にさせることもある。現在の狩衣はそのくらいの意味しかもっていないのだ。行う者の気分、というものかもしれない。

「ここの浮遊霊はどんくらいいるんだ？」

さっきのゆずるを脅かしたのも、浮遊霊のしわざなのだらうか。

見えないし、感じないけども、いるといわれると気味が悪い。

「いるなんてもんじゃない。うじゃうじゃ。視界がかすむくらいに」
珍しく厳しい顔で直久を一瞥した弟に、自然と口を閉ざす。

（あれ、なんか和久、機嫌悪くない？）

テキパキと儀式の準備を進める弟の背中に、ぴりぴりと張り詰めたものを感じる。声をかけるな、とでも言いたげに。普段にこやかな弟なだけに、怒らせると誰よりも迫力がある。

触らぬ和久かみにたたりなし。それは16年間の直久の教訓でもあつ

た。

(……こ、ここは邪魔しないで、大人しくしてましょかね)

直久が見守る中、和久は意識を集中させるために、ゆっくりと瞼を閉じていった。

和久が追い払おうとしている浮遊霊とは、特に悪さをするモノじやなく、そこら中を漂っているだけの霊をさす。

それ自体に意志はなく、何か強い力に引き寄せられて集まってくるが多く、その強い力というのは大抵、悪霊だ。そして、悪霊は引きつけた浮遊霊を吸収してますます力を持ち、成長して強大化していく。

これ以上、この屋敷に巣食う悪霊に力を付けさせないためにも、まずは浮遊霊を除去してしまおう、ということらしい。

「これより、除霊の儀を行う」

和久は、かつと目を見開いたかと思うと、呪文を唱えながら、すばやく指を宙で動かし、印を結ぶ始めた。

弟の話によると、この作業により、蒼いオーラのようなモノが彼の全身を包み込み、それが次第に大蛇の形になっていくという。

それは、和久に仕える“ヒトならぬもの”
『式神』である。

その大蛇が彼の代わりに霊を払うのだ。その式神の名前を雲居くもいと和久は呼ぶ。

(式神か……いつか見えるんかね俺にも)

式神とは結局何なのだろう、と、除霊している弟を見るたびに思う。実際に目にしたことがないので、正確にはわかっていないのだ。小さい頃から、和久がその存在を教えてくれるので、知っているが、だからといって、今弟の周りに大蛇がいて、その大蛇が霊をばくばく食べてるんだよ、といわれて信じられるわけもない。

式神というからには、神なのかというと、どうも違う。どちらかと言うと、西洋の魔女に仕える『使い魔』に近いのではないかと考

えている。

そもそも古来日本では、何でもかんでも『神』として崇め奉る習慣があった。

一番わかりやすいのは雷。雷は『神鳴り』だ。

石や山、動物、はたまた無念に死んでいった人間ですら『神』となる。学問の神、菅原道真すがわらのみちざねがよい例だ。

結局のところ『神』と言うモノは、ヒトがその怒りを恐れ、敬い、鎮めるモノであつたのだ。『触らぬ神にたたりなし』という言葉こそがそれを顕著に表現している。つまり、日本人にとって『神』とは、人々を守り、願いを聞き入れてくれるべきモノではなく、恐れの対象に他ならなかつたのである。

当然、平安時代から、西洋で言う悪魔的存在、つまり『神』の逆位置の存在として、『鬼』というモノがいる。だが、鬼も、それより昔は『神』だつたようだ。『鬼』と書いて『カミ』、または『シキ』と読んだのだから。

つまり、人にとって恐れの対象であつた『悪い神』、『意地悪な神』は『鬼』となり、都合の良い『神』こそ『神様』になつたと考えられる。そして、『人間に使役されている神』を『式神』と呼ぶのだ。

「終わったよ」

和久は汗だくになりながら、こちらに笑顔を向けた。

そう言われただけで、回りの空気が軽くなっているような気がしないでもない。

「ごくろー、ごくろー」

そう言いながら、直久は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、和久に手渡した。

「ありがとう」

数久はニコツとしてそれを受け取ると、一口だけ飲む。そして、ゆずるに引き直つた。

「気分はどう？」

「……心配ない」

「ならいいけど。……手、かして」

ゆずるはそっぽを向いたまま、和久の言葉を無視した。が、和久はむりやりゆずるの右手を掴むと、手の甲に指で何かの文字を書いた。

「念のため」

「……」

口を閉ざしたままのゆずるにかまわず、今度は直久の方を見て、やはり腕を掴み、手の甲に字を書く。

「お守りみたいなものだよ。……念のためだから」

力なく笑う和久の目が、今回は手に負えないかもしれない、と言った気がした。

（まじかよ……）

仕事に同行するのは初めてではない。今までだって、危ない目にはあつてきた。でも、こんなに緊張している和久は始めてみる。

（そんなに、やばいってことか今回は……）

なんてところに來てしまったんだろう。

なんてことに首を突っ込んでしまったんだろう。

しかし、聞かなかったことにして帰るわけにもいかない。

（くっそ。よしのちゃんに会っていなかったら……八重ちゃんの泣くを見てなければ……）

コンコン。

部屋のドアがノックされた。顔を出したのは八重だった。

思わず直久は彼女から目を逸らしてしまう。まともに顔が見れない。

「あの……夕飯の支度が整いました……でも、お忙しいようでしたらまた後でも……」

「ありがとう。こちらも、今、ひと仕事おわりましたよ。すぐに着替えて、伺います」

こんな時に、笑顔で応対できる弟に舌を巻いた。直久は、笑うことどころか眉一つ動かす気になれそうもなかった。

第四話 さっきのが、効いたな

「なんだか、気分が軽くなっただきがするんです。いや、さすがですな！ 本当に、来ていただいて良かった！」

一緒に食後のコーヒーをすすっていたオーナーが笑顔になって、和久たちに何度目かの礼を言った。

大層な額の依頼料を支払ったのに、来たのがこんな子供たちで、内心不安だったにちがいない。安堵の色がオーナーの全身からにじみ出ていて、ゆずるなど明らかに不愉快そうな顔をしている。

（しょうがないよね、僕たちまだ16才だし）

年齢のせいで信頼してもらえないのはいつものこと。こう言うときの対処法なら心得ている。和久は得意の花のような笑顔を見せてやった。たいていの依頼はこれですっかり安心するからだ。

「簡単な作業をしただけです。まだ本格的なことは明日させてもらうつもりです。念のために、今夜一晚、皆さんの手に護符を書かせてください」

和久はオーナーの腕を取ると、御守りみたいなものですよ、と言いながら、直久たちにしたように手の甲に文字を記していく。

が、よしのの腕に字を書こうとした時だった、和久は手に静電気のような、びりつとした痛みを感じた。思わず手を離す。

「どうした!？」

心配した兄が、和久を覗き込んだ。

（彼女には護符が書けない……）

何かがいる 彼女の中に。

和久は、ずっと笑顔になって首を振った。

「なんでもないよ。静電気が走ったの。僕のセーターのせいかな、あはは」

「なんだよ、びっくりさせるなよ」

「ごめんごめん」

そういつて、再び護符を書くマネをした。

「はい、できました。ほんとに念のため書いていただけなので、心配しなくていいですよ」

和久は再び山吹一家に向かってにつこり微笑んだ。

これで、皆の不安が消え去るならば、いくらでも笑ってみせる。それが今自分にできる最大の防御。敵に弱みを見せては命取りとなる。

柔らかな表示の下で不安に負けそうになりながら、それでも和久は必死に笑うしかないのだ。

「ところで」

オーナーの方へと首を回し、和久はお願いがあります、と続けた。

「このペンションの見取り図を貸していただけないでしょうか？」

「見取り図ですか？」

いったい何に使うのだろう。そんな不安が彼の目に宿る。当然だろう。

だが、それには答えずに、続ける。

「それから、屋敷の中を少し見て回りたいのですが……よろしいですか？」

オーナーは少しだけ困った顔を見せたが、了承した。きっとこれも娘の奇病を治すためののだ、と理解したのだろう。

なんにせよ、ありがたい。

（とにかく、はやめに元凶をつきとめないと……ゆずるがもたない）
今のゆずるは、力がほとんど使えない。使えないだけならいい。

もともと強い霊力の器であるゆずるの体は、悪霊からみれば格好の餌食。隙あらばゆずるの魂ごと取り込んで、体に乗っ取ろうとする中級悪霊は、そこら中にはびこっているのだから。さきほどのゆず

るの部屋でおきた出来事が、いい例だろう。今も息を潜め、虎視眈々と狙う気配は後をたたない。

（だから、僕は今回の依頼を受けることに反対したんだ。それなのに……本家は……いったい何を考えて）

和久が知らず知らず、ぐつと奥歯に力が入ってしまった時、見取り図を取りに行ったオーナーが席へと戻ってきた。

「これです」

オーナーが新聞紙大の紙を和久に手渡した。

「丁重にお借りします」

和久の顔には笑顔が戻っていた。

直久たちは食堂を引き上げると、自分たちの部屋へ戻ってきた。

ソファアの前にある長方形のテーブルを和久とゆずるが囲んで、先ほどの見取り図を広げだす。そして、図面に穴が開きそうなほど鋭い目つきで、食い入るように見入っている。まるでスキャンでもしているかのようだ。

直久はそんな二人をしり目に、「よっこいせ」と言いながら、そのテーブルの前にあるふかふかのソファアに座り、どかっと足を投げだした。

「そんなの何に使うんだ？」

「うん……」

和久は集中しているらしい。図面から目を離さずに、身のない返事をした。

こういう時、何を聞いても無駄なのは心得ている。だから、直久も口を閉じた。

（それにしても……）

何だってこんなものを借りてきたのだろうか。自分の弟の考えていることが、さっぱり理解できない。珍しく直久は、首をかしげて

険しい顔になり、腕を組みながら思考の迷宮に入り込んでいった。

「ホント広いなあ……」

しばらくして、和久がぼつりとぼやいたので、なんとなく直久も図面を覗き込む。

確かに広い。広すぎる。

1階は受付、ロビー、食堂や浴場などの他、オーナーの山吹一家の個室、応接間がある。2階は客室が9部屋。3階は5部屋。うち4部屋はスイートルームになっているようで、一部屋が2階の客室の倍の広さになっている。

（こらあゝ掃除するの大変だゝ）

目を丸くする直久に、和久が微笑みかけた。

「建てた当初から、あんまり変わらないらしいよ」

「当初っていつだよ」

「明治初頭」

「古っ。その割りに部屋綺麗すぎねえ？」

「内部は何度も改装しているみたいだよ。でも、建物自体は変わらないし、部屋数なんかそのままだったみたい」

「ほほゝ。すげーな。だって、ペンション経営をする前は、普通の民家として使ってたんだろっ？」

「そうだね。生け贄になる女の子たちが、死ぬその時まで、この家で過ごしてたんだよね」

「とすると、その子たちが使ってた部屋もどっかに残ってるかもしれないってこと？」

あまり考えずに発した直久の言葉に、和久は息を呑む。そして、ゆずるは顔を見合わせた。

「ん？　なんか変なこと言ったか？」

「うっん。その逆！　さすが直ちゃん。野生のカンがさえてるね！　！」

「ほめられてる気がしないんですけど」

にっこりと和久は微笑んだ。

「さつき除霊したのが、効いたな」

ゆずるも口はしをほんの少しだけ上げ、微笑を浮かべた。

「ああ？　どういうことだ？」

一人だけわけがわかっていない直久は、二人の顔を交互に見比べた。すると和久がやんわりと説明しはじめた。

「さつきまでは、浮遊霊が多くいてね、霧がかかったようになってよく見えなかったんだ。でも、それを追い払うことで、見えてきたんだ」

「何が？」

「ボスのいるだろう場所？　たぶん、女の子たちの思い入れが強かったところに今もいると思う」

「……たとえば、寝起きしてた部屋とか？」

「そうだね。今、見取り図を使って、屋敷の中を霊視してみたんだけど、墨で真っ黒に塗り潰したかのように全く見えないところがあるんだ」

（霊視……そうか。それで見取り図が必要だったのか）

ここにいながら、監視カメラで見るかのようにべつの場所の様子がわかるという。それが霊視だ。

「ゆずる、何箇所、黒く見える？」

和久はゆずるを振り返った。

「二カ所」

「やつぱりか……」

「つまり、その二つの部屋のどっちかにボスがいるってことか？」

直久の問いかけに、弟がうなずく。

「あとは、直接見てみないとね」

そう和久が言い終わる前に、ゆずるは歩き出した。

「あ、待って。僕も行くよ」

慌てて和久も後を追おうとして、直久を振り返った。

「ほら、直ちゃんも行くよ」

直久はじつと和久を見つめた。

（オレが行っても何もわかんねーしなあ……意味なくねー？）

和久は、いっこうに動こうとしない直久に不思議そうな顔をして見つめている。

（行かないって言ったら、こいつは心配するだろうな……）

自分の無力さにイジケて、弟の顔を曇らせるなんてかつこ悪いことは、さすがにしたくない。

「わかったよ」

観念するように、小さくため息をついて、直久は立ち上がった。

第五話 どっちでも？

直久たちは、まず一つ目の怪しい場所を目指し、一階へ来ていた。勝手に部屋を物色するわけにも行かず、一応オーナーに声をかけたところ、八重が同行してくれることになった。

「まずどっちから行くんだ？」

「どっちにする？」

直久の質問をそのままゆずるに和久は丸投げする。

「どっちでも」

ゆずるの返事は、いつものように相変わらずそっけない。

「だって？」

ははは、と和久は再び直久に向き直った。

「……んで、どっちにするんだよ」

「そうだなあゝ。直ちゃんは、好きなものは先に食べるほうだったよね」

「まあね、おなか空いてるうちに、食べたほうがさらにウマイ気がするわなあゝ」

直久が何も考えずに答えると、弟はにやりとしか表現できないような含みのある笑みを浮かべた。

「んじゃ、三階から行こうか」

「は？ 今のつて、そう言う話をしてたわけ？」

ぽかんとした顔をしていると、和久はからからと笑い声を立てて足を進めだした。そして、直久にだけ聞こえる声でささやいてきた。「三階の方が、嫌な気配が強いから。いきなりばったりボス戦かもしれないから、そんな時はよろしくね。選んだのは直ちゃんだしゝ」

「はい！？」

「冗談だよ。行くよゝ」

「……冗談にきこえねえー……」

図面を見ただけではやはり屋敷の広さは実感できていなかったらしい。

「廊下……長っ！」

三階まで階段を上りきってから、廊下に出た直後、直久は率直すぎる感想を述べた。

二階の廊下と長さ是一緒だというのに、二階にはある花瓶や陶器の飾りが無いためか、一直線に伸びた廊下が妙に長く見える。

それに、オーナーが説明していたとおり、しばらく客足が遠のき使われていないのだろう、掃除が行き届いていないような気もする。廊下の隅に埃がたまっているし、壁もザラついていて、何だかカビ臭い。

すると、和久が廊下の壁に飾ってある絵を指差した。

「この絵は何ですか？」

言われて初めて気がついた直久も、廊下の壁に視線を這わせた。三階の廊下の壁には、数メートル置きに何枚もの絵が飾ってあった。それも、全て、同じぐらいの年頃の少女の絵だ。

「この絵は、生け贄になった少女たちの肖像画だっけ聞きました。生け贄にされる前、その少女が生きていたという証に、必ず肖像画を描かれることになっていたらしいです」

写真のように描かれている彼女たちは、今にも絵から出てきそうだった。その目が何かを語りかけてきそうで、早くその場を立ち去りたくなる。

「あれは？」

直久の不安など気にも止めずに、ゆずるが指差すのは廊下の端。「あの絵だけ、なぜ離れたところにあるんだ？」

日もあたらないような隅っこにポツンと一枚の絵が飾られている。四人はその絵のもとに歩み寄った。

白い肌、長い黒髪、黒い瞳、赤い唇。日本人形みたいな少女。

「この子は最後の生け贄の　　ううん、そうなる予定だった女の子

だつて聞いたことがあります」

八重はじつと絵の中の少女を見つめながら話し出した。

「明治時代に入って、人身御供などやめようと言うのが、大半の村人の声になりました」

しかしこの少女の父親は、人身御供をやめれば村人から金を集める理由がなくなってしまうと、それらの意見に耳を貸そうとせず、断固決行の意を示した。

そうして、代々の生け贄の少女たちにそうしてきたように、この少女にも肖像画を描き残してやることにしたという。

「そのために招かれた絵描きは、まだ若い青年で、絵を描いている長い時間の間、二人は……あの……えっと」

急にもじもじとして、顔を赤らめた。なぜか、直久にちらりと視線を送ってきた。

「恋に落ちてしまった……そうですね？」

その八重の視線を追って直久に微笑みかけた和久は、内心、八重ちゃん相手が悪いよ、見る目はあると思うけど、と思いながらも、八重の言葉をつなぎ話を続けるように促した。

「は、はい。えっと……でも、絵が完成すると、少女は生け贄にならなければなりません。それで、この絵が完成した翌晩、二人は逃げ出してしまったのだそうです」

「やるなあ……。駆け落ちか！」

格好いいと言わんばかりの直久に、八重は苦笑した。

「でも、すぐ見つかってしまって、二人ともその場で射殺されてしまったそうです」

（じゃ、射殺……！？）

その威力のある二文字に、息をつまらせたのは、直久だけではなかった。

（な、何も殺すことはないだろう……）

現代ならば、ありえない話だ。でもそれが平然と行われていた。彼女らが生きていたのは、そういう時代なのだ。

改めて直久はその肖像画を見上げた。

少女は白い椿の花が咲く庭で楽しそうに笑っている。その笑顔の先には、この絵を描く青年がいるのだろうか。

ふと、視線を下げると、その絵の下の方に記されている文字がある。『ツバキ』と読めた。

「ツバキって、この娘の名前かな？」

その部分を指しながら和久が八重に尋ねると、八重はあやふやに頷いた。そして、まるでもうこの話はしたくない、というようにうつむいてしまった。

そこで、やっとゆずるが口を開く。

「あの部屋は？」

ゆずるは今いる場所とは逆方向の廊下の端を指差した。扉がひっそりとたたずんでいる。心なしか、その扉を見るゆずると和久の顔が一段と険しい気がした。

（その奥の部屋が、例の怪しい部屋なんだな）

二人から何も聞いていないが、持ち前の直感で直久はそう悟った。しかし、不思議なことに、直久自身もなんとなくその部屋には近づきたくないな、と思った。なぜかはわからない。なんとなくはなんとなくだ。

きつと、長い廊下の端から端を見ているせいか、向こう側の端が薄暗くしか見えていなくて、何だか気味が悪いからかな、と自分を納得させた。

しかし、なかなか返事が聞こえてこないで、八重の方に振り向くと、彼女は何やらずっと遠くを見るような目つきで、その扉をじっと見つめている。

この廊下が薄暗いせいかもしれないが、顔色が悪いように思えた。

「実は、あの部屋に、私とは6つ違いの兄がいるんです。……瞬しゅんと言います」

「お兄さん？」

もう半日近くこの屋敷にいるが、姉妹とオーナー以外の気配をいっさい感じてなかったため、双子は同時に驚きの表情を見せた。さすがのゆずるも眉をわずかに動かし、動揺を見せた。

「兄は、生まれ持った奇病のため、自分の足で歩くことができません。立つことさえも。それで、ずっとあの部屋に籠もっているんです。人と会うのを極端に嫌がるもので、大変失礼ですけど、兄のこととはそつとしておいてください。さあ、下の階に下りましょう」

必死な表情で頼まれては、どうすることもできない。仕方なく、誰もが口を重く閉じ、八重に従って階段を下りた。

もう一つの疑わしき場所は、一階だった。

「あれ？」

一階の廊下で、見取り図を広げながら和久が小さく声を上げた。すぐ隣にいた直久がそれに反応する。

「どうしたんだ？」

「うん。ちよつと変だなあ、っと思って」

「ああ？」

どれどれ、と和久の持つ見取り図を覗き込んだ。

二人の足が止まったのに、先を歩いていたゆずるも気づき、少し戻り、同じように覗き込んできた。

「ここが今いる位置なんだけど……」

細く長い和久の指が、見取り図の上を滑る。それから、目の前の扉を指した。

「この見取り図には、この扉がないんだ。描かれていないみたい」

確かに、その扉は見取り図にはないものだった。図面では、そこは隣の部屋と一体化しているように描かれているが、不自然にドアが二つ並んでいて、内部で二部屋に仕切られていると、想像するに容易い。

（オレだってアヤシイのは丸わかりだ）

図面に無いものが、ここにはつきりある。

直久は、まるで謎かけのようなこのドアの存在に、強い興味を持った。隠そうとされると、知りたくなるものだ。

が、弟は直久とは違う次元で、このドアの存在が気になったようだ。

「ゆずる……」

何かを訴えるような目で、和久がゆずるを見ている。それを受けたゆずるは、どこか落ち着かない表情でぼそりと言葉を返した。

「嫌な感じがするな」

「うん、僕も。それで、さっきからドアの向こうを霊視しようとしているんだけど、真っ暗になっちゃって、ダメなんだ」

少し語尾が震えたような気がして、直久の弟を見つめる視線に、心配の色が加わる。

「もしかして……」

恐る恐る直久は口を開くと、弟がその言葉をつないだ。

「この部屋が一ヶ所目だね」

その時、一瞬、直久の全身の皮膚の毛がざわめいた気がした。

（な、なんだ。この感じ……さっきの嫌な感じに似てる……）

ゆずるの部屋で感じた、あの感覚に。

それは、見えない敵に対する恐怖からなのか。それとも、別の何かを感じ取ったからなのか。

「何かご存じですか？」

八重に問いかける和久の声が聞こえてきて、直久は我に返った。

（やべえ……オレ相当ビビってるな……）

ごくりと直久の喉がなり、飲み込んだ唾で、いつのまにかカラカラになっていた喉が少しだけ潤った。

「そこは……私も、たぶん両親も分らないです。この扉はずっと以前から開けられていないみたいで……」

と、八重がそのドアのノブに手をかける。ノブは力チ力チと小さい音を立てるものの、一向に回らない。

「何十年も前に鍵をなくしてしまったのだと聞いています。それ以来開かないのです。誰も扉を壊してまで開けようとは思わなかったようで、開かずの扉として放っておかれています」

（開かずの扉）

直久だけではなく、一同の視線がドアに集中する。

「それに……」

八重は、唇を小刻みに震わせながら、かすかに聞こえる声で続けた。

「言い伝えでは……ここは」

「生け贄にされた女の子たちが使っていた部屋　　違いますか？」

和久が、口ごもる八重の代わりに、きっぱりとした口調で言い放った。

八重は明らかに強張った表情で、やっとのことで首を縦に動かしている、というように肯定してみせた。

（ここか……）

先ほどまでとはまた、数段も強まった恐怖をこめて、直久はその開くことの無いドアを見つめた。

第六話 言われなくてもわかってる（1）

「今日はもう遅いし、本格的な除霊は明日行いますから」

と和久が、案内してくれた八重に、自室へ戻るように促した。

その様子を横目で見ながら、おかしいな、と直久は思った。普段なら、敵の本拠地が見つかったのなら時間など関係なく、とっとと除霊するのに。何か他にも気になることがあるのだろうか。

直久が一人考えこんでいると、案の定、八重の姿が見えなくなつたところで、和久がゆずるに話を切り出した。

「気がついた？」

「外のか」

「うん。やられたよ。気がつかなかつた。屋敷の中になると、ここ
の悪霊の気配が強すぎて……。うまく隠れてる」

「それも、強い霊力を最弱化してばれないようにしている」

「うん。ただものじゃないね」

そこで、ようやく二人が考え込むように黙つたので、もう口を挟んでもいいかなと直久は思った。

「何のことだ？」

そう言われた和久は、眉をひそめながら、困つたような表情で直久を見た。

「それがね。どうやらこの屋敷は、中に住みつく悪霊だけじゃなくて、外からもなんらかの影響をうけてるみたいなんだ」

「外から？」

「うん。まずは、それも調べないと、うかつには手をだせない」

「ほうっ」

（なんだか大変なんだなあこの家）

のんきに直久が相槌をうつと、和久はその直久の暢気さに、すこしほだされたようだった。

「とにかく、急いではことを仕損じる、だよ。明日、この辺の地理についてオーナーに話を聞いてみよう」

和久によって話がまとまると、一同は自室へと戻ることとした。

部屋のドアの前まで来ると、中へと入ろうとしたゆずるに、くれぐれも気をつけるようにと、和久が念を押す。

そういえば、と直久は思った。

自分は和久と同室なので心配ないが、ゆずるは今夜一人だ。悪霊に狙われやすいのはゆずるの方なのだから、ゆずるも自分たちの部屋で休めばいいのに、と思わないでもないが、そうもいかないらしい。

とはいえ、三人で一晩明かすだなんて、直久には息が詰まるにちがいない。ごめん被る。

が、状況が状況だけに背に腹は変えられない、とも思う。譲歩してやらなくもない。

一人、直久は腕を組み、うんうん、と頷いていた。が、話は直久だけを取り残し、すでにゆずるとは別室で休む方へ進んでいる。

「ゆずる。なにかあったらすぐに呼ぶんだよ」

「言われなくても、わかってる」

その返事はいつものように冷ややかなもので、さつさと部屋の中に入り、ガチャッと、ご丁寧に鍵までかけた音がした。

（なんだよ、ゆずるのヤツ！ せっかく心配してやってるというのに、ほつつつんと、感じ悪っ！）

口に出してはいないものの、色々と思案させられた直久は、苛立ちを隠すことなく、舌打ちした。そして、ゆずるに聞こえるようにわざと大きな音をたてて自分たちの部屋のドアをしめた。

「あ。直ちゃん……」

一人廊下に残された和久には、どちらの心情も手に取るようにわかる。だから、小さく息を吐くと、直久の後を追うようにして部屋

に入ってしまった。

部屋に戻ってきた直久は、大股でベッドへ行くと、むすっとした顔で、自分の体を投げ出した。スプリングのきいたベッドは、よく弾む。

「直ちゃん……」

諭すような和久の声が追いかけてきたので、体をひねって背を向けた。その明らかな拒絶の姿勢も、ものともせずに、和久は続ける。「ゆずるは今、すごく不安なんだと思う。だって、霊の存在は感じるし、見えるんだ。けれど、普段なら簡単に追い払える霊ですら、今は太刀打ちできない。その上、悪霊たちは次から次へと、ゆずるの魂を求めて集まってくる。なのに、何もできないんだ。すごく怖いと思う。そんなの僕だったら耐えられないよ。だって、ひたすらに、結界を張って身を潜めてやり過ぎすしかないんだよ？」

確かに、直久の想像をはるかに上回る恐怖と戦っているのかもしれない。

けれど、こちらが手を差し伸べようとしても、向こうは迷惑そうに振り払うだけだ。これでは、何もできない。

（もともと、何かをしてやれる能力もないけどな）

直久は、深くため息をつく。
違う。

この苛立ちはゆずるに大してではない。ちゃんと気がついていて。こんな時に、何の力にもなれない自分に対して、必要とされていない自分に対して、行き場のない焦りと劣等感を再確認させられるのだ。

普段なら、知らん顔して笑っていられるのに。

この惨めな感情を、見てみぬふりをしていられるのに……。

返事のない直久の背中に、和久は静かに続けた。

「ゆずる、明日が力を失っちゃう日なんだ。今日も相当弱まってい

たけれど、明日はまるつきり使えないんだ。だから」

「……わかってるよ」

直久は和久の言葉を遮り、体をひねって向き直った。

「気をつけてやれっていうんだろう？」

吐き捨てるような一言に、顔色ひとつ変えずに和久は頷く。

「僕もゆずるも、ホントに直ちゃんを頼りにしてるんだよ。じゃなきゃ、連れてこないよ。どんなことをしても置いてくる」

「……」

和久のその言葉は、直久の心には、まっすぐには届かなかった。

その後、双子はさして会話もせずに、寝仕度を済ますと、早々に布団に入った。

すると、あつという間に直久の隣のベッドから規則正しい寝息が聞こえてきた。

よく考えたら、和久一人で、この広い屋敷の浮遊霊を除霊したのだ。顔に出さないから気がつかなかったが、相当疲れていたのだろう。

（おつかれさん……）

直久は、弟を起こさないように気を使いながら、体を起こし、ベッドに座った。そして、ぐっすりと眠る弟の布団を、かけなおしてやる。

普段と変わらないように見えるが、きつとゆずるが不安を抱えているのと同じように、今の和久は多くの責任という重圧を感じているに違いない。

依頼人家族を悪霊から守るだけでも、今回は厄介そうだというのに、霊力を持たない直久がいる。それに、ゴキブリホイホイならぬ“悪霊ホイホイ”と化したゆずるまでもが、和久の肩に重くのしかかっているはずだ。

なにしろ、ゆずるは“あの”九堂本家の次期当主。大きな傷を負わせようものなら、長老たちがこれ幸いと、どんな無理難題を言いつけてくるかわからない。

（本家も何を考えてるんだか）

和久ほど、本家に入入りしていない直久には、詳しいことはわからない。霊力を持たない直久は、本家から存在そのものを認められていないかのような扱いを常に受けている。だから、もともと本家には良いイメージは持っていない。

（ゆずるも、色々大変なのかもな……）

こんな霊力の無い時に、こんなところに送り込まれるなんて。どう考えても“大事”にされている嫡子という扱いではない。

それにしても寝られない。

まったく眠気のけの字も感じないので、直久は、とりあえずトイレにでも行くかと、立ち上がった。

その時。

（！？）

小さい悲鳴のようなものを聞いた。隣の部屋、ゆずるの使っている部屋からだ。

瞬間的に和久を振り返ると、弟はいまだ静かに寝息を立てている。仕方なく、直久は弟の肩を揺すった。

「おい、カズ。起きろ」

だが、その眠りは深く、目を覚ます気がしない。焦った直久は、今度は本気で体を揺すった。

「カズ！！ 起きろ！！ ゆずるに何かあったかもしれないっ」

それでも、和久はまったく起きない。

これは尋常ではない。

悪霊が夜中に何かをやらかす時、その邪魔になるようなヒトは、たいてい金縛りにあったり、眠らされることが多いんだ。だから、いくら頑張っても体が動かなかったり、起きなかつたりす

る時は、悪霊の仕業であることが多いよ。

なぜか、昔、和久がそんなことを言っていたのを、ふと思い出す。
この不自然な眠りは、悪霊の仕業なのか？
だとすると、ゆずるは……。

（やっべえっ！！）

直久は何も考えずに、部屋を飛び出し、ゆずるの部屋の前に駆け寄った。そして、ノブを回す。ガチャガチャと音がなるだけで開かない。

（鍵かつ！）

ちつと舌打ちをすると、直久はゆずるの部屋のドアを拳でたたき出した。

「ゆずるっ、聞こえるか！？ 無事なのか！？」

返事はない。ドアの向こうに気配もない。

寝てるのか。それとも、もう悪霊に……。

自分の想像に、ぞくりと背筋に冷たいものが走る。

「おい、大丈夫なのかっ！！」

部屋の中からの応答はなく、ゆずるの様子もつかがい知ることはいできない。

（くっそう……！！）

どうしたらいい。

何かいい手はないか。

自分にできることはないか。

（カズは起きねえし、かといって依頼人を危険に晒すわけにもいかないから助けも呼べねえっ……ん、そうだ！）

直久は一か八かの行動に出ることにした。体当たりで、ドアをぶち破る作戦を思いついたのだ。やったことはないが、よくテレビドラマで見る、アレだ。

意を決し、ドアから4歩下がると、懇親の力をこめてドアに激突する。

「ぐっ……」

あまりの衝撃に直久は息がつまり、咳き込む。ドアはびくともせず、簡単に床の上に弾き飛ばされてしまっていた。

「ちきしょう……ドラマは所詮ドラマかつ!!」

そう叫びながら、再び助走をつけ、ドアへと突進する。

が、その時、不思議なことが起きた。直久の体がドアに触れる直前、ひとりでにドアが開いたではないか。

（ え！？ ）

ついってしまった勢いを殺すことはできず、直久はそのまま、ゆずるの部屋に突進し、床に倒れこんだ。

その時打ち付けた全身の痛みもさることながら、それよりも強い喉の痛みを感じた。ヒリヒリと喉が焼け付くようで、あっという間に口の中の粘液が蒸発していくようにすら思える。

何よりも、体が勝手に防衛本能をむき出しにしているようで、心臓が強く脈打ち、呼吸が荒くなっている。

それだけではない。直久の肌もその部屋の異変を感じ取っていた。

（……寒い……）

明らかに、廊下や直久たちの部屋よりも、温度が低く感じる。

何なんだ、この部屋は。いったいどうなっているというのだろう。直久が未だかつて感じたことのない大きな不安に襲われた時だった。

「……くっ」

どこかからかすかに誰かのうめき声が聞こえてきた。それで、直久は、はっとなる。

（そうだ、ゆずるっ）

すぐさま首を右左にひねり、暗闇の中、必死に目をこらした。

言われなくてもわかってる(2)

(どこだ……どこにいる……!?)

寒さを感じているというのに、直久の額にはうつすらと汗がにじんでくる。

部屋の奥の暗がりを目をやった時だった。直久の眉間に力が入る。ベッドの上の布団の固まりが僅かに動いたのを、直久は見逃さなかった。

(あそこだ!!)

直久は、はじかれたように床を蹴って、ベッドに駆け寄る。見ると、ゆずるはベッドの上で布団にくるまり身を縮めていた。

「おい、どうした!? 何かあったのか!？」

驚いたように、勢いよくゆずるが直久を見上げた。

「な、直久っ」

「おう。大丈夫か？」

近寄って肩に手をそえる。すると、その細い肩は小刻みにガタガタと震えていた。

信じられなかった。ゆずるが恐怖に身を震わせている。いつも自信に満ちあふれて、クールで無口でいけ好かない、あのゆずるが。まるで別人のようにおびえきっている。

「また、目がたくさん……見えるんだ」

消え入りそうな声でゆずるが訴える。

「俺を探してる……たくさんの目が俺を捜してるんだ」

「……え」

直久は、あたりを見回した。

だが、見渡す限りの闇の中に、目だけが浮かんでみるなんてことがあるわけがない。

でも、ゆずるには見えているのだ。

「もう限界なんだ……」

ゆずるはそう言つと、直久の腕にしがみついてきた。

「限界つて……？」

「今はカズが張つておいてくれた結界で、奴らには俺の姿が見えない。でも……それももう直ぐ消える。奴らの力がどんどん強くなつていくのが、手に取るようにわかるんだ」

「奴らつて」

生け贄になつた女の子たちのこと？　と言葉を続けようと思つたが、できなかった。ゆずるが、びくりと大きく体を震わせたからだ。

「……消える」

そう、ゆずるが言つた直後。

ブツ。

わけがわからずに、呆然としている直久の耳にそれは確かに聞こえた。まるで細い糸が切れたような、やっと思き取れるような音だった。

なんの音だろう、と思つたのもつかの間、一瞬にして、直久の周りの空気が、ずどんと、肩にのしかかるように重くなる。そして、急激な吐き気を催した。目がぐるぐると回るような感覚もあれば、胃をわしづかみにされ振り回されたような気持ち悪さだ。

「うつ……うつ……」

胃液が出そうになるのを必死にこらえた。

直久は悟つた。先ほどの、ブツつという音は、ゆずるのために和久がこの部屋に張つたという結界が壊れた音だったのだ、と。

（……ゆずるもカズも、いつもこんなの感じてるのかよ……）

なんとか持ちこたえた直久は、ちらりとゆずるに視線を送つた。

「ゆ、ゆずる！？」

直久は慌てた。今にも意識を失いそうなほどぐったりとしている

のが見えたのだ。

初めて悪霊の靈氣を感じる直久とちがい、ベテランのゆずるなら、こんなの大したことない、と言わんばかりの涼しい顔をしていると思っただのに。

「お、おいっ!!」

ゆずるの頬をピシヤピシヤと叩いた。僅かに目を開けたが、すぐに閉じてしまう。

「しっかりしろ!!」

叫びながら、ゆずるを抱き起こした。そして、ゆさゆさと乱暴にゆずるの体を揺する。が、今度は力なく項垂れ、動かない。

（これって、万事休す!?!）

ごくり。

生唾を飲み込む音だけが、闇に包まれた無音の部屋に響き渡った。明らかに剣呑な空気の中、何の抵抗もできない二人で、どうしろというのだ。危険が察知できても、その危険を回避できねば何の意味もない!!

直久は激しく後悔した。もっと和久の話を真剣に聞いておくべきだった。こんな時に直久にもできることを、何か教えてもらえばよかった。少なくとも。

（和久をたたき起こす方法聞いときゃよかった。てか、ゆずるなら知ってるかもしれない!）

わずかな希望を込めて腕の中のゆずるを見下ろすも、すでに正体をなくしているゆずるの姿に、無惨にもその希望は碎かれる。

（……気づくの遅すぎ、オレ……）

がっくりと肩を落としたその時。

（!?!）

直久の肌が、ぞわぞわつとざわめくように毛を逆立てていく。

まさか、と思っただ。

勢いよく、体ごと後ろを振り返った。目だけを動かし左右を確認する。再び、何かを感じ取り、右前方へ首をひねる。視覚から得ら

れる異変はない。

だが、確かに。

（何かいるっ！）

はつきりと直久は感じ取った、何人ものヒトの気配。直久たちの背後から右に左に忙しく動き回って、まるで品定めでもしているようだ。

冷蔵庫のように冷えきった部屋だというのに、直久の頬を凍るほど冷たい汗がすーっと伝い降りていった。

（何人いるんだ……）

ゆずるをしっかりとかがえ直すと、今度はゆっくり首をひねり、あたりを見回した。

だがいくら目をこらしても、何も見えるはずがない。霊力のない直久は、本能的に、見えない敵が発する殺意を感じ取ってるに過ぎないのだ。

（くっそう。どうしたらいいんだ！）

直久が悔しさと歯がゆさでいっぱいになった時、突如としてゆずるの体が腕から、ずりりとすり抜けた。まるで、何者かが闇の中へゆずるを引き吊りこもつとしているかのように。

（なっ！？ ちよっ……！）

直久はとつさにゆずるの左腕を掴み、間一髪で腕の中へ引き戻す。「あ……あつぶねーっ！」

肝を冷やしながら、ゆずるをしっかりと抱えた。しかし、なおもゆずるは、かなり強い力でひっぱられている。

その力はだんだんと強さを増していった。しだいに、意識の無いゆずるの体が、直久から引き離されていき、直久はそれを何とかつなぎ止めるのに必死に腕を引っ張るしかない。

（腕が……このままじゃ……きつッ）

持たない。限界の見てきた自分と、限界どころか、まだ力を強

め続ける姿なき敵。勝敗は火を見るより明らかだ。

「うっ……」

それまで反応のなかったゆずるが小さくうめいた。そのか細い声に導かれるように、直久はゆずるの足首を見る。すると、その足にいくつもの手が絡み付いているではないか！

（なっ……）

直久はぎょつとして、目を見開いた。

その手は青白く、暗闇にはつきりと浮き上がって見える。

そう、見えるのだ。

直久にも、はつきり、見えるのだ。

弟から散々聞いてはいても、実際に見るのとでは全然違う。それは、確かに“ヒトの手”なのに、明らかに“人の手”ではない。

血の通う暖かさや、柔らかな弾力と程良い滑らかさの感触など、その手からは想像できない。実際にさわらなくてもわかる。

それに、異臭こそないが、朽ちた、というのが正しい表現だろう。ねちやりと、粘つきそうな、ただれた皮膚からは、肉が腐り落ちて所々骨が見えている。

完全に、初めて霊的存在を目の当たりにし、その恐ろしい姿に、頭が真っ白になっていた。だが、再びゆずるの身体がその手に強引に引っぱられて、すぐさま我に返る。

「うわああ……あつぶねえ……」

自分までもが引きずり込まれそうになり、ゆずるを掴んでいた手を離し、とつさにベッドの枠を掴んだ。

限界が近い。しかも片手で抵抗できるほど、敵の力は甘くない。その上、腕には乳酸がたまり、ぱんぱんになっている。手のひらも汗がにじみ、いつ、ゆずるの腕が滑り落ちてしまうのではないかと気が気ではない。

「だーっ！！ ゆずる、しっかりしろっ！！」

ゆずるが正気に戻れば、自力で腕を掴んでくれれば、ベッドにくくりつけるとか、その間に和久を起こすとか、色々やりようがある

かもしれないのに。このままでは、この手が離れるのを待つだけに
なってしまう！

ズルリ……。

徐々に引つ張られ、直久の手から引き離されていくゆずる。直久
の表情に焦りの色ががこくなる。

もう限界だった。

それでも、直久は諦めなかった。

（ぜってー、離すもんかっ！！ 俺は腕がちぎれても離さねーぞっ
！！）

確かに、ゆずるとは折が合わない。顔を見れば、いつもむかつい
てくる。

でもそれは、嫌いだからではない。

この十六年間、家族の次に、共に過ごした時間の長い従兄弟を、
いつもどこか妬ましく思っていた。一族で一番の能力を持ち、誰か
らも認められる、同じ年の従兄弟の存在を。

ゆずるといってどうしても比べてしまう。

何も力を持たない、一族から無視される自分と、すべてを持ち将
来を期待される従兄弟。

存在そのものを消された気分になる。

自分はここにいる。確かにいるのに。

なぜ双子の和久だけが、厚く庇護され、自分は臭いものでも見る
かのような扱いを受けねばならないのか。

でも、ゆずるが悪いわけではない。好きで、その力を持って生ま
れたわけではないのだ。

好きでこんな怖い思いをする奴がどこにいる。何度も、何度も、
こんな死にそうな思いをしながらも、できて当然のような親族の目
をいつも感じていたに違いないのだ。その親族の中に自分もいた。
だからゆずるは自分を冷ややかに見下していたのかもしれない。
何も知らないくせに、と。

己の運命をゆずるのせいにして逃げていた自分が、同じ年月かけ

て運命と必死に戦ってきたゆずるに叶うわけがない。

オレはオレだ、と言いながら、直久自身が自分を認めていなかったのだから。

いつか、素直にゆずると対峙できる日がくるだろうか。ゆずるの気持ちを汲んでやれる日がくるだろうか。

弟と肩を並べ、ゆずるの力になってやれる日が。

（くそーっ！！ 死なせてたまるかつ、こんちきしょおおおっ！！）

最後の力を使い果たすばかりに、その名を叫んだ。

「和久ああああっ！！」

その時、一瞬だけ、部屋の空気が揺れる。

すると、わずかな間において、けたたましい足音とともに、誰かが駆け込んできた。すぐさま、弟の刺すような鋭い声が部屋に響き渡る。

「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前っ！！ 悪霊退散っ！！」

朦朧とする意識の中、ふっ、と部屋中の重苦しさが消し飛んだのを感じた。

（助……かつ……た……）

意識を完全に手放す瞬間、直久は自分に駆け寄った弟の声の他にクスクス、と誰かが笑う声を聞いたような気がした……。

第七話 うぜえ……

「抱きあつて寝てるところ悪いけど、いい加減起きたら？」

直久とゆずるは、そんな和久の一言から、今日という最悪の日を迎えた。

「直ちゃんは、向こうの部屋に担いでいこかと思ったんだけど、直ちゃんたらゆずるを抱きかかえたまま全然離さないから、そのまま放置して、僕は隣でゆっくり寝たよ。けど、まさか、朝までそのまま寝てるとは思わなかったけど」

クスクスと弟の笑い声と、きらきらとした日光が降り注ぐ中、徐々に定まる直久の視界。

(……朝……?)

目の前に見えるのは、直久と同じく、重たい瞼をなんとかこじ開けようと必死なゆずるの顔だった。しかも至近距離。

「……………」

首を動かし、周囲を見回し、状況を把握するのに二十秒。

直久は、自分の腕がゆずるをしっかりと抱きかかえた状態になっていることに気づき、「おわっ」と叫びながら自分の体を引いた。と、ほぼ同時に、同じく状況を把握したゆずるが勢いよく直久を突き飛ばした。

「ちょ……落ちる、おち……おああ」

ベッドの縁で抵抗するもむなしく、派手な音と共に、直久はベッドから床に投げ出された。全身に激痛が走り、息をつまらせる。

「……………いってえ」

腰をさすり、体を起こした直久は、ベッドの上を見上げ、ギロリとにらみつけた。

「てつめーっ！！いきなり何すんだよっ！！」

「俺に勝手にさわるなっ」

ゆずるは身を硬くさせ、自分の肩を抱いている。

（ひ、ヒトを汚いものみたいに言いやがって……）

一気に頭の隅々まで血がいきわたり、すっかり目が覚めた。

「オレだって好きで触ってたわけじゃねえよ。お前が、悪霊に引きずり込まれそうだったから助けてやってただけだろうがっ」

「俺は頼んでない」

「何だとっ!？」

がばつと体を起こし、直久はゆずるの胸ぐらを掴んだ。あまりの憤りに、体中の血液が沸騰するような感覚を覚え、眩暈がする。

「はいはい。そこまで」

緊迫する空気の中、二人の間に割ってはいる和久の声は、なんとも暢気なものだ。和久はさらに、にっこりと微笑みながら、持っていたフェイスタオルを直久とゆずるへ差し出した。

「ほらあゝ、早く顔を洗って。朝ごはん食べたら出かけるよ?」

「……………」

いつも思う。

この和久の笑顔は、何よりも強い。最強だ。

「……………出かける?」

朝っぱらからどこへ? と思ったのは直久だけではなかったらしい。ゆずるも、不思議そうな顔で和久を見上げている。

「あ、そこ」

言い終わると和久は、にんまりと口端を上げ、一気にカーテンを引き開けた。

大きな窓が、いつぱいに日光を吸い込み、部屋中が生まれ変わったように明るくなる。

直久はまぶしさに目を細めた。

「あの山だよ」

和久は、窓の外を指差した。

朝食後、直久たちが向かったのは、裏山だった。

朝食の準備をする山吹一家を手伝いながら、和久が収集した情報によると、この屋敷の裏に実に怪しい場所があるということがわかったのだ。

「ほら、昨日言ったでしよう？ この屋敷は、内部だけでなく、外部から何らかの影響をうけてるって」

屋敷から裏山へと続く獣道を歩きながら、和久は説明し始めた。先頭に行くオーナーには聞こえないように小声になる。

「聞くところによると、この裏山にはこの辺り一帯の山の神様を祭った古い祠ほくらがあるらしいんだ」

「祠……？」

「うん。その祠こそ、女の子たちが生け贄としてささげられていた、神様の祠だったんだ」

「……まじかよ。めっちゃ怪しいじゃん」

「でしょう？ だから、早速お願いして、案内してもらってるってわけ」

「なるほど……」

直久が、腕を組んで、さも納得という顔で頷いた。その素直な反応に、ふわりと笑った和久だったが、ふと視線を直久の背後に送る。直久もその視線につられて、首をひねり、背後を振り返った。

「……………」

「ゆずる辛そうだね」

直久だけに聞こえるように、和久は囁いた。

「だったら、おいてくれば良かったんじゃない？」

「それはダメ」

ぴしゃりと言い放った和久の顔から笑顔が消えた。

「あの家に置いていくなんてできないよ。だって、ゆずるは今、力が使えないんだよ。また、昨日の晩みたい、何かあったら」
「ひとたまりもねえな」

和久の言葉を、直久が継いだ。

かと言って、あんなに辛そうに肩で息をするゆずるを、結構な傾斜の山道を歩かせるのはいかなものだろうか。

（きつと、心配してやっても逆ギレされるだけだろうけど……）

ふと、直久の脳裏には昨夜の出来事が、まるで録画映像でも見ているかのように蘇ってきた。

自分でも驚くほど鮮明に。そして、その時感じた恐怖までもが呼び起こされてゆく。

（まったく、ありえないつつの……）

あんな恐ろしい目にあっているながら、よく、三人とも無事に朝を迎えられたものだ。

それもこれも、タイミングよく和久が目を覚ましてくれたから。でも、あれほど直久が起こそうとしても起きる気配すらなかったのに、どうして自力で起きることができたのだろう。

何か対策がしてあったのだろうか。たとえば、式神に命じてあった、とか。

……ならば、式神も、とつと和久を起こしてくれれば、あんなに苦勞しなくてすんだというのに。

直久から思わずため息がこぼれた、その時。

（！）

不意に、ぞくりと悪寒が走る。同時に、あの時の声が、直久のすぐそばで聞こえたような気がした。あの時聞いた、クスクスとあざけり笑うかのような何者かの声が。

ぱつと、体をひねり四方を確認する。何も見えない。もう、声も聞こえない。

和久とゆずるを振り返るが、何も感じてないようだった。

（気のせい？ ……………でも）

「女の声だった……」

「え？」

突然難しい顔をした直久に、和久はびっくりしたように聞き返した。

「いやな〜。聞いた気がしたんだよ、女の笑い声」

「笑い声？」

和久の眉が寄る。

「必死で抵抗するオレらを見て、くすくす笑っている感じ？ まあ、聞き間違えかも知れないけどなあ。わけわかんなくなってるから」

でも確かに聞いたのだ。

人の気配も感じたのだ。

意識を手放す瞬間に……。

「女の声……」

和久が考え込むようにあごに当てた右手を、何とはなしに直久は目で追った。

その表情から、自分の話を真剣に受け止めてくれているのが伺える。それがまず不思議だった。

能力のない自分が、意識を失う直前に、“いないはずの女”の声を聞いた”と言ったのに。

きっと、ゆずるなら「寝言は寝て言え」と切り捨てるだろう。間違はなく、本家の長老たちなら、鼻で笑って終わりだろう。

「信じてくれんの？」

「だって、聞いたんでしょ？」

何でそんなことを聞くの、と言いたげに首をかしげる和久。だから、直久も胸を張って言うことができる気がした。

「聞いた」

直久は深くうなずいた。そっと、胸の中が熱くなるのを感じながら。

「じゃあ、確かに、僕ら以外の“誰か”があの時、あの部屋に居たんだと思う」

「……そうか……」

和久は、利き手で頭を書き上げた。そして、さらに難しい顔になって、小さくため息をつく。

「何だろうね……ただ、僕も気になることがあるんだ。さっき気が

ついたんだけど、そのことに関係があるかもしれない」

今度は直久が眉をひそめる番だった。

「気になること？」

「うん。ゆずるの使ってる部屋、開かずの扉の部屋の真上だったんだよね」

「え……あの？」

「そうなんだ」

そこで、和久は言葉を切ると、ふっと笑顔に戻り、直久をしげしげと見やった。

「でも、不思議だね。何で急に直ちゃんにも霊が見えたり、感じたり、聞こえたりするようになったんだろうね」

急にニヤニヤと含みのあるアヤシイ笑みを浮かべ、自分を覗き込むもので、直久は何も身に覚えが無いのに、ぎくりなった。

「な、なんだよ」

いぶかしげな顔をしている直久に、和久はさらに付け加えた。

「僕はいつかは、直ちゃんも力が目覚めるとは思ってたけど、何がきっかけだったんだろうなあと思って」

「さあ？」

直久は、何が言いたいのかさっぱり理解できず、苛立ちをこめた短い返事をした。それを見て、和久が一瞬驚いた表情を見せる。

鈍すぎ……、と弟がつぶやいたような気がしたが、気のせいだと思っことにした。

（それにしても……）

直久は再び眉をひそめた。知らず知らず、和久の言葉が何度も反芻している。

僕はいつかは、直ちゃんも力が目覚めるとは思ってたけど。

不思議な力を持つ一族。現存する九堂家とその血族は、直久以外

全ての人が何らかの能力を持っている。

できるだけ、外部からの婚姻を避け、血族間で子孫を残し、何百年もの間その血が薄まらないようにしてきた。

部外者を忌み嫌い、まるで、己たちだけが別人種であり、己たちの国があるかのように外界からの干渉を拒絶する。

そんな孤高の一族 九堂一族。

直久にとっては、出来うる限り触れずにいたいアキレス腱であり、いくら切っても切り離すことはかなわない、もはや呪いのような存在だ。

そうだ、自分たちは呪われているんだ。このよく分からない能力も、きつと何かの呪いか祟りか、罰なのだ。そう思わなきゃ、やってけない。

そうやって自分はこの十六年間を生きてきた。

けれど、結局自分もこの呪われた血から、逃げることはできないのかもしれない。

「なあ……」

直久は、前方を見ながら、ぼつりと言った。

「ウチってさ……」

口ごもって、言葉が続かず、ついには閉口してしまう。

だが、直久のそんな様子から、和久は敏感に感じ取る。双子の兄が何を言いたいのかを表情を読むことなんて、紙に書かれた活字を読むのに等しい。

「もしかして、九堂一族のこと聞きたいの？ どうして、うちの一族は妙な力を持っているのか……とか？」

直久は内心舌を巻きつつ、観念して頷いた。その兄の様子に、さも嬉しそくに和久はおどけて見せた。

「その言葉を待っていたんだよ、ずっと！！」と付け加えながら。

「でも何で急に？」

「だってさあ……見ちゃったんだぜ、俺。霊なんて存在しないなんて主張していた訳じゃないけどさあ……本当言つと、半信半疑だっ

たつて言うか」

実際、何度も目のあたりにしてきた。弟と従兄弟が死闘を繰り広げる姿も、両親が誰もいないはずの空間に向かって話しかけている姿も。

だが、自分には見えない。

そこに霊がいるといわれても、何も感じない。

「でも、確かに見ちゃったんだ、オレも」

「あの手は、生きてる人間のものじゃなかった。でも、本当に見えた。確かに存在してたんだ」

「うん」

一つ一つ、昨夜のことを確かめながら言葉にする直久に、和久は全てを受け止めるように頷いた。

前に誰かが言っていた。

霊の存在を信じるか否かという質問は、霊を見ている人にはナンセンスだと。なぜなら、彼らはいつも霊と共に生きているのだから。「霊も、僕たちの力もちゃんと認識したら、どうしてこんな力を持っているのだらうって疑問に思ったんだね」

自分のモヤモヤとした気持ちを、さらりと代弁され、素直に頷いた。

自分はいったい何者なのだ。何のためにこの世に生まれてきたのだらう。

ずっと自分は、必要の無い人間だと思っていた。

でも、自分にも何か力があるのだとしたら、何か役目があるのだとしたら、それは何なのだらう。

「いいよ、教えてあげる。本当は、お祖父様か、お母さんに聞いた方が確かなんだけど、今知りたいでしょ？」

その覚悟はあるのか。

全てを受け止める覚悟はあるのか。

真実を見る目は持っているか。

そう問われているような気がした。
弟に、ではない。

“運命”というものに、だ。

直久はごくりと生唾を飲み込み、それから、もう一度、ゆっくり頷いた。

「よし。まず……直ちゃん、陰陽師って知ってる？ 安倍晴明とかあへのせいめい聞いたことない？」

「ない」

「じゃあ、そこからだね」

ちらりとゆずるを氣遣う視線を送ってから、再び直久の目を見て、和久は説明しだした。

「陰陽師というのは、平安時代に活躍した、いわば占い師みたいな人たちのことで、安倍晴明は、その陰陽師の中で最も力が強いと言われた人なんだ」

「はあ……」

いきなり平安時代まで話が飛んでいってしまい、直久は拍子抜けした声で返事をした。

（せっかく勢いつけたのに……）

「だいぶ前に、占いブームになった時、安倍晴明が注目されたから、彼についてはそこそこ知っている人が多いけど、陰陽師」安倍晴明みたいに思い込んでいたりする人がほとんどなんだ。だけど、陰陽師っていうのは、仕事の一種なわけ」

「刑事さん、とか言ってるのとかわからないわけだな」

「そう。だから、彼の他に何人も陰陽師がいたわけだ。まあ、他の陰陽師が彼一人の影に収まってしまっただけに、安倍晴明は強い力の持ち主だったんだ」

和久はいったん言葉を句切った。足下の雪に目を落とす。

「彼の影で、歴史の波に吞まれ、消え去っていった陰陽師たちの中に、おおものやすなり大伴泰成という人物がいたんだ」

「どっかで聞いたことがある気がする」

「そりゃ、僕たちの御先祖様だもん」

「なぬ？」

突然話が自分たちの一族につながったので、直久は目を見張った。

「ところが、僕たちの御先祖は他の陰陽師たちみたいに、晴明の影で黙っているような人じゃなかったんだ。彼は晴明と同等、ううん、それ以上の力を手に入れようとして、様々な鬼たちと契約した」

「はあ？ 契約？ 鬼と？」

直久は顔を引きつらせた。

（鬼と契約って……）

鬼というものを見たことはない。だが、その契約が良いものが悪いものかというのは、感覚的に想像できた。

よく西洋の小説や映画でも、自分の欲のために、悪魔と契約をした人間の話がでてる。

（何となく……ショック……）

自分たちのご先祖さまは、実はあくどい人だったのだろうか。

「そうなんだ。自分の死後、自分の体を捧げるから、自分の式神になれ、って契約したんだよ」

「か、体を捧げる！？」

次から次へと、信じられない言葉が飛び出すので、若干ついていけてない。だが、なおも和久の言葉の攻撃は続く。

「鬼とか、妖怪たちの中にも、性格の違いがあるんだけど、大抵、捧げられたら、食べるよ」

「……た、食べる……！？ だ、誰を！？」

「だから、契約者を。実際、彼が亡くなった瞬間、その死体が、髪の毛一本残さず消えちゃったんだって。つまり、彼に使役されていた鬼たちが契約通りに持っていたからなんだ。ある鬼は右腕、ある鬼は左足みたいに、彼の死体からもぎ取って」

「ひえええええ」

小さく叫びながら、両頬に手を当てた。そんな直久にニコリと微笑む弟の姿が急に恐ろしいものに見えてきた。

彼にとつて、それは日常なのだ。それが普通に行われている世界に、今までも生きてきた。

ヒトが動物の一部であり、弱肉強食という自然の摂理の中で生きているのと同じように。直久の知らない世界の厳しい掟を垣間見た気がして、どう飲み込んでいいか分からなかった。

「彼は、より強い式神を手に入れるために、強大な力をもつ鬼を探し歩いてこの関東まで来た。そして一匹の雌狼と出会ったんだ。その妖狼は真っ白い毛並みの、本当にきれいな狼だったんだって。まあ……いろいろあって、彼はその狼との間に女の子を儲けた」

「儲けたって。狼だろ？」

「人間と獣の結婚って、よくある話だよ。中でも狐の例が一番多いね。人間に化けた狐と、そうとも知らない人間の獣婚の話、昔話とかになって語られてるでしょ」

「ぶ、物理的に無理だと思うのはオレだけだろうか……？　ほらサイズとか、その他もろもろ……」

「あーハイハイっ！！　とにかくっ！！」

直久の頭の仲が、よからぬ方向へ突き進んでいくのを、寸前のところで食い止める。

「生まれてきた女の子の名前は、小夜^{さよ}」

小夜……妖狼と人の間に生まれた娘……。まるで、小説やB級映画が何かに出てきそうな設定だ。

他の人が聞いたたら、冗談でしょう？　と鼻で笑われるのがオチだ。本当にそんなことが現実にあったというのだろうか。

いや、でもそれを本気で信じているのが自分たちの一族なのだ。

（妖怪、悪霊、神。オレたち一族は、いったい何者なんだ……）

自分たちこそ、ヒトの形をした“ヒトでないもの”なのかもしれない。

「ちなみに、清明よりも小夜の方が強い力を持っていたと言われているんだ。それが証拠に、清明は自分を負かせた小夜に、幾度も求婚したんだけど、そのたびにフラれていたとか　もつとも、そんなことを言っているのは、うちの家だけだから、少々着色されてるだろうけど」

と言つて、和久は肩を竦めた。

「幼い頃、小夜は泰成ではなく、母狼に九匹の兄妹たちと共に育てられたそうだよ」

「もののけ姫っ！」

「……で、彼女は成長と共に、関東で名声を高めていくんだ」

「つてスルーかよっ！！」

「その名声は、遠く都にまで聞こえるようになり、度々都へ呼ばれるようになる。まあ、ここで清明と対面したんだろうね」

「つてそれもスルーかよっ！！」

「巫女として活躍した彼女は、九匹の妖狼を式神に持っていたことから、九狼の巫女と呼ばれるようになったそうだよ。九狼　その“くろう”という音がいつの間にか“くどう”になって、“九堂”になり、それが本家の姓となったわけ」

「……………」

「どうしたの？」

「いえ……途中から消化不良で、胃薬欲しい感じなんです」

「うん、一気に言い過ぎちゃったかも」

幼い頃から、この話を何度も聞かされてきた和久にとっては、学校で暗記させられる『枕草子』よりもスラスラと言葉が出てくるらしい。

最後に弟は、要するに一族の人間離れた力は、自分たちの血にその雌狼の血が混じっていることが原因だ、と言った。

「狼だけならいいんだけどね」

「え？」

「婚姻を重ねることで、血が薄まり、力を失うことを畏れた僕らの

祖先は、薄くなる度に妖怪と交じったらしい」

そして、さらりと和久は言つてのけた。

「たとえば、お祖母様のお父様がイタチの妖怪なんだ」

「い、イタチ……ご冗談をつ」

「でも、曾お祖母様は未婚でお祖母様を生まれたんだ。うちのよう
なお堅い御家で、未婚の母って普通じゃないと思わない？ 勘当す
るくらいはしそうでしょう？ なのに、その母娘は厚く礼遇され、
娘が当主に嫁ぐんだ。おかしくない？」

確かに、和久の言つてゐることは筋が通つてゐる。

だけど、そうなる……。

「オレらイタチが混じつてゐるわけ……？」

衝撃に打ちのめされ、直久はその場に立ち尽くした。突然足を止
めた直久の背中をよけるように、ゆずるが横へずれた。

「急に止まるな」

「……だつて、イタチ……ま、まさか、だからオレは天才的に運動
が得意なのか……？」

「いや、でも、僕にも混じつてゐるんだけど。僕、体育2だよ」

直久は、今、まさに気がついたというように、弟の顔を見ると、
深いため息をついてから、同情をこめて弟の肩に手を置いた。

「……オレが全部、吸い取っちゃったんだな」

「そうかもね。でも、僕、赤点は一つもないし、体育もテストで力
バーしてるし、それでいいよ」

「うっ」

二の句が告げないでいると、ゆずるも弟を援護射撃する。

「運動だけで、勉強が壊滅的……どうよ」

「ぐはっ」

「だよ、ね、跳び箱飛べなくても、大学は入れるよ」

「かはっ。……オレ、今、吐血したところね」

直久は体を折り曲げ、口に手を当てた。

「……うぜえ……」

ゆずるは吐き捨てるように言うと、双子を追い抜き、先に行こうとした。その腕を、とっさに直久が驚づかみする。

「あんだと、てめえっ」

唸るようにすごむ直久を、見ようとせずには直久の腕を振りはらう。

「……触るな」

足を止めずに、一言だけ残し、ゆずるは心配そうにこちらを見ているオーナーのもとへと向かっていった。今にも噛み付きそうな顔で、直久はそれを目で追う。

と、肩に弟の手が、ぽんと乗せられた。

「直ちゃん」

ぐるんと首をひねり、弟を見ると、弟は寂しそうな笑顔を返してきた。その物言いたげな表情に、直久の怒気がいつきに蒸発した。

何かあるのか。

自分の知らない、本家の事情。ゆずるの心をここまで冷たく凍りつかせてしまった、理由が……。

「行こう」

和久は前方で心配そうにこちらを見守っているオーナーに、今行きます、と会釈する。

「ほら、直ちゃん」

和久が促すので、しぶしぶ直久はオーナーの方へと歩き出した。

第八話 寒椿か……

屋敷を出て三十分はたっていないだろう。ずいぶん森が深くなってきた。

直久の頭上の太陽光は、幾重にもなる葉のわずかな隙間をすりぬけ、地面に到達するしかない。夜になれば闇が全てを溶かしこみ、際限のない漆黒の世界が広がるだろう。

それに肌寒い。

獣道の両サイドに積まれた雪も深く、腰の高さまである。

しかし、最後に雪が降ったのが2日前だというのに、人がやっと一人通れるだけのスペースは道として確保してあった。

ご苦労なことに、オーナーは毎日この道を通り、この先にある祠にお供え物を届けているという。信仰心の現れというべきか、それとも強迫観念からというべきか。

その根底にあるのは畏れであり、恐れであろう。

直久には、体格の良いオーナーの広い背中に背負っているものを感じる、ひどく哀れに思えた。

彼のせいではない。

娘のせいでもない。

生まれた家を間違えたのだ 自分のように……。

「あの先です」

オーナーが前方を指さした。

三人は無言でその指の先を追うと、二本の太い木が目に入った。その木と木を一本の縄がつないでいた。縄には、稲妻のような形をした白い紙が垂れ下がっている。神社でよく目にするものだ。だが、どちらも汚らしく黒ずみ、神聖なものというより、まがまがしさが先立つ。

ゴールは目の前だというのに、森の薄暗さも手伝って、直久の足取りは重い。

数分後、祠の目の前にたどり着いた直久は、足を止め、あたりを見渡した。そして、目の前に広がる光景に、思わず息を呑む。

「！？」

まず目に付くのは祠。

直久の目の高さに、さきほど離れた所からも見えた、二本の木を繋ぐ白い縄がある。その縄の一メートルほど奥に、小さな小さな古い祠はひっそりとたたずんでいた。まるで祠がこちらを睨みつけるようだと言ふ感じがした。

祠全体が古い石でできている。かつては何か装飾が施されていたようだが、原型を想像することもできないほど劣化していた。だが、それでも十分すぎる存在感に、直久は圧倒されていた。

しかし、直久が驚いたのは祠の寂れきった様子でも、威圧的な様子でもない。

（綺麗に雪がないしっ）

その祠を中心にして、半径二メートルほどの円を描くように、綺麗に地面が見えている。くり貫かれたように雪が無いのだ。

「こりゃー雪かき大変だあー」

オーナーはペンションだけじゃなくこの祠のオーナーでもあるのか、と一人で直久が納得していると、山吹オーナーは「違いますよ」と首を横に振った。

「ここだけ、なぜか雪が積もらないのです」

「えっ！？」

声を発した直久だけでなく、和久とゆずるもオーナーを振り返った。

「毎年、たくさん雪がふるのですが、ここだけは絶対に雪が積もりません。昔からずっとそうだったようです。私どもはこれも山神様の力だと、伝え聞いています」

改めて、直久はその祠を見た。

石で出来た祠は、浸食が進みなんともみすばらしい。こんな祠に、周りの雪を溶かす力があるとは、到底思えなかった。

（けど、こうやって実際に不思議な現象を目にするとなあ……信じたくもなるよな、山神さまとやらを）

重たい沈黙が、一行を取り囲んだ。

ふと、ざわざわと風が木々を揺らす音が直久の耳に届いたかと思うと、蜘蛛の糸ほどの細い木漏れ日が、織糸のように幾重にも重なって、祠を照らしだした。

幻想的というより、物悲しい。自分の胸に寂しい気持ちが入り込んでくるようで、直久は“寂しい”以外の言葉を見つけることが出来ないでいた。

ここに、一人で取り残された生け贄の娘たちはどんな気持ちで、ここに立ち、この祠を見下ろしたのだろう。

彼女たちを思うと胸がぎりぎり痛んだ。

沈黙を破ったのは、それまで静かに辺りを観察していたゆずるだった。

「注連縄に紙垂……そして、それは封印符か」

ゆずるは縄のすぐ下の地面を指差した。そこには二つにちぎられたのだろう、長方形の白い紙が落ちていた。

ゆずるの言葉を受け、無言で和久はその紙を拾い上げると、つながり合わせた。切片はぴたりと一致する。

よく見ると、朱字で“封”と書かれているのが、かるうじて読めた。

「この祠は、神を崇めるといふよりも……ここに閉じ込められているというわけですね」

オーナーを振り返り、返事をまつ和久。だが、オーナーは困った顔をした。そして、詳しいことは知らないのだと言う。

本当に何も聞かされていないのだろう。直久の目には、彼が嘘をついているようには見えなかった。

「では、この祠について、知っていることを全て教えていただけますか？」

和久の言葉には、柔らかく微笑みをたたえていても、有無を言わ

さぬところがある。

「わかりました」

僅かに戸惑ったようにも見えたオーナーだったが、ついには深くうなずき、和久を見つめ返した。その表情には、覚悟がにじんでいる。

「かつて、生け贄は、ここまで村人に付き添われてやってきました。そして、この祠のすぐ向こうの崖から、神にその身を捧げます」

「……捧げるって」

直久は恐る恐る聞いた。先ほど弟から鬼に身を“捧げる”ご先祖様の話を聞いたばかり。少々過敏になっても仕方無いことだった。「つまり、崖から飛び降りるのです」

「そ、そのあと食べられたりとかしないですよっ!!」
「は？」

オーナーは訝しげな顔で、直久を見た。

「あ、いや、なんでもないデス……」

直久が引き下がったので、オーナーはとくに気に留めずに、改めて祠を見やった。

そして、手を合わせ、持ってきたオニギリを一つを供え、かわりに、昨日お供えしたのだろう、硬くなってしまった古いおにぎりをしまい込む。

直久はそんなオーナーにつられて、そつと手を合わせる。だが、和久とゆずるは違った。ゆずるは刺すような視線で祠を睨み、和久はしきりに周囲を気にするように視線を泳がしている。

「さあ、戻りましょう」

気が済んだのか、すっきりとした顔のオーナーが三人を振り返った。

直久は、異議なしと、コクコクと首を縦に振った。

寒いし、薄暗いし、不気味だ。それに山の天気は変わりやすいと聞く。とつとと帰ろう。今すぐ帰ろう。帰って、あったかいコタツに入り、みかんが食べたい。

（ペンションにコタツがないのが残念すぎるっ！！　なんで洋風なんだっ。冬はコタツとみかんだろっつ）

勝手に鼻息を荒くしていると、隣にいた和久がぼつりとつぶやいた。

「椿……」

今度は何だ。

そう思ったのは直久だけではなく、オーナーもだったらしい。オーナーはぎくりと体を硬直させた。

一般人や直久が言うのではなく、和久やゆずるが口にするのと、たとえば植物の名前だったとしても、ひどく危険で、禍々しいもののようないきがしてしまう。

直久は、若干、怖気つきながらも周囲を見渡した。それで、初めて祠の周囲に真っ赤な花が咲き乱れていることに気がついた。

「寒椿か……」

椿は普通その名の通りに、春に咲く花を付けるが、他の草木が枯れる真冬に鮮やかに咲くものもある。それを寒椿と呼ぶ。

園芸にも華道にもまったく興味のない直久だとて、名前ぐらいは知っていた。

（寒椿　　）

なんと美しい花なのだろう。

美しすぎて、吸い込まれそうだ。

（妖艶ってこういうののことを言うのかな……うん、オレ今すごい頭よさげじゃね？）

直久が自己陶醉していると、ぱつと和久が彼を振り返り、にっこりと笑った。そして、オーナーに向きなおる。

「帰りましょう」

「椿は、不吉な花だとされているんだ。彼岸花に匹敵するくらいね」
帰り道、やはり和久は小声になった。

兄が、椿がどうした、としつこく聞くのでオーナーに心配させないよう十分に配慮しながら、話をしなくてはならない。

「ふ、不吉？」

思わず聞き返した兄に、和久はこくりとうなづく。

「彼岸花は知っているよね？ 曼珠沙華まんじゅしゃげとも言うけど」

「昔、墓地とかによく咲いてるヤツだろ？」

期待通りの答えに、和久はにんまりと顔を緩ませ、首を縦に動かした。

彼岸花。その名の通り、お彼岸の時期に咲く花だ。別の説には、毒を持つこの美しい花を食べた後は“彼岸（死）”しかない、ということからその名がついた、とされる。

「死人花しにひとばな、地獄花、幽霊花、なんていろんな別名を持つてるくらい、不吉だといわれている花なんだ」

「毒があつたのか……綺麗な華には毒がある……綺麗な女は猛毒を吐く……」

急に、思いつめたような顔で兄がぶつぶつと言い出した。

「……どうしたの？ 何の話？」

「我が家の姉君の話。暴君とも言つ……」

「……」

ほぼ同時に双子の頭を、『己の道に立ちふさがるもの全てをなぎ倒して突き進む、天下無敵の女性』が高笑いしている様子がよぎり、畏ろしさ無言になる。いや、怖ろしさか。はたまた、身の危険とも言っただろう。

「そ、そんなことより、椿は？」

「そ、そうだね、えつと椿は……」

椿は一見、可愛い印象すら受ける赤や白の花である。
不吉なこと 死とは結びつかないように思われがちだ。

「人が死ぬ瞬間を表現するのに使われやすい植物、それが椿の花なんだ。椿の花って、咲ききると花の部分がそのままの形で落ちるでしょ。ポトリって。その様子がまるで、首が落ちるみたいだって言うんだよ」

「誰がそんな不吉なことをーっ！」

「知らないよ。昔からそう言うの。で、その椿の花が落ちるシーンがあつたら、首を刎ねられて死んだんだなあ、と想像させる演出に使われているわけ」

「ひいひいひい」

息を吸い込むようにして、声を出さないように悲鳴を上げる兄は、本当に器用だと思う。そして、ほほえましい。ここまで素直な気持ちを表に出せるのが和久にはうらやましくもある。

「それより」

後ろからゆずるが声をかけてきた。

条件反射のようにゆずるを睨見返す直久の姿に少々目を丸めながら、和久もゆずるを振り返った。

「あの祠……」

ゆずるがちらりとオーナーに視線を送った。その瞳に、かすかに思いやりの心が見え隠れしているようにもみえる。

「うん。ゆずるも何か感じたの？」

「いや。俺は今日は……」

ゆずるは口惜しそうに舌打ちすると、すっと目を伏せた。

今日は新月。

まるで月の光のように満ち欠けするゆずるの霊力。

夜空で身を潜める新月のように、ゆずるの強い霊力は、その一切が体の奥底で眠りにつく日だ。

つまり今日一日だけは、ゆずるは霊力を持たない一般人となる。^{ターゲット}

「そうか。しょうがないよ、今日は。でも、ゆずるの想像通りだよ」
あの祠にはもう……。

和久の目がゆずるにそう語った時、一人、相変わらず、わけが分

かっついていない直久は「何だ何だ？」と二人の顔を交互に見比べている。

和久は、いつものように、兄に向き直り懇切丁寧に説明し始めた。

「あの祠の主は、もうあそこにはいないんだ」

「いない？ あの祠の主が？」

「あの山の神と違ってたね、オーナーは」

そこでやっと兄は言葉を飲み込んだようで、目を丸々と見開いた。

「ど、どこいつちゃったんだよっ！ だって、オーナー一生懸命毎日拝んでるんだろう？ 留守なのに拝んでるわけ、雪かきまでして！？」

「うん……」

だから、とてもオーナーには言えなかった。

あなたが毎日娘のために祈っている神は、そこにはいない、とは「絶対に秘密にしておいた方がいいよな」

直久は、小声で確認する。

「そうだね。たぶん、オーナーの最後の頼みの綱 心の支えになっていると思うんだ」

和久は、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、先頭を行くオーナーの背中を見つめた。

「でもよく、その神様はどこへ行っただんだ？」

「さあな」

直久の当然の疑問に答えたのは、珍しくゆずるだった。ゆずるは小さくため息をついてから、面倒だな、と言った。

「生け贄を捧げられていた程だ。よほど力を持ったヤツだろう」

たしかに、と和久は思った。

今、完全に力を失っているゆずるには分からなかっただろうが、

あの誰もいないはずの祠に和久は何者かの気配を感じていた。

それはおそらく、祠の主である『神』の残像に違いない。その残像だけで、祠の周りの雪を溶かすほどのエネルギーを保つことができているのだから、本体の力の強さは計り知れない。

できれば、かかわらずに済ませたい。

こちらがちよっかいを出さなければ、向こうからわざわざかまってくることはないだろう。

よほど興味をそそられるものが、ない限りは……。

（ただ……）

和久は顎に手をやり、難しい顔になった。

（あの祠が屋敷に影響を及ぼしているのは確実なんだよな……まいったなあ……）

和久が押し黙ったので、直久も何となく黙っていなくてはならないと思ったようだ。すると会話がなくなるのがこの三人の特徴だ。誰もが口を閉ざしたまま、山を降りきり、森を抜けると、ペンションという名の伏魔殿が三人の前に仁王立ちするかのように、その姿を現した。

「とにかく……もう一度」

和久が兄と従兄弟に向かい言葉が続けようとした時だった。

（……！？）

背後に、射抜かれそうなほど強い靈気を感じたのだ。

和久は、険しい表情で、ぱっと体をひねり、屋敷の三階を見上げる。窓に映し出された人影を見とめ、睨みつけた。

数秒の後、人影はすっと窓から消えた。

（……あそこの部屋は確か……息子さんの……）
でも、なぜ。

これほどの強い靈力をあの部屋から感じるなんて。あの部屋はいったい……。

「どうした？」

兄が和久の様子に、何だどうした、と従兄弟と顔を見合わせている。

「わからない……」

ただ、今のはつきりしたことがある。

さっきの視線に含まれていたのは、靈気。

あの部屋には、何かがいる この世のもでない何者かが
もう一度」

和久は三階の舜の部屋を再び睨みつけながら言葉を続けた。

「あの二つの部屋を、調べる必要があるみたい」

第九話 俺にかまうな（1）

「ちょっといいですか」

直久は、屋敷のエントランスに足を踏み入れたちょうどその時、背後で和久がそう言うのを聞いた。振り返ると、和久がまっすぐな視線をオーナーに向けている。

（な、なんか切羽つまってない……？）

和久の声色は柔らかだし、物腰も落ち着いている。だが、どことなく緊迫感を含んだ笑顔に、生まれたときから一緒にいる双子の兄は、ただならぬものを感じ取っていた。

「わかりました。どうぞこちらへ」

オーナーの顔にも、緊張の色が浮かぶ。

案内されるまま、応接間へと足を進めようとした時、双子をゆずるが引き止めた。

「悪い。あとは任せる」

そう言って客室に戻ろうとするゆずるの顔は真っ青だ。

ひどく具合が悪そうだなと、直久が思った瞬間、ぐらりとゆずるの体が揺れた。すかさず、和久が両手を差し出し、体を支えてやる。「大丈夫？」

優しく声をかけ、ゆずるを覗き込む和久の顔は、心配そのものだった。

だが、ゆずるは乱暴にその手を振り払い、自力で客室に戻ろうとする。

「俺にかまうなっ」

「……………」

和久はそれ以上強く言わず、ゆずるの背中を無言で見送った。そんな弟を見守りつつ、ゆずるを睨みつける直久。

和久がこんなに心配してくれているというのに。

人の厚意を一切合切受け取らない、むしろ、ゆずるのために良か

れと思って接してくる相手をゴミでも見るかのように扱う態度も気に入らない。

「……無理して山を登ったから……ちょっと休めばまた良くなるよ」
そう言つて直久を振り返つたその顔は、困惑と寂しさが入り混じつているようにも見えた。

「さ、行こう。僕たちはやることをやろう」

和久は顔を引き締め、応接間へと足を踏み入れる。直久も、今にも噴出しそうな憤りを何とか飲み込み、和久に倣つた。

二人がふかふかソファに腰掛けるなり、和久はすぐさま本題に入る。

「単刀直入にお聞きします。息子さんのことを教えてください」

「……え？」

オーナーはきよとした顔で、聞き返した。

（え？）

予想外の反応に、驚いたのは直久だけではなかった。思わず弟の顔を見ると、弟も眉を寄せている。

「息子さん　瞬さんとおっしゃいましたか。三階にいらつしやると聞きました。まだ一度もお会いしたことがないのでご紹介いただければと思つたのですが」

もう一度、和久が事実を確かめるように問う。

だが、オーナーは首をかしげ、わけがわからないというようにお鵜返うむがえしする。

「息子？ 私のですか？」

「……はい」

「……私には娘しかおりませんが……」

心底、不思議そうな顔で、オーナーはそう言い切つた。

「え！？」

驚きの声を上げたのは、直久だった。

「だって、八重ちゃんがお兄さんがいるって言ってましたよ？ 足が悪いから部屋に籠もってるって……」

「八重が？」

とたんに、オーナーは眉をひそめ訝しそうに顔をゆがめた。

「なぜあの子はそんな嘘を……。すみません。どうやら、娘が混乱させてしまうようなことを言ったようですね」

「……え、でもっ！ 八重ちゃんが嘘をついているようには」「直ちゃん」

納得のいかない直久を、弟が制した。

何で止めるんだよ、と憤りを感じながら弟を振り返る。すると、静かに首を横に振り自分を見つめる弟に、ぐっと言葉を飲み込まざるを得なかった。彼の眼光に圧倒されたのだ。

「……瞬という名に覚えは？」

「ありません」

きっぱりとオーナーは返事をした。

彼の態度から、嘘は微塵も感じない。でも、確かに八重の言葉にも嘘は感じなかった。

（いったいどうなってるんだ……）

“瞬”とはいったい何なんなんだ。ヒトなのか、それとも。

応接間を後にするなり、弟は無言で階段を上り始めた。直久もそれに続く。

「どういうことだよ」

「……おそらくけど」

二人は一階の踊り場を大股でやり過ごす。

「三階にいるのは」

二階につき、和久の足はさらに上階へと加速する。

「人ならぬ、強靱な霊力を持つ

」

ついに、二人は駆け出していた。

全速力で、三階の廊下を直進し、その部屋の一メートルほど手前へと辿りついた時には、ぜいぜいと息は上がってしまう。

「あの祠の主だ」

(！)

和久の言葉に直久はぎょつとなつたわけではなかった。

触れただけで、全てを凍らせてしまうのではないかと思うほどの冷たい空気が、その部屋の扉から溢れ出ているのが“見えた”のだ。明らかにその空気は周りとは違う。灰色の煙のように、うねり、揺らめき、それでいて上昇するわけでもなく、下部に留まり続けている。明らかに不自然だった。

もしかすると、これが霊気というものののだろうか。

直久は思わず、ごくりと唾を飲み込んだ。

話に聞くだけだった異形の世界を目の当たりにし、明らかに自分の中の変化を実感する。

昨日までの自分とは違う。

何かが変わってしまった。

今まで、何度も触れたかった世界だったというのに、自分の変化がどこか恐ろしい。

このまま、自分はどうなっていくのだろうか。

本当に喜ばしいことなのだろうか。

一族のみんなの仲間になれた、それだけで済むのだろうか。

「もしかして、直ちゃん、あの霊気が見えてるの？」

和久の声で、直久は我に返った。

「灰色っぽい煙みたいなヤツのことか」

「本当に見えているんだね」

和久のことだ、直久の能力について疑っていたわけではないのだろうが、今まで何の能力も見せなかった直久に見慣れていたもので、ものめずらしいところだろう。

本当に、なぜ急にこのような状態になったのか。本人も皆目検討もつかない。

「とりあえず、そのことは後でゆっくり考えよう。お祖父様に聞いた方がいいかも」

「じじいに？」

条件反射的に直久の顔が引きつった。

双子の祖父は、ゆずるの祖父でもある。つまりは一族の頂点に立つ、九堂家当主のことである。

「何でそこで嫌そうな顔するかなあ？ お祖父様に一番可愛がられているのって、直ちゃんでしょ」

「ばばあには、嫌われてるけどな」

「そんなこと」

和久は、最後まで言葉を紡ぐことができないようだった。無いとは言いい切れない微妙な事実、和久も思い当たったのだろう。

それもそのはず。

祖母は、なぜか直久を自分から遠ざけようとする。恐ろしいものを見るような目で。

本人の被害妄想ではなく、意識過剰でもない、周知の事実なのだから。

直久も、幼いころはそのことで、胸を痛めたことも少なくなかったが、もう慣れた。それに、今ではあまり本家に近づかないようにしているために、祖母と接触することもほとんど無い。

「とにかく、その話は後にしよう。行くよ」

「よしっ！」

和久を先頭に、一歩また一歩、扉へ近づこうとし、三步目の足を踏み出そうとした、その時だった。

（　　！！！！　　）

ぴたりと、直久の足が止まった。声を発したわけでもないのに、気配を察したのか、和久ががばりと直久を振り返った。

「どうしたの？」

「……動けねえー」

「え？」

直久は顔を引きつらせ、切々に現在の状況を訴えた。
両足共に、石化したのではないかと錯覚するくらい、硬直している。

動かないのだ。自分の意思では、首から下を動かすことができない。

だが、弟は分かってくれていない。ふう、とため息をついて、兄をたしなめるような言い方をした。

「何、遊んでるの？　こんな時に」

「遊んでない、遊んでない。マジ動けないって」

「ホントに動けないの？」

「うんうん。蜘蛛の巣に引っかかった蝶々って感じ。もしくは、ゴキブリはいほいに捕まったゴキブリ」

「……たぶん、直ちゃんなら後者だね。ちょっと待ってて」

和久はきりりと顔を引き締め、両手を胸の前で合わせると、数秒、目を閉じた。そして、ぱちりと目を開けたかと思うと、直久の回りを見渡す。

再びため息を吐きながら、手を元に戻した頃には、和久の顔に新たな緊張が生じているようだった。

「結果が張ってあるよ」

「結果？」

「それも捕獲用の……」

「なんだそれ？」

「簡単に言っと、罾みたいなもの。悪霊とか妖怪専用の罾だから普通、人間は掛からないはずなんだけど」

「なんで俺、掛かってんだよ！」

「……なんでだろう？」

こんな時に、弟は暢気に腕を組んで、考え込み始めたので、直久はたまらない。

「なんでもいいから、早く助けてくれよ……」

情けない声を出す直久。だが、弟は申し訳なさそうに頭を振るだけだった。

「結界を張った本人にしか解けないんだよ。あとは掛かった者が結界を張った者の力を上まる力で破るか、第三者が圧倒的な力で破るか……。さつき直ちゃんが蜘蛛の巣に掛かったゴキブリみたいって言ったけど」

「ゴキブリじゃなくって、蝶」

「それにしても、ゴキブリって蜘蛛の巣に掛かるんだろうか？」

「……って、聞いてねえーな、おい」

「それについての議論は置いて、つまりね、第三者が結界を破るには、例えば、人間が蜘蛛の巣を破るくらいの力の差が必要なんだ。蜘蛛と人間くらいの差だよ。絶好調のゆずるなら何とかなるかも知れないけど、今、絶不調だし、僕には無理。この結界を張った人かなりの力の持ち主だと思うよ」

「じゃあ、どうすんだよ！」

直久は大声を張り上げた、その時だった。

ギイイイイイ……

金属をこすり合わせたような音が、三階全体の空気を切り裂いた。ほぼ同時に、和久が弾かれたように振り返って、身構えた。直久も目を見張る。

（あれ……？ 扉が開いてる……？）

よく見れば、問題の部屋の扉が、わずかに開いているではないか。廊下には自分たちしかない。その自分たちでなければ、この扉を開けたのは……誰だ！？

（中に誰がいるのか！？）

食い入るように直久はその扉を見た。

明らかに霊気は、その開かれた扉の僅かな隙間から、次々とあふ

れ出し、廊下を満たしてく。まるで灰色のガスに気化していくドライアイスを見ているようだ。自分の膝下は、靈気で完全に視野から消えた。

「誰か来る……足音が近づいてくる」

かすれた声で、和久が言った。

「足音？」

直久は耳を研ぎ澄ました。だが、何も聞こえない。

ただ、徐々に自分を取り巻く空気が、冷えていくのを肌で感じる。口から出る息も白い。まるで、三階全体が大きな冷凍庫になってしまったように。

直久が、緊張からか、口の渴きを感じはじめた時、再びあの金属音が廊下を駆け抜けていった。

ギイイイイイイイイー――。

「――」

バンツと激しい音をたて、完全に開け放たれた扉。同時に、体が吹き飛ぶのではないかと思われる衝撃波が、二人を襲う。首から下が硬直している直久は、難なくその冷たい靈気の衝撃波をやりすぎしたが、和久はすさまじい風圧に、足を二、三步後退させられてしまう。

先ほどまでとは、桁外れの靈気だった。

今の直久なら、それが分かる。そのすごさが。

鳥肌が立った。だが、不思議と恐怖はない。

こんなにも、脅威的な靈気を放つ相手を前にしているというのに、胸が高鳴っている。

自分の中で、確実に何かが目覚めようとしている気がした。

「何やつじゃ」

それは、若い青年のような、澄んだ声だった。

直久も和久も開け放たれた扉の先にいる人影を見据えた。

初めて見るその青年だった。長くサラサラと揺れる亜麻色の髪を持つ、背の高い青年は、切れ長のグレーの目で、いまだ動けずにいる直久を見上げて、ふっと笑ったのだった……。

俺にかまうな(2)

「あなたがあの結界を張ったんですか？」

和久は、男に隙を見せまいとしつつ、疑問をぶつけた。だが、答えは聞くまでもない。そして、男も答えるつもりはなさそうだ。

「……ほう。そなたたちには、アレが見えておるのか」

面白いものを見つけたというように、男がじろじろと直久を見やる。そして、不気味な笑みを浮かべ出した。

「それにしても、面白いモノが掛かったものよ」

男は、ついに、くくく、と声を出して笑ったかと思うと、すっと片手を僅かに挙げた。途端に、直久の体がぐらりとゆれ、床に崩れ落ちる」

「直ちゃんっ!？」

何かされたのかと、肝を冷やし、和久は声を荒げた。

「縛を解いてやってただけじゃ」

明らかにからかうような声で、男が言った。

あの強力な結界を、たった一瞬で解くことができるということか。自分との力の差をまざまざと見せ付けられ、和久は体の震えを止めることができない。

「……どうした？ 我に用があつて参ったのではないのか？」

くくく、と笑いながら、男は部屋の中へと戻っていった。

これほどの力の差を見せつけられてたあとでは、部屋に入れ、と命じられたのと等しい。

和久は、床の上に尻餅をついたままの兄に目配せした。静かに兄は立ち上がり、自由になった体を確かめるように手首、足首を回してから、こちらを見て頷く。兄の体の異常はなさそうだ。

内心ほっとしつつ、視線を部屋へと戻した。

このまま部屋に入って大丈夫なのか。

畏ではないのか。

相手の正体も、その狙いもわからない状況では、判断がつかない。もし、相手が殺意を見せた時、自分ひとりで兄を守る自信がない。いや、無理だろう。自分の霊力の範疇を明らかに越えている。

しかし、断り相手の機嫌を損ねるのも利口とは言えまい。

味方につけることができずとも、せめて敵にしないように、逆鱗に触れぬようにしなくてはならない。

そのために、『これからあなたの縄張りで、悪霊と一戦交えるけど、気にしないでね。やつつけたら、さっさと帰るから』と、悪霊討伐の許可をもらっておくのが得策だろう。誰だって、自分の家の庭で、猫と犬が取っ組み合いの喧嘩を始めたら、うるさく思うものだ。

覚悟を決め、ぎりつと唇を噛みしめた和久は、兄に目で合図し、部屋の中へと足を進めたのだった。

部屋の中は、意外にも片付いていた。明らかに掃除され、カーテンやベッドカバー、クッションやソファーにいたるまで、清潔が十分に保たれている。

どういうことだ。

やはり、オーナーはこの部屋に、この男がいることを容認し、世話をしているということだろうか。だが、彼が八重の言う“兄”であることはない。確かにヒトの形をしてるが、人ではないことは明らかだ。

「あなたは……何者ですか？」

和久の声は、かすれた。

「我が先に問うたのだがのう」

面倒くさそうに、男は言う。だが、和久も引き下がらない。

「なぜ八重ちゃんは、あなたが見えるのですか。あの子はあなたを“瞬”という名の兄だと言った」

「八重……おう、あの娘か」

口端を少し上げ、男はにやりと笑った。そして、高そうな皮製のソファ―にその長身を沈めた。

「まあ、よい。結界を見破ったことに免じて、答えてやるかのう」

「あなたは、あの祠の主、山神　そうですね？」

ごくりと、喉がなる音がした。和久のではない。すぐ隣にいる兄のものだろう。いや、自分のだったかもしれない。

そう混乱するくらい、和久は自分が緊張していることに、気がついた。

「山神か……そうじゃのう、ついこの前までは、我をそう呼ぶ人間もいたのう」

「やっぱり、あの祠の主なのかつ……」

怖いもの知らずの直久は、あろうことに山神を人差し指で、びしつと指差した。

和久はぎょつとして、思わずその兄の腕を叩き下ろした。まるでハエ叩きでもするように。

「ちょ、ちよつと直ちゃん……！　神様だつてだから……！」

「いつてえつ。何だよ、カズっ……」

二人は同時に大きな声を上げた。

「あ、そうか。神様つてエライのか」

「エライっていうか……」

和久は口ごもった。

兄はわかっていない。

神がどれほど恐ろしいか。

神というものを敵に回すということが、どれほど愚かなことであるのか。

神は、気まぐれに人を助け、暇だからという理由で人の命を奪う。そして、一度機嫌を損なえば、自分の命は愚か、末代まで崇られる（出来れば……かわりたくなかったのに……）

そんな和久の心配をよそに、無敵の直久はさらに和久の度肝を抜

くようなことを言う。

「ていうかさ、神様なんだろうあんた。こんなとこで何してんだよ」
「な、直ちゃんっ!!」

しかし、自分を畏れずにまっすぐぶつかってくる直久が珍しいのか、山神は笑顔を崩さずに返事をする。

「この家の娘が、我を解き放った。その礼に、この家で悪さをして
いる輩を始末してやろうと思ったのじゃ」
ヤカラ

「娘……？ 八重ちゃんか？」

「今はその娘に、少し細工をして、ここを住みかとしておる。なあに、余興の一つと思うて、娘に世話をさせておったら、なかなか甲斐甲斐しいもののう。ほんに、ヒトとは、けな気なものよ」

そう言つて、ふふ、っと山神は笑った。
なるほど、と和久は思った。

きつと、姉のよしのを心配した八重が、祠に祈りを捧げに行き、何かの拍子に祠の封印を解いてしまったのだらう。久しぶりに自由の身となった山神は、礼として八重の願いを聞いてやろうとしているのだ。つまり、この屋敷に住み着く悪霊と化した、生け贄の少女たちを始末してやろう、と。

「ということは……結界で捕らえようとしていたのは、生け贄になった少女の霊」

和久は、確認するように山神を見つめた。

「予定外のモノが掛かったがな」

再び、くくく、と山神が笑い始める。それに力チンときたのか、直久は山神に食って掛かった。

「ほほ。あんた、良い神様なんだな。よく分かった。分かったが、分からん!!」

もはや何でもありだ。和久は、頭痛を覚え、額を手で押さえた。兄の無謀さも、ここまでいくと、尊敬の念すら生じるというものだ。「何で、霊ホイホイの結界に、オレが引つ掛かるんだよ。もっと、ちゃんとした結界を作れよ、神様だろうあんた」

「霊ホイホイ……くくくく……」

我慢の限界というように、山神はついに体をくの字に折り曲げて笑い出した。

「な、直ちゃん、失礼すぎる……」

「そうか？ 失礼なのはそっちだろう。オレが何で悪霊と間違えられなきゃなんねえーんだよ。どっからどう見ても、オレは善良な一般びーぶるだろうが」

「一般びーぶる……どこだろう……」

「まあ、運動能力は天才的だけどな」

自信満々に、胸を反らす兄に、小さくため息もつきたくなる。だが、そんな直久を、山神はますます気に入ったようだった。

「そっじゃのう。わびに、そちに一つ教えてやろう」

山神はまっすぐに直久を見た。そして、少しだけ右へと視線をずらす。

「私の結界が粗悪だったのではない。そちのその器の中で飼っておるモノに、結界が反応したのじゃ」

「はあ！？」

「！？」

二人は同時に眉を寄せた。

「どういう事ですか？」

「なんだ、何をそんなに驚いておる。そちも飼っておるではないか」
山神は和久を顎でしゃくり示した。

（僕が飼ってる……？）

思い当たるものといえば、蛇の式神『雲居』^{くもい}。

確かに雲居は普段和久の体内にいる。いると言っても正確に体のどの部分に収納している、というわけではない。多くの式神を所有する者は全ての式神を体内に入れておけないので、石など物体の中に入れておいたり、必要としている時だけ呼び寄せるなど形を取ることもあるが。いつも影のように、傍らにあるのが式神である。

（まさか……）

和久は恐る恐る、山神に尋ねた。

「兄も……式神を持っていると？」

「それをそちたちが式神と呼ぶのならば、そうなのであろう。されど、見たところ、そちたちに御しえる類のものではないように思うが」

「まさか……そんなことが？」

ありえない。

式神を自分の使役とするには、一度は式神と対峙しなくてはならない。それは、式神が主と認めるほどに強い霊力者に仕えるからである。

和久も雲居を使役とするために、深手を負うほどの死闘を制したのだ。

つまり、ある日突然、式神が体内にいました、などということは有り得ないのである。それなのに、霊力を持っていなかった兄が、気がつかないうちに、しかも、御し得ないほどの強力な式神を使役することができはるはずがないのだ。

「なんだよ？　どういうことだよ？」

直久が不安そうに和久を見た。

「僕にも分らない」

もし、兄の体内に何かがいるとしたら、それは式神などではない。そんな有益なものなら、どんなにいいだろう。

だが、おそらく、居るのはそれと相反するもの。しかも、自分やゆずるがまったく気配を察することができないほどの、強大な力をもつモノ。

どちらにしても、山神が言うように、自分では太刀打ちできない。「兄に害はないのでしょうか？　そんなモノが体内にいて、兄は大丈夫なんでしょうか？」

不安に、語尾が震えた。

しかし、思い悩む和久に、山神は意外にも優しく笑いかけた。彼は、この時初めて、和久に笑顔に向けた。

山神に自分の存在を認められたような気がして、不思議と落ち着いて気分になっていくのが分かる。

「害は無いじやろう　今のところはな」

「今のところ？」

「どうやら封印を施されているようだ。だが、解けかかっている。ごくわずかだが……そやつから妖気が感じられる」

「妖気！？」

「おそらく、その妖気が我の結界に掛かったのだらうて」

和久は愕然とした。

すぐに、全てを飲み込むことはできない。でも真実に違いない。神が嘘をつくことはない。真実を全て言わないことはあっても。

「なあ、何の話かさっぱりわかんないんだけど」

実に申し訳なさそうに、説明を求める兄を完全無視して、和久は腕を組んで考え込みだした。

（妖気……直ちゃんから……）

何か邪悪なものが、兄の体内の奥底に潜んでいるのだ。

それに、一つ引つかかることがある。さつきから、封印が施されている、という山神の言葉が、和久の心をざわめき立たせていた。

凶悪なモノを封印できるほどの、力の持ち主を、和久は多くは知らない。

（……本家は、まさか、このことを知って……いる？）

その時、和久の視界がゆらりと揺れた。否、目の前の空間が歪んだのだ。はっと我に返る和久。

『めしよの
主殿』

女性の澄んだ声が聞こえたかと思うと、すうーっと姿を現したのは和久の式神、雲居だった。平安時代の姫を思わせる着物姿をしているのが特徴だ。

だが、鮮やかな紅色着物よりも、目を惹くのは彼女の長く流れる

銀髪だろう。そよ風が吹くだけで、キラキラと輝き、思わず手を伸ばしたくなる美しさだ。和久が直久にいつも自慢するように、絶世の美女と表現するのが適切であろう。だが、いつも無表情なため、どこか冷たい感じがする美人である。

和久は雲居から知らせを受けると、一瞬にして青ざめる。

「直ちゃん、ゆずるが危ない！」

俺にかまうな(3)

直久が弟の言葉を聞き返そうと思った瞬間、視界から和久が消えた。

「！」

素早く首をひねり、部屋中を三六〇度見渡すも、弟の姿はどこにも見当たらない。

直久は一呼吸おいて、心を落ち着かせる。

大丈夫だ。心配することはない。

姿を消す前に、弟は、ゆずるがどうのこうのと言っていた。式神の雲居から一報を得て、とっさに二階の客室へ瞬間移動したのだから。

瞬間移動　直久の一族のうち和久クラスの能力者では、よく使われる能力で、霊力の強い者は瞬時に地球の反対側へ移動できるらしい。鉄道、船舶、航空会社の敵であり、実に便利で非科学的な力だ。

だが、いくら直久が何度も瞬間移動を目にするとはいえ、「瞬間移動するから！」とか宣言してから行ってほしい、といつも思う。突然、消えないでほしい。

「ほう。そなたたちはそのようなこともできるのか。ほんに、面白いのう」

ニヤニヤと笑みを浮かべ、足を組み偉そうにソファーにふんぞり返りながら、山神が言った。

そんな山神の方をぎろりと見ただけで、直久は返事をするつもりはなかった。すぐさま和久を追ってゆずるところに行かねば、という気持ちで頭がいっぱいだったからだ。

しかし、今にも全力で走りだそうとしていた直久を、山神が「待て」の一言で止める。彼の言葉は、まるでそれ自身が威力を持つかのように、直久の足をその場に縛り付けた。

「何なんだよっ！！ オレも助けに行かなきゃなんねーんだよっ！！」

苛立ちを隠さずに声を荒げる直久に、彼は飄々とした表示で、涼しげな視線を返してきた。何をそんなに慌てているのだ、愚かなことよ。その視線がそう言っていた。

直久がぎりりと歯を食いしばると、彼は口元をにやりとゆがませ、すうつと流れるような仕草で、片手を肩まで挙げた。

「この方が早い」

山神がそう言い終えるが早いか、天井から何かが落ちてきた。しかも、直久の真上に。当然、直久は落下物の衝撃で、バランスを崩し、ドサリと音を立てて床に倒れこむ。

「いてててて……」

軽く床にぶつけた後頭部を抑えながら、半身を起こそうとした時、目の前に誰かの足の裏が見えた。

「うわっ！ え、ゆずるっ！？」

ぎよっとなった直久は、自分のすぐ横に折り重なるようにして倒れているゆずると和久に詰め寄る。

「大丈夫……突然、ものすごい力で上に引っ張られたからびっくりしたけど……」

半身を起こした和久が、そう言いながら山神の方を見た。

「山神さまが、こっちに僕らを呼んでくれたんだろっ」

（そうか、それでさっき、『こっちのが早い』って言ってたんだな）

直久が二階のゆずるの部屋に駆けつけるより、二階の二人を三階のこの部屋に瞬間移動させたほうが『早い』という意味だったのだ。（そうならそうと、ちゃんと説明しろって、だから！ てか、だいたい何でオレの上に落っこつことすんだよ……オレはクッションかつつうのっ！！）

直久は山神を睨んだ。そんな直久の視線を、山神は軽くあしらうように笑う。あくまでも、直久をおちよくろうということらしい。うすら笑いを浮かべる彼の憎らしい顔が、ますます直久の敵意に油

を注いでいく。

「気にいらねえな……」

ぼそりとつぶやいた直久の声を受けて、和久が再び直久を振り返り、力なく笑いかける。

「でも……正直助かったかな……」

そう言って和久は、ゆっくり首を動かし、ゆずるに労わりの視線を送った。つられて、ゆずるを見やった直久は、その痛々しい姿に釘付けになる。

(……ゆずる……)

ゆずるは、昨夜の悪霊の襲撃時のように、ぐったりとしていて意識がない。そればかりか、肩で息をして苦しそうに眉をしかめ、額には汗が噴出し頬まで伝っている。何も知らない人が見れば、高熱にうなされていると勘違いしただろう。

だが、それが風邪の症状でないのは、あきらかだ。ゆずるの顔は死人のように土気色をしていた。

きっと、救出がもう少し遅かったなら、このままゆずるは息を引き取り、本物の死人と化していただろう。今のゆずるの様子から、ただの死した細胞の塊となってしまうたその姿が容易に想像でき、胸が痛んだ。

「そやつを心配している余裕はないと思うがのう。早う何とかせぬと、そなたたちも同じ運命をたどるじゃろうて」

くくく……。

まるで、山神の笑い声が部屋を寒々しくさせていくようだった。

直久の腕に鳥肌が駆け上がる。

凍えそうなほど寒い。

なぜ、急に。

(……この感覚……あの時と一緒に……)

直久がごくりと唾を飲み込んだ時だった。何かを感じ取った和久

が、勢いよく立ち上がったかと思うと、一瞬で廊下の方に向き直り、臨戦態勢をとる。慌てて立ち上がった直久も、和久の見据える方向へと視線を這わした。

開け放たれた部屋の扉の向こうには、まっすぐに続く廊下が奥の階段付近まではつきり見渡せた。

廊下の両壁飾られた、同じ大きさのはずの少女たちの肖像画が、だんだんと小さくなっていくように目に映る。まるで廊下の長さを不気味に強調させるように。

だが、それ以外のものは見えない。何の異常もない。それでも、この凍てつくような寒さは間違いなく悪霊が近くにいる証。

（どこだ！ どこからきやがるっ！！）

直久はじつと目を凝らした。口の中が乾いて、喉の奥がひりひりする。

「来る」

和久の声が、音の無い部屋に重く響いた。その瞬間、部屋の入り口の五メートル程先の床が黒く盛り上がったように見えた。

直久は思わず、目をしばたいた。見間違いかと思ったのだ。

だが、その盛り上がりは、ゆっくりと大きくなっていく。

「……」

直久の背中を、一滴の冷たい汗が流れていった。それを合図に、体中の皮膚が、ざわめくように鳥肌を立てていく。

その間も、盛り上がりは床から大きく伸び、ギョロリと見開かれた二つの目が姿を現した。

その血走った目が直久を一瞬とらえた。心臓がとまるかと思ったが、直久では悪霊のお眼鏡にかなわなかったらしい。生気を吸い尽くされそうなほど恐ろしいその視線は、直久から外され、和久を素通りし、ゆずるところでぴたりととまる。

大きく裂けた真つ赤な悪霊の口がゆっくりと床から現れ、だんだんと口端が上がり、不気味にゆがんでいった。

見ツケタ……。

そこからは、一瞬だった。

頭部に続き、首、肩、胸部、腹部、そして下半身が、一気にぬーっと姿を現したかと思うと、悪霊はものすごいスピードでゆずる目掛けて突進してきたのだ。

(!)

とつさに、両手を打ち鳴らし、部屋に結界を張ろうとする和久。だが、悪霊はものともせず、進入を果たす。そして、あつという間に三人に手が届きそうな位置に来る。

直久は何も考えていなかった。

ただ、勝手に体が動いていた。

(つ!)

間一髪で、ゆずると悪霊の間に体をねじ込むことに成功する。そして、必死にゆずるの体の上に覆いかぶさった。

次の瞬間。

直久は目を見開いた。

ズズズズズ……。

不気味な音をたて、何かが直久の体内に入り込んできた。あきらかに、異物が背中から体中の骨の髄にめり込んでいくような違和感だった。たとえようのない不快感と体が発火しそうなほどの熱さが直久の体を襲う。

「うわあああつ！」

背を反らしたまま硬直させ、声のかぎり絶叫する直久。

「直ちゃんっ！！」

血相を変えて、和久が駆け寄ろうとするも、強い力に弾き返され、床に吹き飛ばされてしまう。

「ぐあああああーっ!!」

耳を覆いたくなるような悲痛な直久の叫びが、部屋の空気を引き裂いていく。

体の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられたような気持ち悪さに、強い吐き気を覚え、息をすることも出来ない。

頭から血の気が引く音が聞こえる。

心臓の音が大きく不規則になる。

体中から汗が吹き出る。

「直ちゃん!! 負けちゃだめだっ!! 直ちゃんっ!!」

遠ざかる意識の中で、そんな弟の声を聞いた気がした。だが、遅かった。

抵抗する間もなく、直久はついに、何とかつなぎ止めていた意識とその命の炎を、吹き消された……。

「直ちゃん、しっかりして! ねえ、直ちゃん!」

和久は必死で、兄の体を揺すった。その顔は血の気がなく、蠟人形を思わせるほどに青白い。次第に冷たくなっていくその身体を、和久は力強く抱きしめた。

「直ちゃんっ!! 目を開けて!! 何でこんな……直ちゃんっ!!」

「……ん……カズ?」

泣き叫ぶ和久の声に、床に横たえていたゆずるが意識を取り戻したようだった。悪霊が姿を消したため、ゆずるの頬に赤みがさしており、明らかに先ほどよりも状態が良くなっている。

「……どうした。何を泣いているんだ……」

ぼんやりとしたゆずるの視線が、ぐったりとした直久へと移るな

り、ゆずるはがばつ、と半身を起こして、直久の顔を覗き込んだ。

「な……え！？ ど、どうして！？ 直久っ！！」

愕然として、動かなくなってしまうた直久の体に手を伸ばすゆずる。その震える手が直久の頬に触れたかと思うと、ぱつと再び離れる。ゆずるも、直久の体の冷たさに驚き、恐怖を覚えたに違いない。直久を永遠に失う、という恐怖を……。

そして 全ての状況を飲み込んだはずだ。

「直ちゃんが、ゆずるをかばって……」

ギロっ、とゆずるが和久を睨んだ。

「そんなはずない！ この馬鹿がそんなことをするわけがないっ！」

「……僕のせいなんだ……僕の結界では防げなくて……」

わなわなと唇を震わせ、ゆずるは直久を見下ろしている。

「だって……直久は……俺を嫌ってたはずだろう……なのに、なんでこんなっ！！ 俺の代わりに死ぬなんて嘘だっ！！ ありえない……」

ゆずるの大きな瞳が揺れ動き、徐々に涙が溢れ出した。だが、泣くまいとするように、ぐつと唇をかみ締め、再び和久を睨みつけてくる。

「カズ、すぐに直久から悪霊を引き離せっ！！」

「……うん」

ゆずるに頷いて見せた和久だったが、霊を抜うだけの余力などなかった。それに、霊を払ったところで、直久が息を吹き返すことはない。決して生き返らない。それはゆずるにだってわかっているはずだった。

それでも、できないなどと、今のゆずるに言えなかった。

和久の頬を汗が伝う。小刻みに震える手で印を結ぼうとした時、それまで静観していた山神が口を挟んだ。

「やめておけ、今のそなたには無理だ。下手に霊を刺激すると、事態はよけいに悪化する。そやつが必死に守ろうとしたそなたまで、

食われるぞ」

ぎりつと、矢のような視線を、ゆずるは彼に浴びせた。どうやら、そこで初めて彼の存在に気付いたようだった。

「黙れ、部外者っ！！」

「ゆずる、この方は山の神だよ」

「それがどうした？ 俺は九堂家次代当主だ。そこらの神々よりよほど強い力を持っている。だいたい、その程度の力で神だと？ 昔は、生け贄を捧げられていたらしいが、今は見る影もないではないかっ！」

「ゆずる、口が過ぎるよ！」

口さがないゆずるに、和久は肝を冷やし、慌てて制した。

たしかに、ゆずるはこの山神をしのぐ力を持っているが、それは絶頂期の時の話。今日はまったく霊力をもたないのだ。そんな時に、いたずらに神に喧嘩を売って、無事ですむわけが無い。

「いや、いい」

青ざめる和久に山神は柔らかに微笑んで、ゆずるに細くした目を向ける。

「なるほど、九堂の者であつたか。霊がその身体を器にしたがるのも分かる。だが、確かに九堂家の次代ならば、そこらの神々 我などよりも強いであろうが、そなた、まことに次代か？ なにやら汚れた血の臭いがする。さては、そなた、おん」

「黙れ！」

顔を赤らめ、山神の言葉を遮るゆずる。

「それ以上言つと、吹き飛ばす」

肩で荒々しく息をするゆずる。

山神は実に面白いものを見るかのように笑いながら、ゆっくりと首を横に振った。

「まあよい。我にはかわりのないことじゃ」

それよりも、と山神は和久の腕の中の直久に目を移す。

「そなたが次代ならば、知っているだろう？ そやつは体内にいつ

たい何を飼っておるのだ？」

「……」

ゆずるは無言で山神を睨み続けた。

「答える気は無い、か。まあ、良い

良いのだが、そやつ、

そのままにしておってよいのかのう？」

ニヤニヤと笑みをたたえながら含みのある言い方をする山神に、
チツとゆずるが舌打ちした。

「もったいつけるな。何がいたい」

「やれやれ。短気じゃのう」

わざとらしく山神は肩をすくめてみせた。

「そやつ、生きておるぞ」

部屋に一瞬の静寂が広がる。

「何っ！？」

「えっ！？」

和久とゆずるの反応はほぼ同時だった。

「何だ。死んだと思うておったのか？ 確かに息はしておらぬし、
心の臓も止まっておる。だが、まだ完全に死んだわけではない」

「！？」

和久は愕然として、腕の中で冷たくなっている兄を見た。

信じられるわけが無い。いくら神の言葉だとしても。

生きている？

こんな状態で！？

あんなに強い悪霊をまともに体内に入れて、なおも兄は生きてい
られるというのか！？

目覚めたての僅かな霊力しかもたない、あの兄が！？

「そやつが余計なことをしているがために、死に瀕しておるが」

「……どういうことですか？」

和久はまっすぐに山神を見据える。ゆずるも、今にも噛み付きそ
うな顔で山神を睨み上げている。

「そやつの飼ってるアヤカシが、中に入ってきた悪霊を喰らおうと

したようじゃ。そやつは、そのアヤカシから悪霊を守ろうとしておる。いやはや、まったくもって、実に面白いのう　ヒトの子というものは……」

くっくくくつと山神が声を出して笑った。

「　　はあ！？」

「　　なんだって！？」

和久とゆずるは、再び、同時に眉をしかめ、素っ頓狂な声を上げるしかなかった。

俺にかまうな（４）

『直久は、ここで待つてなさい』

『なんでっ！？ ぼくも一緒にいく』

『だめだ。ここから先は、直久には入れないよ。そこで母さんと一緒に待つているんだ、いいね』

『やだあっ！！ ぼくも一緒にいくっ！！』

小さい頃から、いつもそうだった。

必要とされるのはカズばかりで、オレは何の力も持たない、
“いない子”。

なんで、神様はオレとカズを双子にしたのだろう。

同じ顔。

同じ声。

同じ服を着て、同じ髪型にすれば、普通のヒトには見分けがつかない。

でも、うちの一族のやつらは違った。どんなことをしても、すぐに見分けてしまう。

“和久”と“その片割れ”。

自分に向けられた侮蔑の漂う顔。ため息とともに吐き捨てられた
落胆の言葉。

『ああ、なんだ、双子の兄の方か』

いつだって、そうだ。

オレはおまけ。

オレは必要ない。

生まれる必要などなかった。

オレは何で生まれてきたんだろう。

『私は何のために生まれてきたんだろう』

どうして、オレじゃないんだ。

どうして、オレじゃなかったんだ。

『どうして、私じゃないの』

何で？ どうして？

オレだってちゃんと生きてるんだ。

生きてるんだよっ！！

…………「何言ってるのよ、当たり前でしょう」

(え？)

直久はぱちりと目を開けた。

見知らぬ天井に、だんだんと焦点が合っていく。

(…………？)

首を少しだけ動かし、自分のおかれた状況を把握するための情報収集にとりかかった。

手も足もある。動く。痛くない。怪我はなさそうだ。

視野を広げるとアンティーク調の高そうな長ソファーに自分が横たえていることに気づく。よく見れば、他の家具も同じように西洋風でそろえてあるようだ。

神社住まいである双子の家は純和風。我が家ではないことは明らか。

ならばここはどこだ？

寝ころんだ姿勢のまま、直久はうなりながら腕を組み、細い記憶の糸をたどる。

（あーそうだった）

和久とゆずると一緒に、雪山に悪霊退治に来ていたんだった。

（八重ちゃんの兄貴とか嘘ついて、ちゃっかりタダ飯食ってやがる山神の部屋にいて。んで、和久が突然きえて、オレも追っかけようとしたら、どーんとかアイツらがオレの上に降ってきて……そのあと何があったつけ？ ああ、そうだ。ぬーって床から悪霊が生えてきてグワーツて襲ってきたから、やべーってなって……で、何でオレ、寝てたんだ？ まてまて、オレってば、どっかで記憶すっ飛ばしたか？）

直久が、まだ正常とはいえない“残念な脳”をフル回転させ現状把握に努めた結果だったのだが、最後に行き着くところがやはりずれている。普通なら、『そうだった！ ゆずるは！？』とか叫びながら飛び起きそうなものだ。

「あ、やっとなってきた？ それにしても大きな寝言ね。まあいいわ。

それで？ あなた誰なの？ 突然私の部屋で、ぐーすか寝てるからびっくりして、思わず叫ぶところだったわ。まったく、どこから入ったの？」

聞き覚えの無い少女の声に、完全に我に返り、直久はがばりと体を起こした。そのせいで、すぐ目の前の椅子に姿勢正しく腰掛けていた少女が、びくりと硬直する。

「な、なに？」

じつと黒髪の少女を覗き込む直久。

彼女が身にまとう真っ赤な着物に、黒艶の長髪は、実によく映えた。大きな瞳は黒曜石のように黒々として、直久の顔を映しこんでいる。そして、雪のように白い肌に、赤みがかった頬が愛らしく、

ぶつくりとした唇は大きすぎず、形も良い。

（この娘……どこかで……見たことあるようなないような……）

自分を凝視したまま動かなくなった直久に、彼女は怪訝そうな顔をした。

「あなた……口が利けないの？」

小さくため息をついて、彼女は立ち上がった。そしてソファの前にある円卓においてあったコップを手に取る。

「水、もって来るわ。のど渴いたでしょう？」

ふっと笑った瞳が、どことなく儚げで。それで直久の記憶の糸が答えを導き出した。

「……ツバキさん？」

部屋を出て行こうと、体の向きを変えた彼女の動きがぴたりと止まる。

驚きに見開かれた黒曜石の瞳。その光が、一瞬だけ曇ったような気がした。

「ああ、なんだ……私はアヤメの方よ」

「あれ、違ったか。似てたからてつきり。自信あったんだけどな」

ツバキ あの廊下に飾ってあった肖像画の少女。

最後の生け贄となるはずだった少女。

「似てるに決まっているでしょう。双子だもの」

「え？」

「……え？」

「双子なの？」

「……あなた、何しに來たわけ？ 姉に用があつてうちに來たんじやないの？」

「え？ え？ 話が見えないぞ？ ということだ？」

「私が聞きたいわ」

「うん。整頓しよう。そうしよう！」

直久は腕を組み、うんうん、と一人で納得するようにうなずいた。そして、彼女に再び座るように促す。まるで、自分の部屋であるか

のように。

「えっとまず。オレは直久。君は？」

「……………え？　だからアヤメ……………ってそっからやり直し？」

「いいから、いいから。えっと、アヤメさんは、双子なんだね」

直久の強引なペースに戸惑いつつ、アヤメは諦めたように頷いた。

「そーよ。双子の姉が、ツバキ」

「ふむ。その双子のお姉さんのツバキさんが、生け贄になるはずだった方なんだな」

たいしたことを言っていないのに、まるで天才を演じている俳優気取りで、直久は顎をさすった。いわずと知れた、直久のここ一番のキメ顔というやつで。残念なことに、というか、相変わらずというか、案の定というか、当然効果はない。

「……………生け贄のことは知っているの？　変ね。双子の私のことは知らないのに？」

「ああ。それは、絵を見たからね」

廊下に飾ってあった、肖像画にはツバキの名しかなかった。だから双子だなんて知るわけが無い。

「絵……………ああ、清次郎さんが今、描いている絵のことね」

「……………え？」

今度は直久がきょとんとする番だった。だが、アヤメはそれに気がつかずに話を進めている。

「今日にも、その絵が完成するというので、みんな、儀式の準備に忙しいの。だから、あなたみたいな不審者が入り込んでも、まるで気付かないんだわ。これってちょっと問題よね」

アヤメはそう言うてくすくす笑っているが、直久はすでに聞いている。今頃になって、自分の置かれた状況が、普通は考えられないことになっている気がしてきたからだ。

（待て待て待てっ！！　今、なんつった？　今書いてるって言わなかったか？　……………ていうか待てよ……………ふっーにスルーしてきたっていうか、考えちゃいけないような気がしてたんだけど、何で肖像画

の女の子が目の前にいるんだ？)

ふと直久の頭に、非科学的な答えが浮かぶ。

(いやいやいや、んなわけねーだろう)

すぐさま頭を勢い良く左右に振り、直久は腕を組み直した。

もう一度最初から考え直そう。落ち着いて考えれば何てことないんだ、きっと。そうに決まっている。非科学的なことに包囲された日常を送る彼ですら、全力で否定したくなるような、絵空事。起るわけない。タイムスリップなんて。

だが待てよ、と直久は低く唸った。

肖像画が描かれたのは明治時代。つまり、その絵のモデルの少女が生きていたのも明治時代。

それなのに絵は今、描かれている最中で。そして、目の前にいるのがアヤメで、ツバキの双子の姉。その事実が意味することは、どう考えても。

「えええええーっ!!」

絶叫する直久の口を、慌ててアヤメが両手で覆う。

「ちょっ、声大きい!! 誰かに聞かれたらどうするのよっ!!」
それでもかまわずに、何かを訴えようと、もがもが言っているもので、アヤメのほう観念した。直久の口からアヤメの手が外れる。

「なあ、いま何年? 何年何月何曜日? ついでに何日? ああああゝっ! もしかしたら、これってタイムスリップってやつ? タイムスリップかよ! おいおいおいおい! しちまったのかよ! マジでえかつ!」

「……………」

質問されているのかと思えば、自分で答えて納得している直久に、アヤメはぼかんとするしかなかった。

「どうすりゃあ、帰れるんだ? なんかの映画だと雷に当たると車がウィーンって動いて帰れるんだけどなあ。いや、別のドラマで同じ衝撃を受けたら帰れたって話があったな。同じ衝撃、同じ……っ

て言っても何が原因かまったくわかんねー！！　んがああああ
っ！」

頭を両手で抱えこみ、体を反らして再び絶叫する直久。

わりと適応力があるのが、彼の救いだった。非科学的なものに対する順応性は九堂家の一員として生きるには、必須能力と言えるかもしれない。

ただ、黙って考えられないのが“残念な脳”と称される理由の一つかもしれない。脳内思考駄々漏れである。これは、うるさい、とゆずるに何度蹴られても直らない。

「待て待て。よく考える。こうなったのは、悪霊がゆずるを襲ったからで。その悪霊のせいに間違いない。するつてーと、悪霊を探さないといけないつーことだよな。あーっ、でも、ここではまだ生きてるんだっけ？　しかも、あの悪霊がツバキだったか、アヤメだったか分からねえーっ！！　ひよええええええーっ！」

今度は、頬に手を当てて、『ムンクの叫び』と見紛うことくの表情で、乾いた悲鳴を上げている直久。

一部始終を、ぱちくりぱちくりと瞬きの回数を増やしつつ、静観していたアヤメだったが、ほとほと困りきった顔で、むしろ、かわいそうなものを見るような眼差しを送り始めた。

「ホントに、あなた何なの？　さっきから、分けがわからないことを一人で……大丈夫なの？」

だが、アヤメの心配をよそに、直久は突然、きりりと表情を引き締めた。

「アヤメさん」

「は、はい」

改まって呼ばれ、アヤメはびっくりした顔になる。

「何かお困りではありませんか？　この僕がつ、何でもっ！　力になりますっ！！」

がばりと、直久が両手を、アヤメの両肩に手を置く。目をキラキラと輝かせながら。

だが、対照的にアヤメは気の抜けきつた顔になる。

つまり、直久の単純明快な思考回路はこうだ。

自分は、悪霊たちに呼ばれて、この時代のこの場所に來た。だから、悪霊　つまり、アヤメかツバキか、その両方か　とにかく、願いをかなえてやれば、もとの時代に帰れるはずだ。とすると、手っ取り早く、目の前にいるアヤメから片付けてしまおう。さあ、何が望みなんだ。言ってみる。さあ、さあ、さあっ！！

だが、突然そんなことを言われても、誰だって戸惑う。むしろ、怖い。アヤメじゃなくても、後ずさりしてしまう。

「なんだ、どうした？　なんでもいいぞ？」

「……な、ないわよ」

「そんなはずない。だって俺、アヤメさんを救いに來たんだ。だから困っていることがあるはずだろ？　俺を助けるっと思って何でも言ってくれ」

「はあ？」

アヤメはますます怪訝な顔をする。

「何それ。いったい、どっちがどっちを助けるのよ？」

そう言つて、アヤメは彼女の肩に置かれた直久の手を振り払つた。「とにかく、私、全然困つてないから。助けるのなら、ツバキの方でしょ。ツバキ、明日の儀式で、生け贄にされちゃうのよ。きっとツバキの方が救われたがつているわ」

「儀式！？　生け贄！？　明日っ！？」

確かに、それは大変だ。大変だけど、何かが直久の中で引つかかる。

もし、生け贄になりたくなくて、助け出してほしくて自分を呼んだのなら、目の前にいるのはツバキであるはずだ。

しかし、彼女は自分ではっきりと名乗った　ツバキではない。自分はアヤメだと。

「でもね」

直久は素直に感じたことを口にした。

「君は、さつきオレが目覚める前に、泣いてたんじゃない？ 瞼が少しはれていたから」

アヤメの顔がカーと赤くなる。その反応から、直久はやっぱりなと思った。

「泣いてない！！ 想像でものを言わないで」

否定しても、もう遅い。仮説はすでに直久の中で確信に変わっていた。

やはり、自分はこの娘に呼ばれたのだ。生け贄になる予定のツバキではなく、アヤメに。

直久は、もう一度、アヤメの両肩に手を置き、自分の正面に立たせた。まっすぐな強い視線が、アヤメの黒曜石の瞳をとらえる。

「力にならせてよ」

アヤメが直久から逃げるように視線をはずす。

「……本当に、私は何も困ってないわ。ツバキの力になってあげて」
「君の、アヤメさんの力になりたいんだ。だから、なんで泣いていたのか話してくれないかな？」

「だから、泣いてないってば！ もういい加減にしてっ！！ 出て行って！！」

「え、あつ、ちよつと、まって、ねえ」

アヤメは直久の背を押して、部屋の出入り口まで運ぶと、力いっぱい廊下へ突き飛ばした。そして、勢いよく、ボタンと音を立てて扉を閉めてしまう。

「ちよつ、ちよつとアヤメさーん。開けてよぉ」

しばらく直久の間延びした声が廊下に響いていたが、アヤメがふと、廊下が静かになったのに気がついて、部屋の扉を僅かに開け、のぞき込んだ時には、直久の姿はどこにも見当たらなくなっていた。

第十話 ツバキとアヤメ

……物語の主人公は、いつも可哀想なお姫様。
悪い魔女に虐められる哀れなお姫様。

お姫様は無垢で可愛い。

疑うことも、恨むことも、知らない。

愚かで無知なお姫様。

誰もが哀れむ。

私はお姫様ではない。

彼女を哀れむ立場であり、実際、彼女の不運に涙した。

だけど、なぜ？

なぜ、物語の最後にきて、彼女を羨ましく思うのか。

物語の最後だけ、彼女と入れ替われたらと思ってしまうのは、なぜなのだろう……

彼女 アヤメの日常は、扉を叩くことから始まる。

屋敷の、他のどの扉よりも分厚く、暗く重いその扉をノックしようとして、彼女の手が止まった。

いつも躊躇う。扉の前でしばらく体が動かなくなる。
怖い。

もし返事が返ってこなかったら？

確かめるのが怖い。

もし。

もしも、ツバキが逃げてしまっていたら。

生け贄になるのは自分　アヤメなのだから。

でも、姉の在室を確かめる瞬間の不安は、確かめないでいる時間の長さと同様に比べたら、小さなもの。

大丈夫よ、昨日はちゃんと返事が返ってきた。自分にそう言い聞かせ、アヤメは今日も、その扉を静かに叩く。

廊下に乾いた木の音が、コン、コン、と響いた。

アヤメは、自分の乾いた喉を潤そうと、意識的につばを飲み込むように試みる。だが、うまくいかない。それで、声がかすれてしまう。

「ツバキ……私よ……」

しばらくして、扉の向こう側からコンコンと返事が返ってきて、アヤメはホッと息を漏らした。

（ああ……）

涙が出そうになる。

この瞬間が、いつも幸せだった。

この瞬間だけ、安心できた。

その気持ちを心の奥底に、必死に閉じ込め、アヤメは扉の向こうに居る妹に労いの言葉をかける。

「大丈夫……？」

声をかけるだけで、アヤメがその扉を開くことはない。毎朝、毎朝、彼女はただその扉を叩いただけだった。

アヤメには、その扉が怖くて、それ以上触れなかった。

自分ではないのに、その扉の中にいる、同じ顔のツバキが鏡の中の自分の姿であるような錯覚にとらわれるからだ。

生け贄になるのは、私じゃない。

私じゃないのよ、ツバキなの。

そう自分に言い聞かせていないと、頭がおかしくなってしまう
うだった。

「姉さん」

アヤメは、はっとなつて、声のする方を見た。きっと、自分の顔
は真つ青だったに違いない。

「おはよう姉さん」

そう言つて、一点の曇りも無い笑顔を携えた幼い弟と目が合う。

弟はまだ十歳にも満たない。その弟の屈託の無い表情は、アヤメの
心の奥深くまで突き刺さつた。それでも、何事も無かつたかのように、アヤメは微笑んだ。

「おはよう、アカネ」

胸に飛び込んできたアカネを、しっかりと抱きとめる。

「おはようございます」

その心地よい声色に、アヤメの全身がそつとざわめきたつた。

アカネが連れてきたのだろう、そこには背の高い、ごく整つた顔
立ちの青年が立っていた。年は二十代前半といったところだろうか、
まだまだ笑顔にあどけなさが残っている。

青年は、アヤメと目が合うと、ペコリと、頭を下げた。

その拍子に、無造作に伸びた前髪がさらさらと揺れ動き、アヤメ
は目を奪われる。

触つてみたい。きっと、彼の髪は、柔らかくて、絹のような肌触
りに違いない。思わず手を伸ばしそうになり、自分の髪をかきあげ
るフリをして、必死に誤魔化した。

「おはようございます」

ほんのり赤らんだ頬で、アヤメは青年を見上げた。

「清次郎さま、こんなに早くからお仕事ですか？」

「ええ」

青年　清次郎は上着のポケットを探り、銀色に輝く鍵を取り出
した。

「あと、どのくらい？ 今日には、描き終わるのかしら？」

知らず、アヤメの声が上擦る。1秒でも長く彼と話していたい。彼を独り占めしていたかった　ツバキではなく自分が。

「ええ。今日中には、描き終わりますよ」

冬だというのに、花が春だと間違えて、咲き急いでしまいそうな微笑みをアヤメに向けると、彼は言い終えるより早く扉の中に消えていった。

ボタン。

彼の背後で、扉が大きな音を立ててしまった。

部屋の中に入ると、地下へと続く階段に出迎えられる。部屋自体は地下にあった。

階段には、照明器具や明り取りなどは一切なく、清次郎が手にする明かりのみが、むき出しのまま薄汚れた土壁を照らしている。無数に走る壁のヒビや穴、シミなどが不気味に彼に笑いかけているようにも思え、何度来ても肝が冷える。薄気味悪い、の一言では片付けられない。

一段一段降りていくにつれ、かび臭さが強まり、ひんやりとした肌寒さを伴う風が、下から階段を上ってくるようだった。通気口は確保してあるのだろう。おかげで、息苦しさや、空気の籠もったような匂いはしない。

だが、雪深きこの地方。真冬に隙間風が通る部屋で、暖房もなく過ごさなくてはならないというのは、拷問である。そうでなくても、一応、人が住めるような造りをしているが、そこはまるで牢獄。

こんなところに閉じ込められなくてはならない理由が、この少女のどこにあるというのだろう。

何が罪だというのか。

「ツバキ」

清次郎が優しく名前を呼ぶと、その囚われの少女がふわっと微笑

んで迎えてくれた。

彼女は、生まれてから、一度もこの部屋から出たことのない。おかげで、どんなに外の世界が汚れていようと、人の心がいかに醜かろうが全く関係なく、清らかにそこに存在している。

無垢で、可愛いツバキ。

ツバキを前にすると清次郎は堪らなくなる。

なぜ。

なぜ、彼女は笑えるのだろう。

こんなにも優しく。こんなにも美しく。

「どうしたのですか？ 浮かない顔をして」

「ツバキ……」

清次郎は力いっぱいツバキを抱きしめた。

彼女がこの牢獄にとらわれることになった罪。それは この家に生まれたこと。

だが、それは彼女のせいではない。彼女の選んだことでもない。それを、誰も彼女に教えるものがない。村人や、家族、彼女の双子の妹までも、硬く口を閉ざしている。

彼女がもし、それを知ってしまったて、『いやだ』と泣き叫ぶのが怖いからだ。

彼女がもし、逃げてしまったら、その代わりとなるのが嫌だから。だから、彼女はこの部屋に閉じ込められている。真実から遠ざけるために。生け贄となつて死ぬその日まで。

実際、ツバキはこのまま生け贄となることを受け入れるだろう。

その他に自分が生きている理由を知らないからだ。幼い頃から、『おまえは十七歳になったら、村のために神に召されるのだ。これは名誉で、ありがたいことなのだよ』と、言い聞かされて生きてきた彼女にとって、生け贄になることはごく当然のことだ。彼女の大好きな父親から、褒めてもらえる唯一のことだった。

（こんなことが……許されるのか）

清次郎は血がにじむほど、唇をかみしめた。

（生け贄など、何の意味がある）

山の神に生け贄を捧げないと村が滅亡するなどと、本気で信じている者など、どこにもいない。儀式を主催者である彼女の父親自身さえ、信じていないだろう。

たかだか、家のため、利益のために実の娘を殺そうとしているだけの話だ。そんな馬鹿げたことがまかり通って良いのか。

「……清次郎さん……痛いわ」

腕の中で、清次郎を優しく睨むツバキに、彼女を抱きしめる腕に思わず力がこもってしまっていたことを気づかされる。

「ごめん。嬉しかったもので」

「まあ、昨日もこうしてお会いしたでしょう」

そう言って、彼女はまぶしい笑顔を彼に見せた。

ああ、彼女を助けたい。

ツバキを助けたい。

そして、自分の手で、今までの分までも、幸せにしたい。

生まれたことが彼女の罪だというなら。生きることが死ぬためにあるというなら。

自分がこの少女に教えてやりたい。

“生きている”ということ。

幸せを実感する日々を……。

清次郎がまた険しい顔になったので、彼女は彼を元氣付けるように笑った。

「清次郎さんは、寂しがりやですね」

その笑顔が、今でも十分幸せです、とでも言い出しそうな気がして、彼は切なくなった。

「ああ。君が居ないと、僕は生きていけないんだ」

そう言ってアヤメの額に、そっと口付けた彼の目には、いつしか強い決意が浮かんでいた。

ボタン。

アヤメは扉が閉まるその音に、もう何度目かの絶望に打ちのめされていた。

「……………」

分かっていた。

今の笑顔は自分に向けられたものではない。

彼はツバキの絵描き。

今は、ツバキだけを見つめる絵描き。

以前、彼はアヤメの絵も描いてくれていた。赤い椿の花が咲く庭を背景にしたアヤメの肖像画を父親が気に入り、ツバキの生前の姿を描くようにと、清次郎に依頼したのだ。

絵が描き終われば、ツバキは死ぬ。生け贄にされる。そのことを知った彼の筆はひどく遅かった。

（……………清次郎さま……………）

アヤメは清次郎の背中を隠した扉を恨めしそうにみつめた。

清次郎がアヤメの熱い視線に気付くこと決して無い。きっとこれからだって、絶対に無い。

彼の目にはツバキしか映っていない。

ツバキだけを見つめ、ツバキのために生け贄となる儀式の日を遅らせ、ツバキのためだけに微笑みかける。

もう、ずっと前から知っていた。

気付いていたのに、認めたくなくって、目を閉じて、見ない振りして、耳を塞いで、聞こえない振りをして、そして、自分に嘘をついていた。

だけど、どうしようもない。彼はツバキを愛しているのだから。

だけど、でも、どうして！ 私とツバキは双子なのに！

同じ顔、同じ声、同じ、同じ、同じ、同じ……………。

なぜ、私じゃないの？

私のどこがダメなの？

私とツバキとどこが違うの？

可哀想で、哀れなツバキ。

それなのに、なぜ？

私がツバキを羨ましく思ってしまうのは、なぜ？

第十一話 どうかどうみても、オレはイケメン高校生でしょう？

(1)

持ち前の切り替えの早さと、筋金入りの楽天主義が、実は何度も直久の命を救ってきたのかもしれない。

実際、アヤメの部屋から、半ば汚いもののような扱いでつまみ出された直久の次の行動は早かった。いくら騒いでも目の前の扉が再び開かれることはないと思った直久は、一変して静かになり、難しい顔で腕を組んでいた。

確かにアヤメは、何か悩みを抱え込んでいそうだった。その問題を解決してやれば、自分はもとの時代に帰れるかもしれない。

だが、直久の中で何かひっかかるものがある。

『助けが必要だとすると、ツバキの方よ』

不意に、アヤメの言葉がこだました。

自分をここに呼んだのは、本当はツバキだったのだろうか。アヤメが断言するからには、何か根拠があるはずだ。

(……一方聞いて、沙汰するな。喧嘩両成敗。文武両道。四民平等……だな)

意味がわかっていて使っているのかと疑いたくなるような単語で、自分を納得させるように一人うなずいた直久は、次にきよろきよろとあたりを見回した。

見覚えのある長い廊下に、真新しい額縁で飾られた少女たちの肖像画が並んでいる。それで、直久は自分の現在地を把握することができた。

直久たちが訪れた山吹家のペンションは、明治時代初頭、山吹家の先祖が日常生活を営む民家だった、と和久が言っていた。つまり、ここが明治初頭ならば、このアヤメの部屋は“瞬”がいた部屋に違いない。

ということとは、ずいぶん色が鮮やかだったので気がつかなかったか、さっきまで直久が寝ていた長ソファーは、あのインチキ山神がえらそうに踏ん返り返っていたソファーだったのだ。

そう考えるとなんだかむしように癪に障る。ガムでもつけて置けばよかった、と扉に向かって直久は舌を出す。ガムなんぞ、持っていないが。

(こうしちゃいられないっ!! ツバキちゃんだっ!!)

直久は、色々な邪念を振り払うように、首を勢いよく左右に振ると、アヤメの部屋の扉に向かって自分の体をぐるんと方向転換させる。そして、迷いの無い一步を踏み出した。

直久の向かうべき場所は一つしかない。

ツバキという少女が、あの肖像画の少女であるなら。生け贄となる運命にあるのなら。今、彼女がこの広い屋敷のどこに居るのか、考えるまでも無い。

彼女がいるのは 開かずの扉の向こうだ!

直久は、アヤメの三階の一番奥の部屋から、長い廊下を大股で通過し、階段を一段抜かしで一階まで降りる。なぜか徐々に駆け足になつてしまうので、もつれて転ばないようにするのがやっとだった。そうして、あつという間に一階に片足を着地させたとき、直久は違和感を覚えた。

(?)

首をかしげ、辺りを見回す直久。一階の廊下は、エントランスまでまっすぐ見渡せた。

村上げての大イベントである、生け贄の儀式の準備で忙しいと、先ほどアヤメから聞かされていただけあって、確かに何人もの人が、バタバタと足音を立てて直久の前を往来していく。

だが、誰一人として明らかに不審者である直久を指差し、騒ぎ立てる者はいない。そればかりか、誰とも視線が合わないのだ。

(……なんだ?)

それだけ、準備が切羽詰っていて、だから自分の存在に気がつか

ない、ということなのだろうか。それにしては。

（オレ……見えてない？）

そう。まるで、直久などそこに存在しないかのように、人々は通り過ぎていくのだ。不思議とぶつかることなく、風を切るように。そういえば、と直久は眉を詰めた。

階段でも何人もの人とすれ違ったが、やっぱり誰も直久に気がついていなかった。ぶつかりそうだと思って避けたのは直久の方だったから、全然気にしていなかったが。

これはもう確かめるしかない。そう意を決した直久は大きく息を吸い込んだ。そしてありったけの声で叫ぶ。

「すいませーんっ！」

これだけの声量なら、さすがに皆に聞こえるはずだ。だが。
「……まじかよ」

誰一人として、茫然としている直久を振り返る者はいない。

やはり、自分のことが見えていない。聞こえていない。

（でも……アヤメさんは見えてたし、しゃべってたよな……）

とすると、やはり自分を見ることのできるアヤメが、自分をここに呼び寄せたと考えるべきだろうか。

うーん、と腕を組み、唸りながら、直久は開かずの扉の前に仁王立ちしているしか、なすすべが無い。

（でもまあ、せつかくここまで来たい？ 扉の向こうがどうなってるのかも気になるしい？ ツバキちゃんにオレが見えなかったら、アヤメさんで決まりってことになるしい？）

直久の目が扉に釘付けにされる。

見たくない。

見てはいけない。そう思うのに！

直久が凝視する中、扉の床上十センチほどのところから、すーっと、白く美しすぎる手が現れた。扉は一切開いていない。その手が扉を突き抜けているのだ。

白い手は、その手首までゆっくりと姿を現すと、ぴたりと動きを

止めた。

逃げなきゃ。今、すぐ、ここを離れなきゃ！！　そう思った時だった。

白い手は目にもとまらぬ速さでゴムのように伸び、直久の腕を驚づかみにした。反射的に直久は息を呑む。

「っ！！」

次の瞬間、ぐつと強い力で扉のほうへ引っ張り込まれた！

「うわああああ……あれ？」

目をつぶり、恐怖に震えた直久のあげた悲鳴は、意外にもすぐに止まった。

「ん？　どうなったんだ？」

直久はきよろきよろとあたりを見回したが、先ほどの不気味な手も、恐ろしい気配も、どこにもない。

（ドア抜けしちゃった……の？）

五体満足であることを確かめるように、両手で体中をパタパタと叩いて見る。どこも痛くない。

わけがわからず首をかしげる直久。とりあえず、無事ならいいのだ。

（ていうか、なんだここ？　真っ暗でよくわかんねえし……）

薄暗い部屋を照らしているのは壁に取り付けられた小さなランプの光。少しかび臭い。それに、うすら寒い気がした。

いったいここはどこだろう。

明らかに、あの開かずの扉の前ではない。あのまがましい扉は見当たらないし、地下室のような気がした。それが証拠に窓は見当たらない。だから、まだ昼間なはずなのに、夜中だと錯覚しそうだ。

直久は少し手を壁に手を伸ばしてみる。壁紙も張られていないむき出しの土壁が、じつとりと指に触れた。

「清次郎さん？」

「！！」

直久の心臓が、どきりとはねた。反射的に、背後を振り返る。

暗闇の中、必死に目を凝らすと、確かに人らしき輪郭が浮き出て見えた。誰かがいる。声からすると女の子だ。

「まあ、清次郎さんなの？」

「え、清次郎？……うわっ！」

嬉しそうな声をあげ、誰かが直久に飛びついてきた。お互いの鼻がくっつきそうな至近距離になって、やっと少女の顔が認識できる。そして、直久ははつと息を呑んだ。

つい先刻まで、別の場所で目になっていたアヤメとまったく同じ顔が目の前にあつたのだ。

（まさか、この子がツバキ！？）

直久の目が驚きに見開かれるのと、ほぼ同時に、彼女も自分がいま抱きついているのは思っていた人と違う人物であることに気がついたのだらう。小さく悲鳴をあげて、直久を突き飛ばした。

「だ、誰なの！？」

彼女の声はおびえたように震えていた。

「君ってツバキちゃん？」

「……私のこと知ってるの？」

「君、オレが見えるんだよね？ ていうか、今オレに触ってたよね、思いつきり」

「え？」

「その前に、オレの声ちゃんと聞こえてる？」

「あ、あたり前でしょう？」

どうやら、普通に会話ができているらしかった。

ということはこういうことだらう。

直久は、唸りながら腕を組み、右手で顎をさする。

直久が見えている人物が、自分をこの時代へ呼んだのだと思ったのに。アヤメもツバキも自分が見えているらしい。とすると、他にも自分のことが見えている人物がいるのだろうか。すっかりあてが外れてしまった。

これで、自分が見える人物全ての悩みを解決しなくては帰れないとかだったら、どうしよう。いつになれば帰れるのか分かったものではない。

「あなた……誰なの？ わかった、神様ね？ 待ちきれなくて、もう私を迎えにきたのですか？」

「はあっ!？」

すっかり考え込んでいる時に、話しかけられ、しかも、とんでもないことを言い出す彼女に、直久は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「どっからどうみても、オレはイケメン高校生でしょう？ ごく普通の一般人です」

「こーこーせー？」

「そ。平成生まれ平成育ちの高校生っ！ 大伴直久っていうのよ。直ちゃんて呼んでくれていいよん」

「ヘイセイ……?」

「そうそう。オレってばね、なぜか明治にきちゃったかわいそうな子なの」

「あなたの言っていることはよく分からないけど、ヘイセイっていう町があるのね。でも、どうしてここへ？」

「……町じゃなくて、ええっとなんて説明したらいいんだ。あゝなんか面倒だから町でもなんでもいいや。とにかくだ！ 君がオレを呼んだんじゃないかと思って聞きにきたんだけど」

「え？ わたくしが?」

「そう、君が」

「あなたを?」

「そう、オレを」

「……なぜ？ あなたのこと、わたくし、知らないわ」

「……だよね。知らないよね」

直久は、深いため息をついて、真っ暗闇でその高さがわからない天井を仰ぎ見る。その拍子に背後の壁に頭を軽く打ちつけ、ごっ

と鈍い音が響いた。

（この美人姉妹じゃないのか、オレを呼んだのは……）

彼女たちの他の人物の可能性がある以上、直久にはお手上げな気分だった。

だいたい、自分は和久とは違って頭脳プレイは向かないのだ。駆けずり回って、相手を捕まえるとかなら、いくらでも対応可能なのだが。

（でもさ、オレのカンだと、二人のうちのどっちかだと思っただけどねえ）

それにしても……。

いったいこれから、自分はどうしたらいいのだろう。

「オレ……帰れないかも……」

完全に途方にくれている直久の肩に、そっと暖かいものが触れた。その温もりに、はっとして振り返る。ツバキの小さな手がそこに置かれていた。

「……家に帰れないの？」

心配そうに直久を覗き込む大きな瞳が、ランプの光でキラキラと煌いた。

「……ねえ、君はオレに何かしてほしいことない？」

「え？」

彼女の顔は、きよとんとなった。そこで直久は質問を変える。ゆつくりと、はつきりした声で。

「君は何がしたい？」

そうついいながら、直久は腹をくくった。

もう、自分が見える人物の望みを全て叶えてやるしかない。他に方法があるのかもしれないが、自分には思いつかない。もう、これしかないのだ。

「何でもいいよ。片っ端から叶えていこう。一つ残らず」

「……したい事？」

「そう。君は何がしたい？」

直久はまっすぐにツバキを見つめた。ツバキもその真剣な眼差しを、しっかり受け止める。

壁にあるランプの一つが、ジジジ……という小さな音を最後に、揺らめきながら消えていった。

ツバキの視線がそのランプへと移り、ふわりと彼女は微笑んだ。コツコツと足音を立て、消えてしまったランプを手にとると、ツバキが口を開いた。

「やっぱりあなたは神様なのね」

机の上にある金属製の器を手にとるツバキ。どうやら油さしのようだ。

「でも、神様。わたくしは何も望みません」

ツバキがマッチを手に取り、ランプに火をともし、ジュツとマッチが擦れる音がして、ツバキの顔がはつきりと映し出された。その表情から、彼女の真意がまったく読み取れない。

「え、だって!!」

君はもうすぐ死んでしまふんだろう、という言葉を読み込んだ。死にたくない。ここから出して。そう言われるにちがいないと思っていた。

そうでなくても、死ぬ前にどこへ行きたいとか、何がしたいとか。自分だったら、山のように出てくる。

「わたくしは、十分に幸せですわ。だから何も望みません」

「そんな……」

本心から言っているのだろうか。

こんな部屋に閉じ込められ、ただ死を待つだけの人生が幸せ？

たった十六年間の人生か？

「君は……」

直久は、続く言葉をみつけれなかった。確かに、彼女は満面の笑みを浮かべていたからだ。

ああ、本当に。

心のそこから、彼女は微笑んでいる。それが分かった。

直久は暗闇の中だというのに、自然と目を細めている自分に気がつく。

幸せだ、と言い切れる彼女が。

その言葉の一つ一つが。

なんだかうらやましく思える。まぶしかった。

自分はどうかだろう。同じ十六年を振り返り、胸を張って幸せだったと言えるだろうか。

でも、と直久は思う。

それは、彼女が何も知らないからではないか。

こんな暗い部屋に閉じ込められて、外界を知らずに、他の楽しいこと、興味深いことから遮断され。与えられたものだけを消化する毎日であれば、探求する楽しみを知らないのは当然だ。

欲しいものを手に入れるために、人は努力する。手が届かないのなら、届くような人になろうとする。

でも、生きていくに事欠かないだけのモノを与えられていれば、それで満足するのではないだろうか。その現状で、幸せを感じるのではないだろうか。草原を知らない動物園のライオンのように。生きる苦しみを知らない彼女だからこそ、幸せだと言い切れるのではないだろうか。

（……こんなの、本当の幸せじゃない。これでいいはず無いんだ）

彼女にだって、生きる権利がある。

友達と笑い合い、恋人と愛し合い、我が子を抱いて、孫と遊ぶ。

そんな当たり前の人生があるはずなのだ。いや、彼女の人生にその選択肢があるということを知る権利がある。

誰も知らせないまま、彼女が笑って生け贄になって行くのは間違っている。卑怯だ。村人も、彼女の家族も。町中がグルになって、事実を隠しているに違いない。

「大丈夫ですか？ とても辛そうな顔をしているわ」

「……」

彼女は再び、春の陽だまりのようなまぶしい笑顔往直久に向けた。

だが、今の直久にはその笑顔をまっすぐに見ることができそうに
なかった。胸に、小さな針がいくつも突き刺さるような痛みを覚え、
顔をしかめる。

「……オレが、君の力になるよ」

直久は確信していた。

自分と呼んだのは、この少女だ　と。

どこからどうみても、オレはイケメン高校生でしょう？

(2)

「アヤメさん……」

窓の外をぼおつと眺めていたアヤメは、突然背後から声をかけられ、びくりと体を震わせた。ソファーに座ったまま首だけを動かすと、情けない顔の少年がこちらに歩み寄ってくるのが見えた。

「……あなたはさっきの……」

「今、ツバキちゃんに会ってきたよ」

彼はアヤメに笑いかけた。どこことなく、影のある笑顔だった。

「ツバキに……」

「うん」

アヤメはそつと彼から視線をはずす。なんとなく、彼の瞳がまっすぐ見られなかった。

(あの部屋へ行ったのね……)

窓の外に目をやりながら、アヤメは小さくため息をついた。

どうやってあの部屋の中へ入ったのかは分からない。でも、彼の表情から姉に会ったのは真実であろう。誰だって、あの部屋に閉じ込められた姉を見れば、今の彼のような顔をする。

誰もが自分を責めている気がした。

卑怯者と。

全てを知っているくせに、姉を見殺しにする自分を。

「それで……用がすんだんでしょう？」

「ううん。何をすべきなのかはわかったけど……オレ一人じゃ、どうしていいかわからないんだ」

彼は、ため息をつきながらアヤメのすぐそばまでくる。そしてク

ルリと体を反転させ、そのまま床に座り込んだ。

「彼女を助きたいんだ」

「……………そう」

やっぱり、とアヤメは思った。

だから言ったのだ。助けが必要なのは姉の方だと。

彼が何者なのかは知らない。今だってどうやってこの部屋に入ってきたのか、わからない。部屋の扉が開いた気配はなかったし、だいいち、鍵がしまっている。先ほどだって、彼はいつのまにかこのソファの上に寝転がっていたのだ。不審人物というよりも、この世の人ではない気がした。きっと山の神が使わした使者なのかもしれない。

主である神にふさわしい生け贄を連れて行く。それが彼の使命なのではないだろうか。

ツバキか。それとも……………自分が。

清き心をもつツバキは可哀相だから、アヤメを連れて行こう。

そんなふうに彼は思ったのではないだろうか。

（もう、どうでもいいわ……………もう……………どうでも……………）

楽になりたい。

幸せになりたいとは言わない。

生け贄のツバキが逃げないかどうか、怯える日々を早く終わらせたい。

「ツバキを助けてあげて……………」

アヤメの声がかすれた。でも、本心だった。

この生活から開放されるなら。

自分が生け贄としてツバキの代りに死ぬのもいいかもしれない……………。

そう思ったら、自然に口元がほころんでいた。

「うん。助けるよ」

遠くで彼の返事が聞こえた。

「一緒に、彼女を助けよう、アヤメさん」

「ええ……そうね。助けましょう……」
そうつぶやいたアヤメには、窓の外の真つ青な空に浮かぶ雲が、
ひどくまぶしく見えた。

コンコン。

ふいに部屋の扉が鳴いた。

アヤメは、窓を見上げたまま返事をする。

「アヤメさん……私です」

どきりとアヤメの心臓が跳ねあつた。一瞬にして、アヤメの体中の血が猛スピードで巡りだす。

「は、はい。今、開けます」

彼に物陰にかくれるように指示すると、パタパタとはしたなく着物の裾を揺らしながら、アヤメは扉に駆け寄る。ガチャリと軽い音を立て、その部屋の扉は開かれた。現れたのは、さわやかな笑みを浮かべた青年だった。

「お話があるのですが、今よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

にこりと柔らかに微笑む彼に、アヤメは嬉しさを抑えきれない。
彼は今、自分に微笑みかけている。ツバキではなく、自分に。

「今、お茶をご用意しますね」

「いえ、お構いなく。すぐに済みます」

扉から一步部屋に踏み入れたものの、清次郎は部屋の奥には足を進めようとしなかった。

「そう言わずゆっくりなさってください。さあどうぞ」

「嫁入り前の娘さんの部屋に、こんな、しょうもない男が長居をして、変な噂がたつたらこまります。ここで。それより」

どうしても、用件だけを済ませて退散しようとする清次郎に、アヤメの胸がズキリと痛んだ。それでも、アヤメは微笑んだ。

（いいの。こうして会いにきてもらえるだけで。それだけで、胸が

弾むのよ。あなたはそれを知らないでしょうけど」

「アヤメさんをお願いがあるんです」

「なんででしょう。私でお役に立てることだといいいのですが」

「アヤメさんにしか出来ないことです」

真剣な清次郎の眼差しに、アヤメは嫌な予感がした。

「ツバキさんが、どうしても明日の儀式で、アヤメさんの着物が着たいとおっしゃっているのです」

「……私の着物を？」

「はい。アヤメさんのいつも着ている赤い着物を着て、山神様の元へ行きたいと」

ツバキは清次郎をじっと見つめた。

彼の瞳が、かすかに揺れ動くのが分かった。その瞬間、ツバキの全身が、ぞわぞわとざわめき立った。

（……清次郎さま……まさか……）

返事をしないアヤメに、畳み掛けるように清次郎は続けた。

「大好きな妹と、神の世界へ旅立った後もつながっていられるように、とツバキさんは言っていました。私には、この彼女の願いをかなえてあげることしかできないのです。お願いできますか？」

彼の必死な思いが、アヤメに流れ込んできて、首を絞め上げられているように苦しくなる。

あなたは、やはりツバキしか見ていない。

私ではなく、ツバキのことしか考えていない。

私の着物をツバキに着せて、どうしようと言うのですか？

ツバキを“アヤメ”だと、周囲に思い込ませて、どうしようと言うのですか？

そして、それを私に言うのですね。

ツバキを連れて逃げる手伝いをしてくれないか、と。

ツバキの代りにお前が死んでくれ　と。

「わかりました」

アヤメはにこりと微笑んだ。

「今晚、私が彼女のところへ手渡しに行きます」

「え？ あ……いや、私が頼まれたので……」

「いえ。私もツバキの生きた証として、彼女の白い着物がほしいわだから、私が持っていきます。大丈夫、こっそり行きますわ。お父様に知れたら大変ですものね」

有無を言わせぬアヤメに、困ったような顔をした清次郎。だが、アヤメの満面の笑みに安心したのか、それともつられただけだったのか。彼もしだいに笑顔になっていく。

「だって……ツバキを助けてくれるのでしょうか？」

「……えっ！？」

どうしてそれを！？

完全に凍りついた清次郎の顔に、はつきり書かれている気がした。なんてわかりやすい人なのだろう。もう少し、嘘の上手い、ヒドイ男だったらどんなに良かっただろう。

アヤメは、倒れそうなほどの激痛を胸に感じながらも、必死にそれを笑顔で隠す。

「私の着物を着たツバキを連れて、逃げてくださるのでしょうか？ 私も手伝います」

「……アヤメさん……」

「ツバキは私のたった一人の姉です。生きていてほしいと思って当たり前でしょう？ もう二度と会うことができなくとも、どこかで幸せに暮らしていてさえくれば、それで十分ですわ」

清次郎はアヤメをじっと見つめている。真意を伺おうとしているのだろうか。

でも、そんな彼の視線など、今のアヤメには怖くない。この醜い心が彼にあばけるわけが無いのだから。

ついに、清次郎は観念したように、ふわりと笑った。

「わかりました。ではお願いします」

「ええ。私が今夜１時に私のこの赤い着物を、ツバキに着せます。そして、屋敷の外へと連れ出します。清次郎さまは、裏門のところ

で待っていて」

「わかりました」

そして、アヤメは今まで生きた中で、最高の笑顔を彼に向けた。それを見て、安心しきったように、彼は部屋を出ていく。その清次郎の背中を見送りながら、アヤメは自分の心はどんどん黒い闇に侵されていくのを感じていた。

「……清次郎さま！」

振り向いた清次郎の笑顔が、まぶしくてアヤメは思わず目を伏せる。

「ツバキを……お願いします」

「はい。幸せにしてみせます。ご安心ください」

「……………ありがとう」

アヤメは深々とお辞儀した。もう隠しきれない自信がなかったから。自分ではなく、ツバキのために生きようとしている彼に対する憎悪を。

何も知らずに彼をひとりじめできる、ツバキに対する妬みを。そんな二人を自分一人の幸せのために利用しようとしている、醜い自分を。

カチャ…………。

静かに閉じられた扉。

顔を上げたアヤメの目には、決意がにじんでいた。

もう誰にも止められない。動き出してしまった運命を。

これしかもう方法はないのだから…………。

「ねえ、そのあなた、まだいる？」

背後を見ずにアヤメは話しかけた。

「直久。オレは直久」

返事があった方向を、勢いよくアヤメは振り返った。そして、はつきりとした口調で言い放つ。

「直久さん。助けましょう、ツバキを」
そのアヤメの顔には吹っ切れたような、すっきりした笑顔があった。

あなたがツバキがいいというのなら。
どうしても、ツバキがいいというのなら。

望みどおり逃がしてあげるわ

あなたと“ツバキ”を。

どこからどうみても、オレはイケメン高校生でしょう？

(3)

アヤメはその扉の前に立っていた。一階にあるというのに、奥まった場所にあるせいか、それとも生け贄として死んでいく娘たちへの罪悪感からか、この扉の前に姿を見せるものは、ほとんどいない。アヤメたち双子の両親だとて、自分の娘が生け贄となるというのに、年に数回ほどこかこの部屋の鍵を開けることはない。

この十六年間、ほとんど毎日のように、汚物を片付けたり、部屋を掃除したり、食事を運んだり、ツバキの世話をしていたのは、口の聞けない村の老婆だった。

もちろん、今までアヤメがこの扉を開けて中に入ったことは、一度も無い。

そして、それは今日が最初で最後になるのだ。

「……………開けるわよ」

アヤメは背後をちらりと振り返った。アヤメの二歩後ろにいた直久が、彼女をじっとみつめたまま、深く頷いた。それを受けて、アヤメも頷き返す。

自分の手の震えを直久にばれないように必死で隠し、鍵穴に差し込んだ鍵をゆっくり回す。

ガチャリ……………。

不気味に静まり返った廊下に、鍵の回る音が、妙に大きく響いたように感じた。

「……………」

これから自分のしようとしていることがどんなに醜いことなのか、それは自覚していた。

でも、心はもう止められない。

もう、後戻りはできない。するつもりもない。

「行こう……一時になっちゃうよ」

なかなかドアノブに手が伸びないアヤメを、直久は促した。

「そうね。ぐずぐずしてはいられないわ」

意を決したように、アヤメは扉を押し開いた。

扉の向こうに見えたのは、地下へと続く階段だけ。

「地下室……だったの……？」

アヤメはごくりと喉を鳴らせた。

「……この下かな」

「会ったんじゃないの？」

「まあ、その、色々省略したみたいで……てか、君こそ、部屋に入ったことないの？」

「ないわ」

ぴしゃりと言い放ち、アヤメは階段を降り始めた。だが、階段は暗く、足元も見えない。

壁伝いに行こうと、手を伸ばせば、土壁の冷たさに、どきりとした。

「……………」

それでも、震える足を、なんとか前に進める。

コツン……コツン……。

アヤメの足音だけがこだまして聞こえてきた。結構、深い地下室だ。

（……こんなところに……本当にツバキはいるの……？）

暗闇。

寒氣。

孤独。

不安。

絶望。

アヤメが過ごしてきた地上の日常は、ここにくらべれば楽園かもしれない。

「大丈夫……？」

なかなか思うように進まない足を、引きずるようにしているアヤメを、直久が心配そうに覗き込んできた。

「大丈夫だったら！」

.....

きつと今、自分は真つ青な顔をしているに違いない。

怖い。

怖い、怖い、怖い！
怖い！！！！

ツバキに会ったのが、怖いっ！！

アヤメは、涙腺が勝手にゆるみ、涙がこぼれそうになるのを必死に耐えた。

ガタガタと音を立て震えそうな歯を、必死にかみ締めた。

「あ……」

直久の声に、アヤメははっとなって、前方を見た。もう少し階段を下ったあたりだろうか。急に、前方がうつすらと明るくなった気がしたのだ。そして、その薄明かりの方から声がした。

「誰？」

アヤメは息を呑んだ。自分の声が聞こえたからだ。でも自分は声を発していない。

つまり、今の声は。

(
…
ツバキっ
！
)

「あ、やっぱりこの先だったんだね」

ツバキの声を聞いた直久は、急に元気を取り戻したように、足も

軽やかになつて階段を下りていった。そして、薄明かりの中に消えていく。

「やあ、ツバキちゃん。オレのこと覚えてる？」

「まあ、えっと、イケマンさんでしたからしら」

「おつしい。イケマンでなんだよ。イケメン、イケメン！！ていうか、それ名前じゃないから。オレは直久！」

「あら、名前ではなかったのですか。申し訳ありません。直久さまですのね」

「“さま”はやめてよ。なんかくすぐつたいや。直ちゃんていいよ、直ちゃんて」

ひとり真つ暗な階段に取り残されたアヤメは、放心したようにその二人の会話を聞いていた。

(……な、なんなの、この軽いかんじ……)

アヤメは急に、ひとり怖がつて前に進めなかった自分が、馬鹿みにたいに思えてきた。

ふう、と小さくため息をつく、今度は軽やかに階段をくだり、アヤメも部屋の中に足を踏み入れた。

「ああ、アヤメちゃん、遅い遅い！ やつと来たよ」

直久の声に、ツバキがゆつくりとアヤメを振り返った。

アヤメの心臓が跳ね上がる。

「ツバキ……」

暗闇に目が慣れたせい、部屋の中は意外と明るく感じた。ツバキが夜着をまとい、長い髪を下ろして、直久の前に立つて、じつとアヤメを見つめている姿も、はつきり見える。

アヤメは自分が石になつてしまったのではないかと思った。足が動かない。それ以上部屋に入ることが出来ない。

そんなアヤメとは対照的に、ツバキはアヤメから視線を離さず、ゆつくりとアヤメに近づいてくる。

コッ……コッ……。

木製の床が、乾いた音を立て、ツバキの後についてくる。

「……………」

目の前にたどりつくくと、ツバキはぴたりと足を止め、まじまじとアヤメを見つめた。

アヤメはごくりと唾を飲み込む。

怖かった。

全てを映し出す鏡を見ているようで。

今から自分がしようとしていることを、すべて見透かされてしまっているようで。

何か言葉を繰り出そうと、アヤメは口を開く。

「……………」

が、声が出てこない。

と、そんなアヤメを観察するように見つめていたツバキが、ふいに笑顔になった。

「アヤメね」

「……………」

「いつも、アヤメは心配して声をかけてくれる。だから、好き。会いたいとずっと思っていたのよ」

満面の笑みを浮かべたまま、ツバキはがしつとアヤメの腕を掴んだ。そして、ぐいぐいと部屋の中へと引っ張りこむ。

「あっ」

慌てるアヤメにかまわず、ツバキはアヤメを部屋の中央にあるテーブルセットの椅子に座らせた。

「来てくれて嬉しいわ！ お茶でも飲みましょう」

「ま、待って！ 話があるのよ！」

「ええ、だからお茶を入れるわ。話をするときは、お茶を飲みながらだと清次郎さまに教えてもらったもの」

「清次郎さま……？」

「ええ。清次郎さまはいつも色々な話をしてくださるのよ。ほら、

いつも来る、ばあやは口が利けないでしょう？」

ツバキは直久にも椅子に座るように促す。一時までには、さほど時間がないのを自覚している直久は困ったような視線をアヤメに向けてきた。だが、アヤメはその視線に気づいてやれるほどの状態ではなかった。

「清次郎さまは、いつも本当にいろんな話をしてくださるの。甘いお菓子も持ってきてくださるわ。それで、星の話や、花の話。ああ、今は冬だから寒いのでしょうか？ 冬には雪がふって。雪は冷たい。白い。アヤメは雪を見たことがある？」

「……………」

アヤメは言葉を返すことができなかった。

怖い。

この子は、どこまで知っているの？

(でも……ツバキ……あなたには清次郎さまは渡さない……)

アヤメは、静かに目を伏せた。

「……じゃあ、今からその雪を見に行きましょう」

「え？」

「あなたをここから外へ出してあげるわ」

アヤメは自分の組んだ指を見つめながら言った。それで、かすかに指が震えていることに、気がついた。

「オレらは君をこの部屋から外へ出すために来たんだよ」

直久がアヤメに口裏を合わせてくれた。

「でも……」

彼女がこの部屋から出ることは許されない。彼女の中では神よりも絶対的な存在である父の命令だ。けれど、外の世界は見てみたい。そんなツバキの葛藤が、手にとるようにアヤメには伝わってきた。

「雪を見に行きましょう？」

アヤメは笑う。必死に笑う。

その笑顔のアヤメと直久に安心したのか、やっと首を縦に動かした。

「そうと決まれば、急いで着替えなきゃ！」

直久は薄着のツバキに着替えを促した。

「オレ、部屋の外で待つてるから、早くねー!!」

アヤメが振り返った時には、直久の姿はすでになかった。まるで、壁や天井をすり抜けたかのように、消えていた。

しかし、直久のことにかまっっている余裕はない。アヤメは、ツバキの着替えを手伝うことに専念する。

「でも、まって！」

ツバキは自分の白い着物に手を通しながら、アヤメを止めた。

「やっぱりダメよ。儀式は明日ですもの。私が居なくて儀式ができなかったお父様が悲しむわ。私はここに残る。アヤメは直ちゃんと雪を見てきて、ね？」

「大丈夫よ。心配いらないわ」

「ううん。私は明日の儀式を成功させて、神さまのお嫁さんになるのよ。お父様はそれだけを楽しみに私を育ててくださったわ。私もお父様の喜ぶ顔が見たいの。だから、行けない」

楽しみに育てた？

娘が死ぬことを？

十六歳になった娘を殺すことを？

「……」

アヤメは駄々っ子のようなツバキをまっすぐ見つめた。

いつの間にか清次郎との約束の時間は過ぎてしまっていた。このままでは、心配になった清次郎が様子を見に、ここへ現れるのは時間の問題だろう。それでは、何もかもおしまいだ。

清次郎が、ツバキだけを連れて逃げ、置き去りにされた自分がツバキの代りに生け贄にされてしまうのは、子供でも考え付くこと。

だから、何かなんでも、ツバキを外へ出さねば。

その後のことは、それから考えればいい！

アヤメの瞳に、一瞬、強い光が灯った。

(……清次郎さまと一緒に逃げるのは、ツバキ　あなたじゃない

のよ！)

「わかったわ！ 私が残る」

「え？」

「私がここに残るわ。あなたが戻ってくるまでの間、ここで待っているわ。もし、あなたが間に合わなくても、儀式は行われる。それなら安心でしょう？」

「……でも、儀式は私がずっと楽しみにしていたのよ？」

ツバキは心のそこからがっかりしたような顔をした。まるで、大好きなおもちゃを取り上げられた子供のように、しょんぼりと肩を落としている。

「それなら、戻ってくればいいわ、明日の儀式までに。でしょ？」

「……そうね。それならいいわ」

実に嬉しそうな顔をしているツバキを見て、アヤメは小さく息を吐いた。

(とにかく、なんとか外へでくれそうね。あとは直久さんに任せよう)

直久との計画では、ツバキを山奥の小屋に住む、ばあやのところへ預けることになっている。ばあやにはもう話をつけてあった。

小さな頃から自分の孫のように育てきたばあやは、二つ返事でこの話にのってくれた。きつと、ばあやが大切に育ててくれるはずだ、今までもそうだったのだから。

「さあ、こつちよ！」

ツバキに白い着物を着せ終わると、階段を上がり、部屋の扉の前へと急いだ。扉をあけると、直久が待っていた。

「私はあとから行くから、先にはあやのところへ！」

直久にだけ聞こえるように、言うたアヤメはツバキを部屋の扉の外へと押し出した。

「さあ、ツバキ。行くのよ」

「……………」

不思議そうな顔をして、ツバキはアヤメを振り返った。

「……楽しんで。あなたの人生を」

そう言ったアヤメは、自然に微笑んでいた。
なぜだろう。

穏やかな自分がいい。

全てが、これで終わるのだ。

これで、自分たち姉妹は全てから開放される。

馬鹿げた生け贄からも。

この家からも。

ツバキは山奥でひっそりと隠れて暮らさなくてはならないけれど、
ここにいて死を待つよりはずっといいだろう。

自分も、生け贄の“万が一のため”として生きてきた人生から、
開放される時がきたのだ。もう、十分だと思う。十分すぎた。

これからは、姉妹ともに、新しい人生を歩んで行こう。

そしてまだどこかで会えたら、その時は、一緒に笑い合おう。

「行こうっ、ツバキちゃん！」

直久に腕を引っ張られるようにして、ツバキが廊下を走り抜けて
いく。

白い着物を着たもう一人の自分の姿を、アヤメはじっと見つめて
いた。ツバキもずっと視線をはずさない。

（さようなら、ツバキ。幸せに。どうか幸せに……）

ついに、玄関からその二人の姿が消えたのを見届けると、アヤメ
も行動にうつった。

「清次郎さま……」

急いでアヤメは裏庭の方へ走り出す。

清次郎との待ち合わせ場所は、裏庭を抜け、裏門を出たところだ
った。

赤い着物の裾がはだけでも、気にせずに全力で走った。

彼が待っている。

彼は自分を待っているのだ。

そう、私は今、この時から ツバキなのだ！

「ツバキ!？」

裏庭を抜けたところで、アヤメは誰かに手を掴まれた。ぎくりと
なつてアヤメは身を縮ませる。だが、その人の顔を見て、これ以上
の無い幸せをかみ締めるような笑顔になった。

「清次郎さま!」

アヤメは迷わず、清次郎の胸に飛び込んだ。清次郎もそれをしつ
かりと受け止める。

(ああ……暖かい)

夢にまで見た、清次郎の腕の中は、なんと心地がいいのだろう。
見た目によらずたくましい腕が、ぎゅっと自分を包み込んでいる。
こんな幸せを手に入れるためならば、一生自分はツバキとして生
きていこう。

「よかった、ツバキ。遅いから、迎えにいこうと思ってたんだ」

「まあ、心配性ですね」

アヤメはふふふと笑った。それにつられたように、清次郎も微笑
んだ。彼も、ずっと緊張していたのかもしれない。

「さあ、行こう」

差し出された清次郎の手にアヤメはそつと手を添えた。本当に本
当に、嬉しそうに。

「ええ。行きましょう」

二人は駆けだした。輝かしい未来と自由の待つ、外の世界へ。

第十二話 寒椿（1）

「見て〜！　すごいわ、すごいわっ〜！」

空から降り注ぐ雪に大はしゃぎで、くると踊りまわるツバキを横目に、直久は地面にへたれこんだ。

「んだああ、つかれたっ！」

今も昔も、この屋敷ときたら、玄関から表の門扉までの距離が、並み外れて長い。そこへ、目にするもの全てに心を奪われて、まったく前に進まないツバキ。いいかげん痺れをきらした直久が、ツバキを背負って門扉まで全力疾走した、というわけだ。

「もっつ……ちよつとっ……狭くていいとっ……思っつ、この屋敷……！」

息が切れてもなお、誰かに文句を言いたくてしかたない。直久は今現在そんな状況といったところだ。

まだ、ぶつぶつと何かを言いながら、直久は雪の上にごろりと仰向けになる。すると、雪が降り注いでくるのが見えた。

そういえば、こんなふうには雪が降るのを見たのは初めてだなあ。直久は暢気にそんなことを考えはじめた。

真っ暗な空から降って来る雪は、自分の生きている時代でも、彼女たちが生きている時代でも同じ。永遠にその姿を変えることなく、静かにあたりの音を消しながら降り積もる。そう考えると不思議だ。　「ねえ、直ちゃん！　雪って食べてもいいの!?」

無音の世界にひたっていた直久の耳に、無邪気な声が飛び込んできた。見上げると、ツバキが両手を大きく広げ天を仰いでいる。

「食べてもいいけど。味しないよ？」

「ホントね、よくわからないわ」

「でしょ……って、食べたんかいっ！」

「落ちている方を食べてもいい？」

「それは止めなさい」

思わず、幼稚園児をたしなめる保父さんのように直久は言った。

「ケチっ！」

「け、けちっ！？　どこでそんな言葉をつ！」

「ヒミツーっ！！」

ツバキは本当に楽しそうに、走りまわった。

「あ、ちよっと、遠くにいつちやだめだよ？」

なんだか、お父さんになった気分だな、と直久は思った。手がかるし、目が話せなくて危なっかしいし、疲れるけど、それ以上にほほえましく、胸があたたくなくなるから不思議だ。

一つ一つの反応が、無邪気で、新鮮で。そういう見方があったのかと、再発見させられる。

彼女を好きになった清次郎の気持ちが少しだけ分かるきがした。

(……それにしても遅いなあ、アヤメさん)

直久は、じつと屋敷の方を見た。いくら目を凝らしても、赤い着物
物の少女の姿は見えてこない。

「誰かを待っているの？」

小さくため息をついて、背後を振り返った。

ツバキはきよとした顔で、直久を見つめ返す。

「うん、ちよっとね」

アヤメはすぐに追いかけると言っていた。だから、直久はツバキの手をひっぱり、屋敷を取り囲む高い鉄柵の外に出たところで、彼女を待つことにしたのだ。

アヤメは先に山小屋の老婆のところへ、ツバキを連れて行けと言っていたけれど。アヤメのことだって、直久は心配なのだ。

(それにしても、結局オレをここへ呼んだのは誰なんだ?)

直久の知る結末は、ツバキが絵描きと駆け落ちし、銃殺されるというものだ。

だからそれを阻止し、ツバキを無事に逃がせば、自分はもとの世界に帰れるにちがいない。そう思ってここまでやってきた。

本当にそれでいいのだろうか？

（なんか引つかかるんだよねあ〜。……よし、落ち着いて最初から考えよう。今はカズがいけないけど、オレだっておんなじDNAだ！やればできるはずっ！ 多分！ きつと、おそらく！）

こと頭脳面においては、驕らず、謙虚に、自分を過大評価しないところが直久のいいところだと、言う人もいるにはいる。しかし、今はその知能に頼るしかないのも事実。直久は、自分を励ますよう、大きく息を吐いた。

（オレがここへ来たのは、悪霊のせいだ）

悪霊が、自分の体内に入り込んだのは分かった。その時に、感じた強い感情は、“悲しみ”と“孤独”。

怒りや、妬みではなかった。悪霊は、誰かを恨んでいるというわけではなさそうだ。

もしかして、きつと悪霊は、この時代、つまり自分が生きていた時に感じていた苦しみを無限にループするように味わい続けているのではないだろうか。

だって、過去にタイムスリップするなんて、そうそうあることじゃない。そんな映画や小説みたいなこと。

（たぶん、これはタイムスリップじゃなくて悪霊の記憶なんじゃないか？）

悪霊は、この悲しみの無限地獄から抜け出たくて、助けを求めているのではないだろうか。

ずっとずっと。直久たちがこうして屋敷を訪れる今日までずっと。助けて、助けて。そう訴え続けて。

では、そうだとして。

誰が悪霊になったというのだろう。いや、どちらが、というべきか。

自分たちはずっと、生け贄になるはずであったツバキが悪霊になったものだと思っていた。それは本当に正しいのだろうか。

ツバキが生け贄になることを嫌がり、恋に落ちた絵描きと逃げ出

す。そして、その駆け落ちの途中で射殺。生きたくても生きられなかったツバキは、全てを怨んで悪霊になる。

それが和久やゆずるが考えていたシナリオだ。

けれど、直久の知っているツバキは生け贄になることを嫌がっているように、これっぽっちも見えない。そればかりか、生け贄になるのを心底楽しみにしているようで、今だって、「早く雪を見たら帰りましょう」と何度何度も、うるさいくらいだ。

だから、直久にはどう考えても、ツバキが恨みを晴らすために悪霊になるとは、考えられないのだ。

一方のアヤメは、双子の姉が生け贄にされることをずっと気に病んでいた。それを止めたかった。でも止められない。どうしても分からない。それで、ツバキを逃がすことにした。というところだろうか。

これまた、アヤメが悪霊になる要素は見つからない。

(でも、よく考えたら、アヤメさんはどうなったんだろう)

“最後の生け贄”のツバキに、双子の妹がいたことは、現代まで伝わっていなかった。そもそも、結局、生け贄の儀式は行われたのだろうか。

(まさか……アヤメさんがツバキちゃんの代りに、生け贄にされたなんてことは……?)

つまり、こうだ。運悪く、ツバキが逃げたことが、すぐにバレて逃げたアヤメが捕らえられる。そして、アヤメが代りに生け贄とされ、ツバキはツバキで逃亡に失敗し殺される。これが過去に起きた出来事だったのではないだろうか。

もし、自分の考えた通りだとすると、アヤメはもう捕らえられているのではないか。

そして、何も知らず、ずっと生け贄を心待にしていたツバキと違い、“死”を知っているアヤメが、無理矢理生け贄にさせられたら、それこそ悪霊になるほどの苦しみを生むのではないだろうか。

直久は、自分の出した結論に、ぞっとした。

「つてことは……やっべえっ!!」

勢いよくツバキを振り返った。そして、すでに足を走らせながら、叫ぶように言い放つ。

「ここにいて！　すぐに戻るから待ってて！！　絶対にここを動いちゃだめだからね、いいねっ!？」

ツバキの呆然とした顔が、不安を呼ぶ。

けれども、直久は全力で屋敷の方へと急いだ。今はアヤメのほうが優先だ。だから、後ろを振り返ることなく。必死に走った。自分の後をツバキがついてきていることも知らずに。

やっと広い裏庭を抜け、裏門が見えてきたところで、アヤメの手を引いていた清次郎の足が、不意に止まった。辺りは闇に覆われ、降り積もる雪の音だけが、アヤメにはやけに大きく響いて聞こえた。どうしたというのだろう。

この門を抜ければ、自分たちは自由。

もう、この家からも、生け贄からも束縛されない、夢のような世界が広がっているというのに。

アヤメは清次郎の行動を理解できずに、首をかしげ、清次郎を見上げる。彼の顔から明らかな戸惑いを感じた。

何をいまさらためらっているのだろう。まさか、追われる身になるのが怖くなった、とか言うのではあるまいか。

一瞬の不安がよぎり顔を曇らせるアヤメを、清次郎はじつと見つめた。そして思いもよらぬことを口にした。

「あなたはツバキじゃない」

その言葉はアヤメの心臓を一瞬で止めるほどの威力があった。

自分を取り巻く世界の全てが凍りつき、音までもが雪にかき消されたように感じた。

彼を振り向いた瞬く間の自分の動きですら、自分のものでないような感覚。

永遠とも感じる、無の時間が雪とともに降り注いでくる。

どうして？

なんで？

わかるはずない。自分だって鏡を見るように、そっくりだと思った。気持ち悪いほど、同じだった。全てが同じだったのよ。

違うのは、この着物の色だけだった！

それなのに、家族でもない彼に自分と姉との区別がつくわけがないっ！

動揺を隠し切れずにいるアヤメの手を、清次郎は振り払った。黙ったままのアヤメの表情を肯定と読み取ったのだろっ。

「違和感がありました、あなたのを抱きしめた時。それは次第に強くなりました。あなたはツバキではない」

「なんで！」

アヤメは咽が裂けるほどに叫ぶ。

「私とツバキなんて、どっちだっていいじゃない！ どっちだって一緒じゃない！」

「アヤメさん……」

「顔も、声も、背の高さも、すべて同じよ！ 何が違うっていうのよっ！？ あなたがほしいのはこの器からだでしょう！？」

清次郎は寂しそうな目をした。そして、ゆっくり首を横に振る。

「違いますよ。反応のひとつひとつをとっても。そうですね……確信したのは、この雪です。彼女は雪を見たことが無い。きっと彼女ならば、ふわふわと舞うこの雪に目を奪われていたことでしょう。僕が存在を忘れるほどにね」

清次郎は嬉しそうに目を細め、天を仰いだ。その笑顔は、ツバキに向けたもの。雪を見て、はしゃぐツバキに向けられたもの。それがわかるから、アヤメはますます、惨めな気分になせられる。

この人は絶対に私には微笑みかけてくれないのね。

一緒にいても、私を見てくれないのね。

目の前にいるというのに、私を通してツバキを見ている、いつも、

いつも……これからもずっと。

「僕が愛しているのは、あなたじゃなくて、ツバキなんです」

悔しさに唇をかみ締めていたアヤメに、駄目押しのような清次郎の一言は大きかった。アヤメの嫉妬に油を注ぐ。

「だから！ 私がこれからツバキとして生きるわっ！ どうして私じゃだめなの！？」

「……違いますよ、アヤメさん。あなたがだめなんじゃない。僕がだめなんです。ツバキじゃなきゃ、だめなのは僕なんです」

アヤメは頭を殴られたような衝撃を受けて立ち尽くした。胸も張り裂けそうなほど、痛い。

そんな……。

どうして……。

「だから……私がツバキになるって……言っているじゃない」

ぼたり、ぼたり。大粒の涙が、アヤメの足元の雪を溶かしていく。

「……すみません、ツバキを迎えに行きます」

清次郎がゆっくりと体の向きを変える。

「まって……清次郎さま！」

彼が行ってしまう。

アヤメはすかさず彼の背中に声をかける。けれど、彼の足はまた一歩前に出された。

「お願い……行かないで……」

もう彼が振り返ることはない。そう確信した。もう、どうすることもできないのだと。

私では、あの人を止めることすらできない。

「いやあ……」

いくら懇願しても、清次郎の足は屋敷の方へと進んでいく。

ツバキの元へと。一步、一步。

後から後から流れおちる涙が、止められないのと一緒に。

もう手が届かない。

自分のものにはならない。永遠に。

自分が欲しいのは、あの人だけなのに……。

あの人の腕の中にいられるなら、どんなことだってしたのに……。

「清……次郎……さま……」

お願い、私の前からいなくならないで。

こつちを向いて。もう一度だけ、最後に一度だけ、私を……アヤメを見て。

「ツバキなら……屋敷にはいないわ……」

消え入りそうな声で、なんとかアヤメは言った。

とたんに、清次郎の足が止まる。振り返った彼の瞳の中にアヤメがいた。

……ああ、なんて残酷な人。

ツバキのこととなると血相を変えるのね。酷い。ひどすぎる。どうして……。

なんで、私じゃないの……？

アヤメは、あふれる涙を押さえ込むように顔を両手で覆ったが、耐え切れず、ついにそのまま声を上げて崩れ落ちた。

寒椿（２）

なぜかは分からない。直久は、いつの間にかそこにたどり着いた。体中がアヤメを探し出すためのコンパスになったのではないかと思うほど、何かに引つ張られるようにして二人の元にたどり着いた。裏門の目前にして、泣き落ちるアヤメ。それを、冷ややかに見つめる青年。

その二人の間には、空よりも高く、地よりも深い隔たりを感じた。「アヤメさん……」

不思議な感覚だった。アヤメの心がなだれ込んでくる。

彼を愛してしまったこと。彼と逃げるために、今日のことを計画したこと。そして、ツバキとして彼に愛されようとしたこと。自分を殺して、ツバキになろうと決めたこと。

次々に、彼女の心が入り込んでくる。直久の心がアヤメに共鳴するように、自分が彼女になってしまったように。

悲しみ。妬み。怒り。孤独。不安。絶望。

そして、確信する。

彼女だ。自分と呼んだのは。

ツバキじゃない。アヤメのほうだ。

直久が、そう思った瞬間だった。

助けて！ 私はここにいるの！

直久ははっとした。

今、一瞬、何か聞こえた気がした。アヤメかツバキの声だった。しかし、アヤメは泣くばかりだし、ツバキはここにはいない。

（なんだ？今の？）

「ツバキはどこにいるっていうんです、アヤメさん」

清次郎の声に直久は我に返り、二人を見ると、嗚咽をもらして泣くアヤメの肩を支えるように、清次郎がアヤメを立たせてやっていった。

「ツバキさんは大丈夫ですよ！」

直久は、アヤメに駆け寄りながら清次郎に伝えたつもりだったが、反応がない。やはり彼には直久の声も姿も意味を成さないらしい。しかし、アヤメは直久の声に顔を上げる。

「……直久さん？」

アヤメがその声を上げたのと、清次郎が驚いたように目を見開いたのが同時だった。

「……ツバキ！」

（え！？）

直久はぎょつとした。清次郎がアヤメから手を離し、駆け出す。その様子を目で追うと、息を切らしたツバキの姿が目に入った。

「な、ちよつと、ツバキちゃん！ 何で来たんだよ！！」

直久が、どうやら彼女は自分の後をずっと追いかけてきたのだと、気がつくのにそう時間はかからなかった。

だが、やっぱり幼児と一緒に、一人で留守番なんてできるはずないよね、とも、納得せざるを得ず、がくりと肩を落とした。

「ツバキ！」

清次郎は実に嬉しそうな顔で、ツバキを抱きしめようとした。だが、その伸ばされた彼の腕を、ツバキは拒絶する。そして、アヤメを見て言った。

「アヤメさん。どうしてここに？」

「……………」

直久はぞくりとした。ツバキが怖かった。彼女の顔が怒りに満ちているからではない。無表情だからだ。

あんなに今まで、ころころと表情を変え、笑ったり、不思議がっ

たり、直久を心配そうに覗き込んだりと、表情豊かだった彼女の今の顔から、なんの感情も読み取れない。まるで、人形のようにと直久は思った。

と、それまでアヤメを見つめていたツバキの視線が、ゆっくり直久に移動する。

（　　！！　　）

直久の全身を、悪寒が走り抜けていった。この悪寒は、初めてではない。

そう、これは　　あの悪霊のっ！！

（まさか、そんな！　ツバキさんが！？）

恐怖に体中が岩のように動かなくなった直久は、ツバキから目をそらすこともできない。背筋を冷たいものが走っていく。

ふっ、とツバキの口元が不適に笑ったように見えた瞬間、ツバキは自分たちに背を向けた。

「私は戻ります。明日の儀式をするのは私よ、アヤメ！」

そう言って、彼女は屋敷へと走り出す。

「え、あっ！　ツバキ！！」

慌てて、清次郎が後を追った。

直久も、後を追おうとしたが、小さく振り返るアヤメの手がしっかりと直久の洋服の裾をひっぱっていて、前に進めない。

「い……いかないで」

このまま、ツバキが戻れば。

ツバキが生け贄になり、清次郎が自分のものになる。

そんなアヤメの心が、再び直久の心に流れこんできた。

「……アヤメさん……」

確かに、このままツバキが部屋に戻れば、アヤメは生け贄にならない。でも、それは彼女の命を救ったことになっても、心を救えない。

自分呼んだ彼女の魂は、命を救って欲しくて助けを求めたのか？
（いや、違う。オレを呼んだ、本当の理由は……！）

自分を認めて欲しい。

ツバキはツバキ。

アヤメはアヤメ。

そう言つてほしい、自分が心から信じる人に。

直久がそう思つてきたように。

自分はおまけじゃない。和久の残りカスでもない。

一人の人間として、ちゃんと認めてほしい。大事な人から。

（そんな 孤独を理解して欲しいからオレを呼んだ、違う？）

「ねえ、アヤメさん。君は本当はどうしたいんだ？」

「え……？」

直久はそう語りかけながら、ゆっくりとアヤメに歩み寄り、その肩にそつと手を置いた。

「ツバキちゃんをあ部屋に閉じ込めて、生け贄にさせることが、本当に君のしたいこと？」

「……………」

アヤメは直久が何を言いたいのかわからない、という顔をした。それでも直久はかまわずに続ける。

「アヤメさん。やつぱり、俺さ。どんな格好をしていても、君がどんなにうまくツバキちゃんの振りしていても、アヤメさんはアヤメさんでしかないと思う」

「…そんなことない。お父様やお母様は絶対に気がつかないわ」

「オレも双子の弟がいるから、わかるよ。入れ替わつて遊んだことは何度もある。でも絶対ばれるんだ。だつてね、ツバキちゃんがこの世にツバキちゃん一人しか存在していないように、アヤメさんだつて一人しかいないんだから」

アヤメは無言で直久から目をそらした。まだ納得いかなそうだ。

「じゃあさ、逆だつたら？」

「逆？」

「もし、何百つていう人がさ、清次郎さんの振りをしていて、それがもう、すつげえそっくりだったとする。アヤメさんは、清次郎さ

ん捜し出すことができると思う?」

「!」

アヤメは悔しそうに直久を見上げた。直久が何が言いたいのかわかったようだ。

「でしょ? 君なら清次郎さんを見分けられるよね。大切な人だから。大好きな人だから。清次郎さんにとってはそれがツバキちゃんだったんだよ。だから、アヤメさんが、どんなにうまくツバキの振りをこなしていても、清次郎さんにはバレてしまうんだ。ダメなんだよ」

「……………」

「アヤメさんを見つけてくれる、たった一人の誰かが、必ず現れるから。その時に、アヤメさんがアヤメさんとして、胸を張って生きていなきゃ。『これが私なのよ。何か文句ある!?』って」

どんなに、他人に嘘を突き通して自分を偽ったとしても、自分だけにはその嘘を隠すことはできない。

自分は自分。

他人にはなれないのだから。

「やめようよ。オレもやめるから、一緒にやめよう。自分に嘘をつくのは。まわりに認められようと頑張つて、自分を押し殺すのは」
直久は空を仰いだ。アヤメもつられたように天を見上げる。その瞬間に、彼女の瞳から一筋のキラキラとした涙が零れ落ちた。

「自分をもう少し好きになつてやろうよ。オレは弟みたいに人を救う力も無い。頭も悪いし、一族からはゴミかお菓子のおまけみたいな扱いさ。でもね、何もできない、誰も助けてやれないオレだけど、誰かを少しでも笑わせてやれることができれば、オレはそれでいいよ。それで十分、オレは生きている価値があるんだと、思えるよ」

「……好きになれるかしら……こんな醜い自分を」

直久はアヤメを振り返り、にっこり笑った。

「だって、君は十分に魅力的な女の子だよ。優しいし、笑顔が可愛い」

アヤメは、直久の言葉に少しだけ表情を和らげた。

「今だって、君はツバキちゃんの幸せを願っている。いや、ほんとうはずっとずっと願ってたんだ。あんな地下室に閉じ込められていた姉をずっと心配して、出してあげたくて、でもどうしていいかわからない。そう、悩んで、悩んで、苦しみぬいてきた。そうでしょう?」

「……だって……可哀相で……私のたった一人の姉なの……でも、怖くてできなかった……じゃああなたが生け贄になりなさい、って言われそう……できなかったの……」

再びアヤメははらはらと涙をこぼし始めた。

「それが普通だよ。オレが君でも、そう思うと思うよ。ま、その前に、オレは後先考えるのなんて苦手だから、まず暴動を起こすね。家をぶっ壊すっ」

直久はにかつと歯を見せて笑いかけた。それを見たツバキが泣き笑いになる。

「……でもさ、こんなおかしいって思わない? 生け贄なんて、本当に信じているの? 止めるべきは、ツバキちゃんたちの駆け落ちじゃなくて、生け贄の儀式のほうだと思っただけだな、オレ」

直久が何気なく言った言葉だった。でもそれは、アヤメにとってはおかしな感じがなかったことのように、まるで狐に摘ままれたような顔になった。

「え? だって何で死ななきゃなんないんだよ。おかしいだろう」

生まれた瞬間に、十六歳で死ぬことが決まるなんて。

あんな地下室に閉じ込められなきゃいけないなんて。

「……確かに」

アヤメはまっすぐに直久の顔を見た。そして、もう一度、はっきりと言った。

「確かに生け贄なんて、おかしいわ」

「でしょ? 生け贄の儀式自体を無くせばいいんだ。誰も死ぬ必要はないし、逃げる必要もないんだよ」

「……そうね。そうなんだわ。でも……」

言葉を切ってアヤメが顔を曇らせた。

「そんなこと、できるかしら……お母様だってずっと、生け贄を止めさせたいって、泣いてらしたわ。でも『しかたないの』、『無理よ、止められないわ』って」

「やってみたの？ オレ、何もしくないせに、『無理』とか『しょうがない』とか言ってる人って嫌いだ。だってさ、やってみなきゃわかんなくない？ やって後悔するより、やらなくて後悔するほうが損した気分になるよ、オレはね」

直久は思ったことを言っただけなのに、アヤメは、再び、はつとした顔になった。

「そうね……その通りだわ」

「え？」

「やらないで、『やっとけば良かった』ってずっと思っているより、『やってみてダメだった。なら今度はこっちだ』って思ったほうが次があるわよね」

「そう、そう、そう！ さすがアヤメさん！ オレが言いたかったのはソレよ」

「まあ、調子いいのね！」

ふふふ、とアヤメが笑顔になった。

何度か見るアヤメの笑顔とは少し違って、本当にすきりとした青空に浮かぶ暖かな太陽のような笑顔だと直久は思った。

「いい顔」

「え？」

「惜しいなあ、君がもうちょっと若かったら、オレの女にしたのに」

「まあ、若かったらって同じ年じゃないの？」

「うん、まあ、ざっと君が百五十歳くらい年上かな」

「……ええ！？」

アヤメは目を丸くし、絶句した。そして、すぐに声を上げて笑う。直久もにっこりと微笑んだ。

よかった。その笑顔で、オレも救われた。そんな気がして、直久は胸がほんわり温かくなつていくのを感じた。

「……私、ツバキを助けるわ。でも、逃がすためじゃない。二人で父を説得して、生け贄なんてやめさせる」

「うん」

直久は、柔らかな表情でうなずいた。

「やるわ！ 何とかする。時間はかかるかもしれないけど。まずは、ツバキを私の部屋に連れていくわ。それで、朝になったらお父様のところへ二人で行くわ」

そして、直久の方をしっかりと見て、言った。

「見てて、直久さん。まずは私が、やってみせるから。次はあなたの番よ。約束ね！」

きっぱりと言い切った彼女の顔は、すっきりとしていて、本当に綺麗だった。

直久とアヤメはツバキの部屋にたどり着くと、扉の前で顔を見合わせ、一呼吸おいた。

「いきましよう」

直久は深くうなずいた。それを受け、アヤメがその部屋の扉を一気に押し開ける。

直久がアヤメの後に続いて、足早に階段を降りて行くと、ベッドに腰をかけたツバキと、彼女を必死に説得する清次郎が見えた。

その様子にさすがの直久も驚いた。だいぶ動揺しているようで、オロオロとツバキの前を行ったり来たりしている。

直久も彼をよく知っているわけではないが、ついさっきまでの清次郎とはまるで別人に見えた。こうも人はパニックになると、回り

が見えなくなるものなのかと、直久は一人しみじみとなっていました。

「……アヤメ」

ツバキはしっかりとアヤメを見据えた。そして、直久とも目が合う。その瞬間、あの悪寒が直久を襲う。

「ツバキちゃん……君が　っ!？」

直久は最後まで言葉を続けることができなかった。突然ツバキの目が妖しく赤い光を放ったのだ。

（　　なっ!？）

次第にツバキの背後に何かが見え始める。それは部屋の闇より更に深い闇が霧のようにうごめいていた。

呆然とその闇に目を奪われ、恐怖に飲み込まれそうになりそうなのを瀬戸際で耐えていると、不意に不気味な声が直久の耳に飛び込んできた。

ジャマヲ　スルナ

（これは、悪霊の声!？　やっぱり……ツバキちゃんがあの悪霊なのか!？）

ということとはここは悪霊であるツバキの記憶が作り出した世界だというのが。

直久はやっと自分のなすことが、なさねばならぬことがはっきりと見えてきた気がした。

今、自分が目にしているのは、まさにツバキが悪霊になるまでの出来事で、このまま直久が何もせずにいれば、ただツバキが悪霊になるのを繰り返すばかり。

どこかで、自分がこの悪循環を断ち切らねばならないのだ。

では、どうやって断ち切る？

とにかく落ち着こう、と直久は唾を飲み込もうとした。が、できない。そればかりか、口も顔も動かせない。

（あれ？）

直久はまさか、と思い、足を動かしてみようとおもった。だが、どうやつても自分の意思では足が動かせない。いや、指一本動かないようだ。

（まじかよっ！）

アヤメに助けを求めようとした。

「っ」

が、声もでなかった。これは、本格的にやばい気がする。気がするが、同時に悪霊が自分が邪魔に思っている何よりの証拠ではなからうか。

（ツバキちゃんっ！！）

心の中で、叫んでみたが、ツバキからの応答も、わずかな表情の変化も見受けられない。これでは、直久の声が届いているのかどうかもわからない。

このまま。動けないまま。

自分は、何もできずにツバキを助けられなかったらどうなるのだろう。

そんな、不安ばかりがどんどん膨らむ。モヤモヤとした気持ちを払拭するために、いつもなら、水をかぶった犬のように、ぶるぶると頭を振り回すというのに、それも今はできないときた。苛立ちにもいた焦りの中、直久は、じっとツバキを見つめる。

「もう、この部屋にいない必要はないわ」

アヤメがそんな直久にはまったく気がつかずに、ツバキに対峙する。

「どういつことなの？ 儀式は明日よ？」

「それは後で話しましょう。とにかく外へ出て」

「だめよ。儀式が行われなければ、お父様が悲しむわ」

アヤメは小さくため息をついた。

「だから、私が代りにここににいるから。さっきもそう言ったじゃない」

「……………わかったわ」

ツバキは意外にあっさりとベッドから立ち上がった。それで、直久は、違和感を感じた。

……………おかしい！

何がおかしいのかは説明できない。でも、直久の肌がちくちくと、ツバキの中の悪霊を感じ取っている。ツバキの中の黒い闇を察知している。それだけは、断言できた！

直久は必死でもがく。つもりだった。実際には、髪の毛一本動かせていない。

なぜ。

どうしていつも自分は、大事な時に何もできないのだろう。今。

やらなければ。

そう感じているのに！

見ているしかできないのか。

また自分は、何もできないのか。

直久が胸を締め付けられるような痛みを感じた。その痛みがどんどんと強くなる中、ツバキが清次郎に肩を抱かれながら、直久の、つまり部屋の出口へ、と歩み寄ってくる。

（ダメだ、ツバキちゃん！！ オレは君を助けに来たんだ！ 悪霊になっただめだっ！！）

唯一動く眼球の筋肉をフル稼働させ、ツバキを目で追った。

（くっそう！ この呪縛さえ解ければっ！！）

ついに、ツバキが直久の横を通りすぎる瞬間、再びツバキと目があった気がした。

そして。

（なっ！？）

直久は目を疑った。見間違いだと思いたかった。
だが、確かに見たのだ。

彼女が、にやりと笑ったのを。
大きな虫が体中を這いずり回るような、ぞくぞくとした寒気が
直久を襲う。

オマエモ ココデ 死ヌガイイ

胸が、どくん、どくんと大きく脈打った。

再び直久だけに聞こえた悪霊の声に、恐怖よりもさらに強く、嫌
な予感がした。

悪霊は今、なんと言った？

おまえ“も” ここで死ね！？

「行くわよ、直久さん」

続いて直久の横を通過したアヤメは、階段を途中まであがったと
ころで、直久がついてこないのに気がついたらしい。不思議そうな
声が聞こえた。

直久の体はピクリとも動かない。それなのに、額から嫌な汗がた
らりと垂れていった。

「直久さん？」

危険。

キケン、キケン！

体中が、警報を大音量で鳴らしているというのに！！

この危険をアヤメに伝えるすべがないなんて！！

「アヤメ」

ツバキの声がした。振り返らなくても、直久にはその恐ろしい無
表情な顔が、手に取るように分かった。

「ありがとう」

「ツバキ？」

困惑したようなアヤメの声。

「えー？ あっ、ちょっと、鍵を返してっ！」

「ありがとう、もう一人のツバキ。あなたはもう要らない」

「え？ あ、やめっ……」

直久の背後で、争う声が聞こえたと思うと、ドンという鈍い音がした。

「きゃあああああ」

「

頭が割れそうな悲鳴が、部屋の冷気を切り裂く。かなりの質量のあるものが転がり落ちてくる重い音。後続く、慌てて部屋を出て行く二人分の足音。

それでも直久の体は動かない。

何があった。

アヤメにいったい何があったというのだ！

（畜生、アヤメさんっ！？ アヤメさんっ！！ くっそーっ！

動け、動け、動けええええええええええ！！）

パリン

心の中で必死で叫んだ瞬間、まるで鏡でも割れるような、大きな音が直久の頭の中で響いた。ふわりと、体が軽くなったように感じたかと思うと、バランスを失った直久はその場に崩れ落ちた。

（ 解けた！！ ）

間髪いれずに、直久は背後を振り返る。階段の下に横たえる赤い着物が目に入った。

「アヤメさんっ！！」

慌てて駆け寄り、抱き起こす。アヤメがかすかに、うめき声を上げた。

よかった生きてる。

小さく息をついた。

「アヤメさん、しっかりして！」

「大丈夫よ、直久さん……あっ！」

体を起こして、立ち上がろうとしたアヤメは、小さく悲鳴を上げた。

「どうしたっ!？」

「足をひねったみたい……」

なんだ、その程度か。直久は大きな脱力感を味わった。

とりあえず、無事でよかった。本当によかった。

せつかく、いい顔をするようになったのだから。アヤメには少しでも長く笑っていて欲しい。素直に直久はそう思うのだ。

「それにしても、どうして階段から落ちたの？　なんかもめてたように聞こえたけど」

直久が聞くと、アヤメは顔を曇らせた。

「ツバキに、突き落とされて……鍵も取られたわ」

直久は、自分の頭から、さあつと血が引いていくのがわかった。

悪霊の言葉が意味していたのは、このことだったのではないか？

「閉じ込められた!？」

直久の言葉に、アヤメも顔色を変えた。ひねった足を這うようにして階段をあがり、扉の前に急ぐアヤメ。

「開かないっ!!　開かないわっ!!」

「まじかよ……」

アヤメは完全にパニックになっているようだった。このままでは清次郎がツバキを連れて逃げてしまう。そうになったら、自分が生け贄にされる。そんな恐怖が直久にも流れ込んでくる。

怖い!　怖い!!

静かな闇に支配された部屋。

怖い。

嫌、こんなところにいたくない。

誰か、お願いだから出して！　お願いよ！

そんな悲痛な心の叫びが、直久を襲う。苦しい。胸が痛い。心が壊れてしまいそうだ。

「いやあああつ！！　ツバキ、ツバキ！　誰か、助けてっ！！」

アヤメは何度も扉を叩いた。何度も、何度も。

直久はそんなアヤメの心に完全に同調していた。

胸が痛くて、息も出来ない。勝手に目頭が熱くなってきた。

死にたくない！

死にたくない！！

ツバキを助けようと思ったのに！！

どうして私が死ななければならぬの！

ひどい。こんなのひどい。

嫌だ、ここから出して！！

私は死にたくないーっ！！

「お願い、出して！　ここから出してえええっ！」

「アヤメさん、落ち着いて！！」

直久は、泣き叫ぶアヤメを力いっぱい抱きしめた。だが、パニックになっているアヤメは、余計に苦しそうにもがいて泣き叫ぶ。

「いやあああーっ！！」

「アヤメさんっ！！　オレが助けるから！！　オレが鍵を持ってくる」

だから、そんなに、心をなくすほど、壊れそうなほど悲しまないで。

さっき、君は笑っていたじゃないか。

オレに葉っぱをかけるほど、誇りに満ちていたじゃないか。

「お願いだ、アヤメさん。オレを信じて……」

ぼつり……。

アヤメの頬に暖かな雫が落ちてきた。涙だ。

「……………なお……………ひささん……………」

泣いているの？ と驚きに目を見開いたアヤメが直久を見つめ返すと、直久の潤んだ瞳にふわりと包み込まれたような気がした。

「君は、オレが助ける。そう約束したろう……………」

直久は、アヤメの頬を両手で挟むようにして、アヤメの涙をふき取った。

「だから、君は笑って。オレのために」

直久は、そっとアヤメの瞼に口付けした。閉じたアヤメの瞼から、再び、ひと筋の涙がこぼれた。その雫は部屋の薄暗いランプを反射してキラキラと輝いて、床に落ちていった。

「……………うん」

弱々しく直久に微笑みかけたアヤメは、どんな高価な宝石よりも美しく感じた。

寒椿（3）

時刻は深夜2時を回っている。いつの間にか、日付けは、生け贄の儀式が行われる予定の日になっていた。

アカネはベッドの上で、何度目か分からない寝返りを打った。

今日は儀式の日。アカネにとって、もう一人の姉であるツバキが、神に召される日だ。

幼い彼には、一緒に遊んだ記憶のない姉だとは言え、大好きなアヤメと同じ姿をしているツバキの死は、やはり受け入れがたい。

「はぁ……」

アカネから、今夜何度目かのため息がこぼれた。ふと、窓の外を眺めると、雪が音もなく降り注いでいることに気がついた。いつから降っていたのだろう。

「……………」

その景色の中で、何かうごめくものを見つけ、アカネは目を凝らす。よく見えない。

しかたなく、窓辺に張り付くようにして、もう一度目を凝らす。

「あれは……」

清次郎と……連れているのは、髪の高い女性……まさか……アヤメ！？

「た、大変だ！！ 清次郎お兄ちゃんが、アヤメお姉様を連れて行っちゃう！！ お父様っ、お父様ーっ……」

アカネは慌てて部屋を駆け出した。

すぐに、アカネの報告は、父である屋敷の主人を通し、あつというまに全村人へと伝わった。

屋敷の主から村人たちに清次郎とアヤメの行方を捜すように命令が下ったのだ。男が抵抗する場合、殺してもかまわない、しかし娘は生け捕りにしろ、というもの。そのため、村人たちの全員に屋敷の主から銃が貸し出された。

彼は、娘の心配をするでもなく、

「そのうち、どこかの金持ちに嫁がせようと思っていたが、なんて恥知らずな。よりによって画家なんかと駆け落ちするとは」

と、苦々しく言い捨てた。

彼にとって、娘はツバキにしても、アヤメにしても、御家発展のための手駒でしかない。だが、絵描きなんかと駆け落ちしたという傷を負ったアヤメは、金持ちの家に嫁に出すという望みを失ってしまい、駒としては使い物にならない。これが、腹を立てずにいられようか。

そもそも、あの男もあの男だ。高額を支払ってまで雇い入れてやったというのに、なんと恩知らずな。こんなことならば、娘思いの父親なんぞ、演じなければよかった。

ブツブツと不満を垂れ流しにして、彼は銃を片手に、屋敷の外へと出た。

雪がひどく降ってはいても、今さっき、付けられた二人の足跡を隠すには、足りない。しかも、追われているとは気がついておらず、女連れ。追いつくのは時間の問題だ。

「行くぞ」

父は、背後にいる村人たちに声をかけ、積雪の中に足を踏み出した。

だが、このとき、誰も考えもしなかったのだ。いくら、発見された娘が白い着物を着ていたとしても。まさか、外にでているのがツバキの方で、あの地下室に閉じ込められている方こそが、アヤメであるとは。

直久はツバキの部屋の扉からすり抜けると、ふわふわと落ちてくる粉雪を頬に感じた。なぜか、そこにはもう屋外だった。林道らしい。

何が起こったのかわからず、一瞬放心してしまう。慌てて振り返るが、先ほどまで居たはずのツバキの部屋の扉は、どこにも見当たらない。

あるのは一面の銀世界。

ただひたすらに降り積もる雪。

「ええっ！？　ワープしちゃった？」

まさか、用済みになつて現代に戻されたなんてことはないだろうか。一瞬期待した直久だったが、遠くに、豆つぶよりも小さく二つの人影が見えて、それがだんだんと誰だかわかってくると、完全にその期待は消え去った。

人影は、深い雪に足をとられながらも、必死に走ってこちらへ向かってくる。いや、こちらへ逃げているのだ。

「……………ツバキちゃん」

ついに目の前に現れた少女を、直久は静かに見据えた。

アヤメそっくりな少女。だが、アヤメではない少女。

少女はピタリと足を止める。

ところが、止まっただけなのは彼女の足だけではなかった。雪も宙に浮いたまま、動かない。よく見るとツバキの隣にいる清次郎も、走る姿勢のままピクリとも動かない。止まっている。まるで、直久たちの周りだけが、時が流れていないように見えた。

ここがツバキが作り出した世界だとしたら、何がおきてもおかしくないだろう。直久は妙に納得していた。だが、今はそんなことに気をとられている場合ではない。

ツバキが悪霊だと分かった今、直久のやるべきことは決まっている。

ツバキを救う。悪霊になどさせない。そして、アヤメも救う。あの部屋から助け出す。ついでに生け贄の儀式もぶつつぶす。これしかない。

「ツバキちゃん……帰ろう」

どんな硬いものでも貫いてしまうのではないかと思うほど、鋭い目つきでツバキが直久を睨んだ。その気迫に押され、思わずごくりと唾を飲む。

「帰って、それで私に死ねというの？」

先ほどまでのツバキとはまるで別人だった。抑揚のない声、無表情な顔だというのに、彼女の心の叫びが体中からあふれているように感じられた。

私は悪くない。

私は死にたくない。

なんで私が死ななくてはならないの？ 私は彼ともっと一緒にいるのよ。

ツバキの全身がそう叫んでいるのが痛いほど伝わってくる。

「……………ツバキちゃん。違うよ。君が死ぬ必要はないんだ」

「そうよ、アヤメが代りに死んでくれるから、私は死ぬ必要なんてないわ」

そう言ったツバキの目が赤く輝きだした。

（悪霊が表に出てきているのか？ もしかして、今、ものすごいチヤンス？）

ツバキが悪霊だとわかってから、直久にはずっとその理由がわからなかった。

直久がついさっきまで見てきたツバキは、純粹無垢を絵に描いたようで。まるで、幼児のように、見るもの全てに目を奪われ、笑顔の堪えない少女だった。

しかし、目の前にいるツバキが本当のツバキだとすると、それら

は全て偽りの姿。嘘をついていたことになる。

本当は、ツバキは全てを知っていたのだろうか。

自分はただ死に行くために生まれてきたこと。その死を受け入れやすくするために、薄暗い部屋に監禁されていたこと。それは決して、人間らしい生き方ではないということ。

知っていたのだとすれば、それほど恐ろしいことはない。自分の運命を呪い、ほぼ同時に生まれた妹に対して、妬みや恨みを抱いていてもおかしくない。

どんなに苦しかっただろう。

誰一人自分の味方はいない。

死んで当たり前、と誰からも思われる人生なんて、直久だったら耐えられない。

そして、肉体が滅んだ今も、こうしてあの地下室に心が囚われたままだとしたら……。

直久は、ぎゅつとを拳を握り締めた。

自分が。なんとかしてやりたい。この手で救ってやりたい。

これ以上ツバキが、そしてアヤメが、泣き叫びながら助けを求め続ける姿を見てはいられない。

助けるんだ。

二人を、この手で。

約束したんだ。助けるって。

まっすぐにツバキを見据えた直久の目に、強い光が灯った。

「逃げる必要なんてないんだ。儀式を中止しよう」

「え？」

思いもよらなかったのか、ツバキの顔に小さな戸惑いが見える。

「アヤメさんが言ってたよ。ツバキを助けたい。だから、お父さんを説得して、生け贄をやめさせるんだって。ツバキと一緒に説得するんだって」

直久はじつとツバキの返事を待った。

ツバキは直久の真意を伺おうとしているかのように、こちらを見

つめている。

近くの木の枝から、自身の重みに耐えかねた雪が重力にしたがつて、どさりと落ちた。

「ふふ……」

ツバキが短く笑った。

「アヤメがそんなこと言うはずないわ。アヤメが望むのは、私が生け贄になること。アヤメは自分が助かることしか考えてないのよ」

「そんなことないっ！」

直久は思わず声を荒げた。が、間髪いれずに、「あなたに何がわかるのよっ！」とツバキの悲鳴のような声が返ってきた。

「アヤメが私を助けたい？ 笑わせないで。あの子がこの十六年間で、私に何をしてきたと思う？」

ツバキの顔が、苦々しくゆがんだ。

「たしかに、毎日、毎日、アヤメは私のところに来たわ。でも、顔を出すわけでも、話し相手になるでもない。ただ、私が生きているかそれを確かめるために。なぜ分かる？ 私が死んだら生け贄になるのはアヤメだからよ！ 自分が死ぬのが嫌だから、ただそれだけなのよ！！」

直久はぞくりとした。ツバキの背後に再び黒い靄が立ち昇り始め、不気味にうごめきながら、それはみるみるうちに成長し始めていたのだ。

ツバキの表情が、すつと無表情に戻った。

「言っただでしょう、邪魔しないでっ！」

直久がごくりと唾を呑んだのと同時に、ツバキの目が赤く、妖しく閃光を放つ。その瞬間、ツバキの背後から黒い靄が、一斉に直久にむかつて伸びてきた。あっという間に直久は靄に捕らえられ、一気に飲みこまれた。

「うわああああ」

叫びながら、直久は目をぎゅっと閉じた。反射的に、次に来るだろう衝撃や痛みから身を守るために、体が反応する。

あら、ツバキが動かないわ

体にどこも痛みを感じないまま、代りに直久の耳に飛び込んできたのは、幼女の声。

完全に意表をつかれた直久は、目をつぶったまま「……はい？」と首をひねった。いくら待っても、何も事がおきなそうなので、おそおそる瞼を上げてみる。閉じている時とさほどかわらない闇が見えた。

あたりを見回すまでもなく、幼女が椅子に座っているのが直久の目に飛び込んできた。まるで闇の中に、そこだけスポットライトでも照らされているかのように、浮き出して見える。

それにしても、ここはどこだろう。首を左右にひねって確認するが、どこまでも闇が続くばかりだ。

寝ているのかしら？

五、六歳だろうか。その横顔が、すぐに直久の記憶の中の人物に思い当たり、また白い着物を着ているために、幼女はすぐに特定できた。ツバキだ。

よく見れば、ツバキは膝の上に置かれた鉢を、食い入るように見ている。

（金魚鉢？）

鉢には水がはられ、紅白の金魚の姿があつた。しかし、白い方は水面に仰向けになって浮いている。

記憶だろうか。自分はツバキの幼い頃の。

直久は、まるで再現映像を見ているかのような感覚にとらわれていく。

ふと、自分に何か伝えたいことがあるのではないか、という考えが直久の中に沸いてきた。

なぜかわからないが、直久にはツバキから殺意を感じない。さつき対峙してから、ずっと。

だから、きつと何か直久に分かって欲しいことがあるのではないか、そう思えてしょうがないのだ。

「ねえ？ どうして動かないの？」

不意に幼女がこちらを振り返った。

直久と目が合う。その拍子に心臓が跳ね上がった。

見えている。

自分の存在が認知されている。どうなっているのだろう。ツバキの記憶じゃないのか？

直久が戸惑いから反応できずにいると、ツバキが椅子を降り、直久に走り寄ってきた。

胸の鼓動が早くなる。どうなっているんだ。何度問いかけても、答えは出ない。

「ほら、見て。ツバキだけ動かないのよ。アヤメは動いてるでしょう？」

ごくりと直久の喉が鳴った。

言われるまま、直久は幼女の両手に抱えられた金魚鉢と、彼女の顔を数回、視線を往復させる。

なるほど、赤い金魚と白い金魚にそれぞれ“アヤメ”と“ツバキ”という名をつけたのだな、と納得した。しかし、その白い金魚がすでに死んでいるのは、誰の目にも明らかだ。

そう、死んでいるのは“ツバキ”……。

直久は、どうしてもそれを口に出ることが出来なかった。

「……これ、どうしたの？ 誰にもらったの？」

「お父様よ。お父様が、くれたわ。アヤメとツバキだって」
「……………」

なんて事を。

無神経にもほどがある。

よりによって双子の名をつけるなんて、どうしてそんな悪趣味な

ことができるんだ。

ぎりりと奥歯をかみ締め、直久は思わずツバキから目をそらした。
「ねえ、どうしてツバキは動かないの？」

「ツバキはもう……動かないよ」

「どうして？」

直久は、搾り出すように、言葉をつむいだ。

「死んでしまっているんだ」

静寂があたりを包む。

ツバキの反応がない。おかしいな、どうしたのだろう、と直久が
思い始めた時だった。

先ほどまでとは違って、少し落ち着いたツバキの声が返ってきた。
「そう。これが死ぬことなのね」

はっと、直久は息を呑んだ。目の前のツバキが、あきらかに成長
していたのだ。中学生くらいだろうか。

直久にはわけがわからなかった。先ほどの少女の時の記憶とは、
また別の記憶に飛んだのだろうか。

明らかに動揺の色が濃くなった直久に、ツバキは容赦なく質問を
続けた。

「人は死んだらどうなるのかしら。ねえ、私は死んだらどうなるの
？」

怖い。

直久はそう思った。

決して、殺されそうになっているわけでも、怒られているわけ
でもない。

無表情な、人形のように美しいツバキの姿を、怖いと感じた。

動けないでいる直久から、ツバキの方が先に視線をはずす。そし
て、立ち上がり、右を向いた。その横顔の先を直久は目で追う。ぼ
んやりと、部屋の入り口が見えた。そうか、ここはあの地下室なの
だ、とそこで初めて認識を改める。

「最近、お父様もお母様も、いらしてくれないのよ。きっと死んで

しまつからなのね。もうすぐ、この部屋から居なくなるからだわ。でも、だったらどうして人は生まれてくるのかしら。この部屋にずっといるために生まれてくるの？ 儀式で死ぬために生まれてくるの？」

寂しげに入り口を見つめるツバキ。

「アヤメもそうなのかしら。アヤメも私と同じように、思っているのかしら。寂しい思いはしていないかしら。暗闇で怖がってはいないかしら。アヤメ……私の妹……もう一人の私……」

ツバキは、直久を振り返った。

「ねえ、アヤメに会いたい！ ちょっとでいいの。アヤメにあわせたい！」

ツバキに急に詰め寄られ、直久はぎよっとする。しかし、すぐりつくように泣き出されれば、やるせない気持ちで、胸が張り裂けそうになる。

どうすることもできない。どうしてやることもできない。ツバキを毎日世話していたという、口の聞けない老婆はきつと今の直久のような気持ちになったにちがいない。

肩を震わせて、泣き崩れるツバキ。

直久はいてもたってもいられず、ついに、ツバキを力いっぱい抱きしめた。

なんて言葉をかけていいかわからない。だから、ただ、ただ、抱きしめた。

やっぱり、ツバキは知っていた。

もうずっと、死への恐怖におびえながら、この闇と孤独に耐えながら、長い長い心細い時間を過ごしてきたのだ。

アヤメもきつと自分と同じような境遇にある。そう信じて、心配しながら。

（もういいよ……もういいんだ）

もう誰も苦しむ必要などない。

もう生け贄なんかで死ぬ必要はないんだ。

ツバキもアヤメも、好きなことをして、好きなところで、好きなように生きればいい。

わがまま、そう　我が心のままに。

「そうだったのね、アヤメはこんな暮らしをしていなかったのね」

直久はぎよっとした。自分の腕の中にいるツバキが、驚くほど低い声で、ぽそりとつぶやいたのだ。

思わず引き離れたツバキの顔を覗き込み、直久は目を見開いた。

また成長している。目の前にいるのは、今の、十六歳のツバキだった。

今度は、いったいどんな記憶だというのだろう。

少しだけこの状況に慣れてきた直久は、じっとツバキを見守ることにした。

「……外の世界は、本当にすばらしいのね。本当に。私、雪も食べてみたのよ！　ああ、もっともっと、外の世界で生きていられたらどんなに素敵かしら」

直久はあれ、と思った。目を輝かせるようにして何やら物思いにふけるツバキの顔を、じっと見つめる直久。

外の世界？　雪を食べた？

これはいつの記憶だろう。そう考えたが、すぐに先ほど直久と一緒に逃げた時のことだと気がつく。

「でも、清次郎さま。逃げるなんてそんなことできるわけないわ。お父様が困るもの」

清次郎？

明らかに、自分にむかって清次郎とツバキが言った。

ツバキは、直久を清次郎だと思って話しているということだろうか。

つまり、これは、ツバキがアヤメと清次郎の言い争い現場に鉢合わせし、その後ツバキが清次郎と二人で部屋へ戻った時の記憶だということだろうか。

「でも、そうね。アヤメが私の代りに生け贄になってくれれば、逃

げられるかもしれない。私とアヤメが入れ替わればいいのよ。そうすれば、私は清次郎さんと、これからずっと一緒にいられるわ」

直久はもうツバキの顔を見ていられなかった。

そう、こうして、ツバキはアヤメをあ部屋に閉じ込めたのだ。

今まで、自分と同じように、別の地下室に閉じ込められて生きてきたのだと信じて疑わなかった妹は、自分とはかけ離れた、天国のような世界に生きていた。それを知ってしまった。

どうして、自分だけが。こんな思いをしなくてはならないのか。

そう思ったに違いない。それを証明するように、ツバキは続けた。「今までの私の苦しみを、味わって貰わないとね」

ふふっ、と可愛らしい笑みを浮かべるツバキに反して、直久は青ざめ縮み上がった。

どうして、清次郎は彼女を止めなかったんだろう。怖くなかったのだろうか、アヤメを殺す共犯になってしまうことが。大切な人に殺人を犯させてしまうことが。

直久はそう思ったが、すぐに首を振る。止められなかったんだ。きつと、こうなってしまうては、誰であつても止められなかったのだ。

「ねえ、直ちゃん。あなたもそう思うでしょう？」

え？

急に名前を呼ばれ、直久は固まる。

「あなたをここに呼んだのは、私よ。あなたを必要としていたのは私。べつに、私に協力してくれるのなら、あなたじゃなくても良かったのだけど、結果的にあなたで正解だったかもしれないわね。ありがとう」

そう笑って、ツバキは直久に背を向けた。

ひんやりと、直久は自分の頬に何か冷たいものが触れた気がした。雪だ。

いつの間にか闇が消え、代りに銀世界が直久の視界いっぱいに広がっている。

「さあ、ツバキ！ 急いで！！」

声のほうを見ると、ツバキの手を引いて清次郎が直久の前を通過しようとしている。

ツバキの記憶の呪縛が解け、直久の周りの時間が元に戻ったらしい。

一瞬、直久の前を通り抜けようとするツバキの視線が直久を捕らえた。

邪魔をしないで。

このまま行かせて。

強い意志を直久は感じた。

だが、直久は両手の拳に力を入れる。

「ダメだ！ 今逃げても、何も変わらないんだ！」

声の限り、直久は叫んだ。

「あっ！」

まるで、直久の思いがそうさせたかのように、ツバキが直久のすぐ側で足を滑らせ、転倒した。清次郎が慌ててツバキを助け起こそうと手を差し出す。

（今だ！ 今しかない！）

直久はそれが最後のチャンスだ、と察した。

寒椿（４）

「アヤメさんは、ただのんびり生きてきたわけじゃない。ずっとずっとツバキちゃんを助けたかったんだよ！！　でも、怖くてできなかったんだ」

清次郎の手を取るのも忘れたように、ツバキが直久をじっと見つめている。

「一人ではできないから、だからっ！！　アヤメさんはツバキちゃんと一緒にならできるって、一緒に説得しようってっ！！」

「嘘よっ！！」

直久のことが見えていない清次郎は、ツバキが突然叫びだしたので、びっくりと体を硬直させる。

それでもかまわず直久は続ける。

「嘘じゃない！！　だったら、なんでアヤメさんは戻ってきたと思うっ！？」

ツバキの顔に小さな動揺が見えた。

「あのまま、アヤメさんが君の部屋にもどらなかったら、君はこうやって逃げることはできなかったはずだ。でも、なんでアヤメさんはわざわざ君の部屋に行ったと思うっ！？　そのまま朝まで放っておけば、ツバキちゃんが生け贄になるってわかつているのにっ！！」

あの時、アヤメは戻る必要などなかった。ツバキを助ける気持ちがあれば、生け贄になるために部屋に戻ったツバキを追って、ツバキの部屋を訪れる必要などなかったのだ。

再びツバキを部屋に閉じ込めさえすれば、予定通り儀式はツバキを生け贄として行われるのだから。

それでも、アヤメは行った。

「君を、助けたかったんだ」

「……………うそよ……………」

ツバキの視線が、頼りなげに宙をさまよう。

「嘘なものか！！　あの時、アヤメさんは君に何て言った！？　もうここに居る必要などない、そう言っただろう！？」

「でもっ！！」

ツバキは直久をしつかりと見据えた。その瞳にいつぱいの涙を浮かべて。

「生け贄は……アヤメがかわりにやるって……言っていたわ」

「そうでも言わなきゃ、君はあの部屋を出ようとしなない、そう思ってたんだろう？　アヤメさんは、君を自分の部屋に匿うつもりだったんだよ」

「……アヤメが……私を……？」

直久は息を短く吐いた。肩の力が抜ける。

「そうだよ。だって、君たちは双子だろう。君がアヤメさんを心配するのと同じように、アヤメさんだって君の事をずっと心配していたに決まっているじゃないか」

よく似た姉妹なのだから。

顔かたちだけじゃない。お互いを思いやる、優しいところまで。

「戻ろう、アヤメちゃんのところ」

直久は柔らかく笑った。

「でも、私……アヤメにひどいことを……」

「分かってくれるよ……君の妹だろう？」

いたずらっ子のように直久が微笑みかけると、ツバキはつられて口はしを少しだけほころばせた。そして、視線を清次郎に移し、柔らかに微笑む。

「清次郎さま。行けないわ……妹を助けなくては」

「え？　ツバキ！？」

一人わけが分かっている清次郎は、きょとんとしたままツバキに手を引かれるように、屋敷の方へ二、三步足を運んだ。

その時だった。

「早く、あそこから出してあげ」

ツバキの顔が瞬時に凍りつく。

「居たぞっーっ！！」

直久の目にも、それははつきりと捉えられた。純白の雪の絨毯をぐちゃぐちゃに汚しながら、銃を持ってツバキと清次郎を取り囲もうとする村人たちの姿が。

ツバキたちは、あつという間に村人に取り囲まれた。

「どこへ行く、アヤメ」

最初にツバキに声をかけたのは、父親だった。しかし、その顔は今までツバキに一度も見せたことの無いほど、恐ろしく怒りに歪んでいた。

「大切に大切に育ててやったというのに、こんな男とどこへ行こうというのだ」

「お、お父様？」

「さあ、帰るぞ。お前のような、しょうもない娘は、遊廓にでも売り飛ばしてやる。そうすれば少しは金の足しにもなるうよ」

鬼のような形相の父に腕をつかまれ、ツバキは震え上がった。その父の手を清次郎が振り払う。

「あなたは、自分の娘をなんだと思っているんですか！！」

「黙れ小僧！！　ぶっ殺してやるっ！！」

怒り狂った父が、清次郎を突き飛ばした。清次郎は雪の上に投げ倒される。その清次郎に向かって、父が銃を構えるのが目に入った。全ての動きがツバキにはゆっくりに見えた。

撃たれる！！

清次郎さまが撃たれる！！

私に、外の世界を覚えてくれた。外の世界に連れ出そうとしてくれた、大切な人が、殺されてしまっっ！！

「やめてえええええつ!!」
ツバキが清次郎と父の間に飛び出したのと、父が引き金を引いたのが、ほぼ同時。

ズギューン……

銃声だけが、雪の作る静寂の世界を引き裂いた。

一瞬の間をおいて、ツバキの体が傾いた。

ゆっくり、ゆっくり。

仰向けに倒れていくツバキ。

長い黒髪の本一本が、粉雪と共に宙を舞う。

「ツバキ　っ!!」

名前を呼ばれている。

大好きなあの人が、自分の名前を呼んでいる。

返事をしなくては、と思った。思ったのに、どうして声が出ないのだろう。ツバキには、自分の体に力が入らないのが不思議でしうがなかった。

「ツバキっ!!　ツバキっ!!」

清次郎の息を呑む音が耳元で聞こえたかと思うと、ふわりと自分の体が彼の腕に収まるのがわかった。そして、心配げに自分を覗き込む彼の顔が目の前に現れる。

（よかった、無事なのね。でも、泣かないで。私は、どこも痛くないわ。本当になんともない。大丈夫だから、そんな顔なさないで）
そう伝えたいのに、口が動かない。

本当に自分は、どうしてしまったのだろうか。

「ツバキ……だと?」

そこへ、驚きに満ちた父親の声が聞こえてきた。目の前にいる娘が、白い着物を着ていることに、ようやく気がついたのだ。

「お前、ツバキを連れ出したのか!?!」

父の声にあつという間に、満ちていく憎悪。

吐き捨てられた、言葉。

「おのれーっ！！」

（やめて、お父様！！ 清次郎さまを殺さないでっ！！）

ズギン ズギン、ズギーン！！

銃声が再び聞こえ、ツバキの大好きな人の瞳が大きく見開かれた。そう聞く間も無いくらいの、わずかの間をおいて、彼の体がぐらりと傾く。

仰向けに倒れていく姿を、ツバキは必死で目で追った。

そんな！

嫌よ、嫌！！

清次郎さま、死んでは嫌よ！！

いやああああああっ！！

ドサリ。

完全に沈黙した清次郎のたてた重たい雪音だけが、ツバキに絶望を告げた……。

直久はただ呆然と男性が鬼の形相で清次郎に銃口を向けるのを見ていた。

胸が真っ赤にそまるツバキと、彼女を抱きかかえ、男性を睨みつ

ける清次郎。その回りには、幾重もの人垣の中の一人でしかない直久。

いったい何がおきているのだろうか、と直久が思う前に、男性がその引き金を引いた。

ためらうことなく。

ひたすらに、清次郎を撃ち抜いた。

何発も、何発も。

まるで、全ての怒りをぶつけるように。

雪に吞まれるように倒れ込んでいく清次郎とツバキ。だが、誰一人として、父を止めようとするものはいなかった。ただ、じつと、清次郎の息絶えるのを見つめているだけだった。

（ なっ！ ）

むごい。

むごすぎる。

これが、現実におきたことだというのが。

これが、人のすることなのか。

あまりに凄惨な状況を目の当たりにした直久は、呆然と立ち尽くすことしかできなかったのだ。

そんな中、すでに息のない清次郎に全ての銃弾を撃ちつけてもお、引き金を引き続ける男性の肩に村人の一人が、いたわる様に手を置いた。男性は、我に返ったようになり、苦々しい顔で村人を振り返る。そして、搾り出すような声で言った。

「……行くぞ」

「ぎ、儀式はどうするんですか？」

「生け贄？ これで十分だろう？ 谷から突き落とすのも、銃で殺すのも、娘が一人死ぬことにはかわらん。行くぞ」

かける言葉が見つからないのか、村人たちは顔を見合わせると、無言で男性の後に続いてその場を立ち去る。残された直久は、ふらふらとおぼつかない足で、雪の上に横たえる二人のそばへと近づいていく。ツバキの前までくると、がくりと膝を折った。

「……ツバキちゃん……」

呼びかけにツバキは答えない。

目に一杯の涙を浮かべ、彼女の大きな瞳が一瞬だけ直久をとらえたような気がした。

直久は震える手をツバキの口元に運ぶ。かすかに息があつた。

「よかつた……」

直久は小さく息を吐いてから、少し視線をずらし、清次郎を見た。その瞳は、かっと見開かれ、整った彼の顔とはまるで別人な気がした。その額に、くつきりと被弾の跡がある。一発で即死したに違いない。

僅かな間だけ、直久は目を伏せると、そつと清次郎の臉を手で閉じてやつた。

……直……ちゃん……

直久は再び耳を疑つた。突如、ツバキの声が聞こえてきたのだ。

でも、耳にはではない。頭の中に直接響いてくるかんじだ。まるでテレパシーのように。

思わず直久は、ツバキに視線を落とした。

「ツバキちゃん!？」

直ちゃん……お願い

再び声が聞こえたが、やはりツバキは唇を少しも動かしていない。しかし、直久はツバキの声だと確信していた。

「ツバキちゃん!？　しつかりして!」

ツバキの、紫色になつてしまった唇が小さく動いた気がした。だが、声にならない。自分に伸ばされたツバキの手を直久は膝を着いて受け取つた。優しく両手で包み込む。

そのツバキの細い手から、彼女の気持ちいが流れ込んでくるのが分

かった。

これでいいの。

私はもう、これでいいの。

暖かな、柔らかな、ツバキの心が直久に伝わってくる。

私は満足よ。あの部屋の外にも出たわ。それに、愛した人と死ねるの。

ずっと一緒にいられるの。

もう十分だわ。

だから。

ツバキは、痙攣しながら直久に握られていた自分の手をゆっくり開く。

「……鍵……あの部屋の？」

ツバキは直久を見つめ続ける。再びツバキの唇が小さく動く。

直久は必死でその唇の動きを読んだ。

でも、読まなくても分かる。

ツバキが願う、最後の心。

命の最後に、思う大切な人。

“アヤメをたすけて

”

直久はあふれてくる涙をこらえることができずに、天を仰いだ。

はらはらと舞う雪。零れ落ちる直久の心の雫。

ぐつと歯を食いしばり、片手で涙をぬぐうと、直久はツバキをもう一度見やり、力強くうなずいた。

「オレが助けるから」

鍵を強く握り締め、直久は駆けだした。必死で駆けた。

ツバキはその遠ざかる直久の背中をいつまでも見つめていたいと思っ
た。

でも、もう瞼も重たい。

ねえ、アヤメ。

私はアヤメになりたかったわ。

私の妹。

私の光。

私ではない私。

私とはまるで違う少女。

ねえ、アヤメ。

今度もまた私はあなたの姉妹でありたいわ。

でも次はもっと色々な話をしましょう。

もっと、一緒に笑って。

もっと、一緒に泣いて。

もっと、もっと

……

もう二度と動かないツバキの姿は、鮮血で真っ赤に染まり、まるで白銀の世界に浮かび上がる椿の花のようだった。

寒椿。

それは、この白い雪の上に、妖しいほど美しい花。

美しく咲いた次の瞬間、ポトリと地面に落ちるその花を、人々は首が落ちるようだと気味悪がるが、本当にこの花は美しいのだ。

白の上に浮き出るような鮮やかな朱。

悲しくも、切なく、美しい。

そして、懸命に生きていたことを讃えるように咲き誇る花
。

直久は、必死に駆けた。

涙で前が見えない。

体が怠く、重くなつていくのを感じた。
思うように走れない。

それでも、必死に、足を前に進ませた。

……………っ！

心なしか、辺りの景色がぼやけていくように思える。涙のせいばかりではないようだ。

扉が見えた。アヤメのいる部屋の、あの、生け贄にされる少女たちの部屋の扉が。

だが、その時、襲いかかるように白い光が直久を包んだ。

直久ーっ！！

薄く開いた目に真っ先に飛び込んできたものは、青ざめたゆずるの顔だった。

「直ちゃんっ！！ 僕のことわかるっ？」

続いて和久の顔。

「……………っ」

弟の名前を呼ぼうとしたが、なぜかうまく声がでない。

「よかった、気が付いて」

ここは……………？

キョロキョロと視線だけを動かし、状況確認につとめる。それで、自分に抱きついていているゆずるの姿に気がつき、そつとゆずるの手を

どけて、ゆっくり身体を起こした。

戻ってきたのか。

ツバキの記憶の世界から。それは、同時にツバキの悪霊もいなくなっただけのこと。

満足した、もう十分だと。ツバキがそう思ったから、悪霊は苦しみから解放されたのだろう。
でも。

直久は唇を噛み締める。

「直ちゃん、大丈夫？」

心配そうに覗き込んできた和久に、無理矢理に笑顔を返したものの、悔しくて仕方ない。

結局、何もできなかった。アヤメを助けられなかったのだから。俯いた直久の手に、そつとゆずるが手を重ねる。ゆずるらしからぬ行動にびっくりして、反射的にゆずるを見上げる。

ゆずるは直久の握り固められた拳を自分の手で包み、そつと胸の高さまで持ち上げる。

直久はその拳の中に異物を感じて、ゆっくりと手を開いた。

「ああ……」

その金属の正体がなんだかすぐに直久にはわかった。目頭が一気に熱くなり、あつという間に涙がこぼれそうになる。

こんな錆び付いていただろうか？

いや、そんなことはどうだっていい。

「……………っ！」

直久は再びそれ　鍵を握り締めると、駆けだした。

「直ちゃんっ!？」

後から追いかけてくる和久の声も、今の直久には届かない。

早く、早く。

階段を駆け下りて、あの部屋に。

一刻も早く、あの部屋に　彼女の元へ急がないと！

直久は例の扉の前で一旦足を止めた。

鍵を持つ手が震える。

百五十年以上その役目を忘れて、錆付いた鍵穴は、なかなかその主を受け入れようとしめない。直久の気持ちばかりが逸る。

カチツ。

ようやく鍵が開く音が、廊下に響いた。

直久は一呼吸付いてから、扉をゆっくりと開いた。

「……………っ！」

あれから、いったい、どれほどの月日が流れたのだろうか？

彼女は、ずっと、ずっと、直久を待ち続けていた。

待っていたんだ。

「……………っ」

はらはらと、直久の頬を涙が伝っていく。

扉の内側には、何度も何度も引つ掻いた痕があり、剥がれた爪が扉に刺さっていた。

至る所にある黒ずんだシミは血だろうか。

扉のすぐ側で、彼女は力尽きていた。

「……………アヤメさんっ……………」

直久はたまらず、ボロボロの赤布を纏った一体の人骨の側で、膝を折って泣き崩れた。

苦しかったに違いない。

寂しかったに違いない。

それでも、ずっと待っていたんだ。

直久が助けにくるのを、ずっと。

力尽きても、こんな姿になっても……………。

自分だけを、待っていたんだ。

「こんなに待たせて、ごめん。……………ごめん、アヤメさん」

エピソード

「本当に、ありがとうございました」

何度も繰り返し頭を下げるオーナーに、優しく首を振る和久。

「もう大丈夫だと思いますが、また何かありましたら、いつでもおっしゃってください」

ペンションを覆っていた影もすっかりと晴れ、よしのの意識も取り戻されて、万事解決したわけだが、直久一人、なんだかすつきりしない。

旅行鞆を片手で担ぎながら、直久は眉間にしわを寄せ、和久に振り向く。

「カズ、ちょっと聞きたいんだけどさあ」

「何？」

直久は、自分だけに起きた体験をゆずると和久に話し聞かせていた。すると二人は何やら納得して、オーナーに仕事を終えたことを伝えたのだ。だが、直久はちっとも納得できない。

「確認するけど、ゆずるを襲った少女の霊はツバキだったんだよねあ？ その理由はアヤメさんをあの部屋から助けたすこと」

「それと、鍵を手渡すためにね」

「じゃあ、よしのさんやオーナーの妹とか、長女に生まれた娘が十六歳になったら魂が抜かれたようになっちゃうのって、それどう関係してたわけ？」

「それは……」

和久は口元に手を持っていき、親指で下唇をなぞる。

「ツバキさんもアヤメさんも、あの部屋に誰かを身代わりに入れなければ出られないと思っ込んでいた節があるんだ。特にツバキさんは、アヤメさんを自分の身代わりにして清次郎さんと逃げようとしていたわけで、身代わりがいなければ自分が逃げたのがすぐばれて

しまうという生前の思いが深い。強く思っていたことって、死んだ後も残ることがあってね。しかも、不完全な記憶として残ることが多くて、ツバキさんの場合、怨霊となってしまうたから、アヤメさんをあの部屋連れ出すためには、他の誰かを身代わりに入れなければならないと、強く思い込んだじゃったみたいなんだ」

「要するに、ツバキはアヤメさんをあの部屋から自由にやりたくて、身代わりによしのさんたちの魂を部屋に引き込んだってわけだな」

「そう。だから、直ちゃんが扉を開けたとたん、いくつもの魂が部屋から解放されて、飛び出て行ったのが見えたよ。よしのさんも同じ頃、意識を取り戻したしネ」

直久は、ふーんと頷く。

なんにせよ、ツバキも『怨霊の後悔無限ループ』から抜け出せたようだし、アヤメもしっかり埋葬してもらえるようだから、すべて解決なのかな、と直久は一人ごちる。

オーナーと話を済ませたゆずるが、怠そつに、鞆を担ぎながら双子の方に歩み寄って来た。

無造作に突っ込まれた茶封筒がコートのポケットから覗いている。

「行くぞ」

擦れ違いざまに短く言って、ゆずるは先に玄関をくぐった。それを追って直久と和久も外に出る。

直久が銀世界の眩しさに目を細めた時、八重が三人を呼び止めた。振り返ると、八重の後ろに日本人形のように綺麗な少女が静かに立っているのが見えた。

ドキツとして、直久はその少女を見つめる。すると、しっかりと瞳で見つめ返される。

「お姉ちゃんが直久さんにお礼が言いたいんだって」

「お礼？ 俺に？」

直久はきよとなつて、人差し指で自分を指す。それを受け、よしのがコクリと頷き、すーっと目の前に何かを差し出した。あの

部屋の鍵だ。

「これを。どうか、直久さんがお持ちください」

「だけど」

「忘れないで欲しいのです」

直久がまごまごしているうちに、よしのは無理矢理、直久の手に押しつけた。そして、ふふふ、と微笑んだ。眩しいほどに綺麗で、可愛らしい笑顔で。

「あれ？ お姉ちゃんって、直久さんと和久さんが見分けられるの？ ちゃんと二人を見分けられるのって、ゆずるさんくらいかと思っただわ」

八重の言葉で、そう言えば、と直久は思った。

迷うことなく今、まっすぐ自分のところ来た。普通、初対面の人とは自分と弟を、区別することなどできない。直久の両親ですら、日常的に直久と和久を見間違えるのだから。

腑に落ちない顔で、直久が首をかがけていると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。よしのだ。

「やあね、八重ったら。全然違うじゃない。見分けるも何も、直久さんと和久さんは別の人ですもの。ねっ、ゆずるさん」

急に話を振られたゆずるは、よしの一瞥しただけで、無言で眉を顰めた。

それから、二人は何だかんだ言ってバス停まで見送ってくれた。

三時間に一本、しかも午後2時が最終便だという、田舎のバスの中がバスがちゃんたら走ってくる。さすが山道。当然のように乗客もおらず、貸切状態である。

それを横目にしながら別れを言い交わした。

バスが止まり、ゆずるが乗り込み、続いて和久が乗ろうとした時、直久はふと思ひ出した。

「そう言えば、瞬さんは？」

その言葉に驚いて、和久が振り向く。

「直ちゃん！」

はっ、として直久は八重を振り返った。しかし、八重はぽかんとした顔をしていた。

「誰のこと？」

どうやら山神は、八重から全ての記憶を消し去ったようだ。よしの意識が戻り、八重の望みが叶えられた今、山神があゝの屋敷にのこる理由はない。きっと、高笑いでもしながら、どこへなりと行ってしまったのだろう。最後まで、よくわからないやつだ、と直久は心の中で舌打ちした。

直久が面白くないという顔をしていると、バスの窓を大きく開けて、和久が顔を出した。

「ほら、直ちゃん。早く乗って」

いつの間に乗り込んだのだろう。ゆずるも、バスに乗り込み、さっそく読書を始めている。

「はいよ」

弟に短く返事をする、直久は、姉妹を振り返る。

「じゃあ」

と、いつものキメ顔で、本人評価で、できる限りさわやかに短い別れを告げた。そして、くると、二人に背を向けたところで、何かに袖をつかまれ、引き止められる。何だ？ と首をひねって背後を確認すると、よしのが直久の袖を掴んでいるのが見えた。

「また来ていただけますか？」

「もちろんですよ。お困りでしたら、いつでもどうぞ。お呼び立てください」

直久がおちやうけて答えると、よしのは直久の袖から手を離し、ゆるやかに首を振った。

「仕事ではなく、思い出した時に、会いに来て欲しいのです」

「え？ おわっ」

よしのは、直久の背中を押した。転ばないように、一歩足を踏み出したことで、直久の体はバスのステップに乗り上げる。

「言ったのはそっちよ。私が百五十才若かったらって」

直久がバスに乗ったのを確かめて、バスの運転手が扉を閉めた。ぽかんとした、間抜けな顔の直久を乗せ、バスが重そうに走り出す。直久はよしのを目で追う。

よしのはふわりと笑顔になった。

「え？」

そう直久の口が動いたのが、よし人には分かったようだ。

小さくなるバスの姿を見つめるよしの顔は、まるで青空のように晴れ渡っていた。

「いきましょ、八重。話したいことがいっぱいあるわ」

姉妹が去ったバス通りの両脇には、純白の雪が静かに横たわり、道沿いに植えられた椿は、今にもはじけそうなほど蕾を大きく膨らませている。そう遠くない未来、見事な深紅の花を咲かせるために。

【完】

あとがき

はじめましての方も、そうでない方も、最後まで、寒椿双子天国にお付き合いました。ありがとうございました。日向あおいです。

本作品は、実妹である海土龍の著『寒椿』<http://ncode.syosetu.com/n5907d/>をリメイクしたものです。というよりも、私たち姉妹が『日向あおい』として活動した、本当の意味での処女作です。

『寒椿』よりも少し印象が変わったのではないでしょうか。

原作では中学生だった主人公たちも、『九の末裔（寒椿）』では高校生。少し、思慮深く……なっただけは？（笑）山神さんも、裏のある自由人な感じになって、私としては一番のお気に入りです。また登場させよう。レギュラーにしよう。そんなことを企んでいます。

なんにせよ、妹とあれこれ議論しながら執筆するのは始めてだったので、本当に楽しくエンディングを迎えられたと思います。ただ、執筆している本人も、どっちがどっちだったかわけが分からなくなるくらい双子双子……。また、当時中学生だった妹の思考はぶっこんでいて、それをつなぎ合わせるのに苦労しました。ええ、とっても。なんで、生け贄の前にお茶会？とか（笑）

原作と読み比べてなどなど、レビューや感想、お気軽にお願いします。一言感想歓迎

今後も、ゆつくりと漫才双子の『九の末裔』シリーズを私なりにリメイクしていきます。特に、寒椿の続編『春眠』では『将門シリーズ』のアノ人やソノ人が登場したり、と私も妹も楽しみながら、構想（妄想）し、プロットを作成しています。また、『九の末裔』

第二シーズンも考えているので、息の長~~~~い、応援のほど
よろしく願います。

2010・1・8 日向あおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3683i/>

九の末裔 ～寒椿～

2010年10月8日11時16分発行